

怪獣娘（絶） ～ウルトラマンZ参戦計画～

ただのファンだよ。

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

怪獣と人間が戦い、光の巨人達の手を借りた人間勢力が勝利してから数十年。地球には怪獣の魂を持って産まれてきた怪獣の生まれ変わりである少女達。怪獣娘が居た。

そんな地球に迫る二つの巨影。

Zを冠する新たな光の巨人と巨大怪獣。

この二つの存在が平和な地球に再び怪獣騒動を齎す。

これは怪獣の居なくなった地球で始まる二人の『Z』の物語。

「ご唱和ください、我の名を!!」

目次

ご唱和ください、我の名を（前編）	1
ご唱和ください、我の名を（中編）	7
ご唱和ください、我の名を（後編）	19
侵略者を討て！（前編）	33
侵略者を討て！（中編）	44
侵略者を討て！（後編）	51
大潜入!?!虹の魔境調査作戦！（前編）	64
大潜入!?!虹の魔境調査作戦！（中編）	70
大潜入!?!虹の魔境調査計画！（後編）	86
ティアー・ドロップ（前編）	101
ティアー・ドロップ（中編）	112
ティアー・ドロップ（後編）	120
バラージの矢（前編）	137
バラージの矢（中編）	144
バラージの矢（後編）	157
怪獣の魂（前編）	173
怪獣の魂（中編）	179
怪獣の魂（後編）	187

ご唱和ください、我の名を（前編）

とある休日の昼頃、幼馴染に呼び出された。

「おう、来たぞ」

すぐ近所に住む幼馴染の家の幼馴染の部屋——ベッドに机に本棚と特に変わった所の無い、シンプルな個人の部屋って感じ——に入れば普段から眠たそうな印象を与える目をした幼馴染がどこかソワソワとしながら待ち構えていた。

「それで、話って？」

突然、スマホに『話したい事がある』という一文だけ連絡が入れてきた幼馴染は不安と心配、でも何処か信頼してくれている様な目線を向けてくる。

「う、うん。……あの、ね」

「……………」

言い淀む幼馴染を俺はそっと黙って待つ。本人が覚悟を決めて言ってくれるまで。

これからの話は、きっと幼馴染にとってとても大きい事なのだろうと思うから。

「ぼ、ボクー」

「……………」

好きな人でも出来たのだろうか？友達と喧嘩でもしてしまったのだろうか？どんな相談でも受けよう、そして一緒に考え応援しよう。

どんなおかしな話だろうと受け入れてやる——

『『怪獣娘』だったんだ！』

「……………へあ？」

え？……………マジで!?

——『『怪獣娘』

それは今じゃ記録上でしか確認出来ない、嘗て地球に生存していた。あるいはやってきた怪獣、異星人の魂を宿した女の子の総称だ。

そして俺の幼馴染でもある彼女はその怪獣娘の一人らしい。宿している「カインユウソウル怪獣の魂」はアギラ。

俺の幼馴染である彼女の名前は『宮下アキ』。茶髪と眠たそうな目付きが特徴的な少女だ。

「……………おおー！」

「う、うう…っ」

エリマキとツノの付いたフードを被り、茶色の髪を橙色へと変え、お腹を出した服装と太い両腕と尻尾。怪獣娘に成る事で変化した服、どうやら獣殻シエルって言うらしい。一見唯のコスプレにも見えなくはないが、直で見るとわかる。有無を言わず納得させられる人間離れした存在感。

これが、怪獣娘…ッ！

「スゲエ、本物だ…！」

「そ、そんなにじつと見られると恥ずかしい」

「おおお！」

「ぎ、聞いてない」

現代では怪獣娘は一種のアイドルである。特別なチカラを持った怪獣娘は様々な業界で活躍している。テレビでも探せば簡単に見つかる程に。

そんな怪獣娘が目の前に居る！あ、写真撮ろ。パシヤリ。

「え!? な、なんで写真撮ってるの?」

「記念に」

「記念…!? け、消してー！」

「お断りだー！」

暫し怪獣娘兼幼馴染の姿を収めたスマホを奪い合い、他の誰にも見せない事を条件に許された。

「……………」

「んだよ。写真は消さねえぞ」

何か物言いたげな瞳を向けてくるアキに尋ねる。するとアキは小

さく溜息を吐くと口を開いた。

「……怖がつたり、しないんだね」

「ん？怖がる？アキを？……なんで？」

「だ、だって。その、普通の人とは違うんだよ。力が凄い、とか。怪我とかさせちゃうかもしれないし」

「……ん〜。別に」

「別に、って」

いや、だって、

「アキはそんな事しないからな」

「……！」

「アキは誰かを故意に傷付けたりしない！これまでも、そしてこれからも。だから怖がる必要はない！はい論破!!」

何故ならそれが俺の幼馴染だからだ！

「……ふふ、なんだよそれ」

「……？事実だけど？」

「あはははははは!!」

むう、何がおかしいのかわからん。

「あはは……はは。うん『ゼット』」

「ん？」

「——ありがとう」

「……」

まあ、いつか。

アキの笑顔見てたらどうでもよくなつたしな！

「おうツ。どういたしまして、だ」

『光国^{みつくに} ゼット』それがボクの幼馴染の名前。黒い髪と銀色の瞳が特徴の男の子。いつも力強い言動と表情で小さい頃からボクや他の子達を引っ張ってきたリーダー。いつも優しく、頼もしくて、その、か、かつこ……いい、ボクの、幼馴染。

「へー、ほー、なるほどなるほど」

そんなゼットはスマホとボクを交互に何度も視線を移しながら納得する様に唸っている。

「どうやらゼットはインターネット上の怪獣アギラの情報とボク、怪獣娘アギラを当て嵌めているみたい。その証拠に時折、角やエリマキがどうかと聞こえる。目を輝かせている姿は『男の子』って感じで微笑ましい。」

「……」
ボクに夢中になってくれている事がとても嬉しい、けど正確には宮下ボクアキじやなく怪獣アギラに夢中になってると思うと少し、複雑。

「いいよなー、アギラって」

「……ねえ」

「うん？」

ボクはゼットに一つ、疑問を尋ねてみた。

「なんで、そんなに怪獣娘が好きなの？」

「……うーん」

ボクの問いにゼットは腕を組んで悩み始めた。あ、あれ？ボク変な事聞いちゃった？

「別に怪獣娘が特別好きって訳じゃないぞ」

「え。…そうなの？」

「おう。俺は怪獣娘の元になった怪獣。より正確には言えば怪獣と戦った光の巨人が好きなんだ」

「光の、巨人」

たしか、それって。

「ウルトラマン」

「そう、ウルトラマン。俺らが生まれる前、数十年か数百年前。まだ怪獣と人間が戦ってた時に突如現れ怪獣を倒した光の巨人達。様々なウルトラマンが幾つもの時代を跨ぎ一人ずつ戦った。時には他のウルトラマンも現れて協力して戦った。やがて地球の怪獣が全て倒された事で彼らは帰っていた。そして今の時代になった」

じつとスマホの画面を見つめるゼット。今、彼のスマホには何が写っているんだろう。

「そのウルトラマンが戦ってる映像を初めて見た時な。スツゲエ興奮したんだ。まるつきし正義のヒーローだからな。それからいろんなウルトラマンを調べたよ。初めて地球にやってきた赤と銀色のウルトラマンや初代にそっくりなウルトラマン達。初代とは違う赤い身体に黄色い目のウルトラマン達。他にも色と一緒に能力まで変わるウルトラマンや面影こそあるものも姿が変わるウルトラマン。めちゃくちゃカッコ良かった!!」

目を輝かせて熱く語るゼット。楽しそうに話す様子に自然と惹きつけられる。やがて、冷静になったゼットは顔を少し赤らめながら恥ずかしそうに頬を掻いた。

「で、ウルトラマンを調べてるうちに怪獣にも色々な奴がいる事を知った。大昔から地球に居た恐竜みたいなタイプ。宇宙からやってきたタイプ。地球に侵略に来た宇宙人も怪獣のカテゴリーに含まれてるしな」

「中でもな、ゼットはそう言っ続けて続けた。

「ウルトラマンと一緒に戦った怪獣もいたんだよ。それがアギラ」

「……」

一応、知ってはいる。ウルトラマンの次に地球に現れた二人目のウルトラマン——ウルトラセブンと共に戦った三体の怪獣の内の一
体。

「でも、一度も勝った事、ないよ」

「——じゃあ弱いのか?」

「え?」

真剣な顔だった。さっきまでの楽しそうな表情は無くなって真面目な顔で、真っ直ぐな目でボクを見ていた。

「勝った事がなければダメなのか? 負けたら意味がないのか? ——
違うだろ。誰かの為に戦った事が大事なんだ」

「……。もしかしたら、命令されて戦ってただけかも」

「それは無いな」

「…な、んで、言い切れるの?」

すごく当然な事のようにゼットは言った。

「だって、お前が違うからだよ」

「お前は、誰かに頼まれれば一生懸命になれる奴だ。『自分しか出来ないなら自分がやらなくちやいけない』って想える奴だ。怪獣娘が怪獣の魂を引き継いだ存在だってなら怪獣であるアギラだって誰かの為に戦ってた筈だ」

あ、ああ、ううう…ツ！

恥ずかしい、顔が熱い。でもそれ以上に。

「う、ううう……ツ」

「つて、うえええええ!? な、なんで泣いてんだ！俺酷い事言っちゃったか!?!」

「ち、ちがう、ちがうよお…」

嬉しいんだ。涙が止まらないぐらい。嬉しいって気持ちか、わかってくれたって気持ちか！沢山、沢山沢山溢れてくる。多分、これはボクじゃなくてボクの中の怪獣の気持ち、なんだと思う。

でも、それもボクの気持ちだ。ボクが感じた想いなんだ。

「ええつと、ええつと。一体どうすりゃいいんだよお」

オロオロと顔を左右に動かした後に困った様に頭を抱えるゼツト。そんな姿も。

「…ふふふ」

ボクね、やっぱりゼツトの事が好き、だよ。

ご唱和ください、我の名を（中編）

地球の周辺の宇宙。地球の衛星である月の月面にて閃光が幾つも弾け、大きな爆発が起こる。そして爆発の中心地から一体の宇宙怪物が姿を表す。

それは凶暴宇宙鮫と呼ばれる怪物、『ゲネガーグ』だ。

ゲネガーグは背中のバーニアの様な器官からエネルギー噴射する事で宇宙を高速で移動している。

そしてゲネガーグを横から攻撃する巨大な影。銀と青、そして少しの赤いカラーリングの巨人。胸の中心には青く光る『Z』の様なマークが。

その巨人の名は『ウルトラマンゼット』。様々な宇宙の平和を守る宇宙警備隊の若き新人メンバーだ。

「ゴアアアアアアアア!!?!」

「デュアアッ!」

ゼットの攻撃を受けたゲネガーグは正面にゼットを捉えると別名にも表記されてる凶暴性を遺憾無く発揮してゼットに襲い掛かる。鼻先の大角でゼット刺し貫かんと突撃し、大きな顎でゼットを噛み砕こうと迫る。

ゼットも負けじと格闘戦で応戦し、頭部にあるナイフの様な形のトサカにエネルギーを集結させて光の刃を幾つも飛ばす。

「ギユオアアア!!」

ゲネガーグがゼットから距離を離すとその巨体が赤く光る。恐ろしい破壊的な光を帯びたゲネガーグは幾条もの光線を背中のバーニアの様な器官とは別の器官から放った。

「ジュ…ア」

赤い光線群全てが曲線を描きながらゼットに迫る。まだ未熟なゼットは避けられない事を悟り、せめてと腕で頭部を守る。

「シヤアッ!!」

ゲネガーグの放った光線群がゼットのすぐ目の前へと迫る瞬間、ゼットの前に割り込む新たなウルトラマンの姿。新たなウルトラマ

ンは身に付けていた青いマントで光線群を全て受け切るとマントを
翻し残光を払った。

『危ねーから手えだすな!』

新たなウルトラマン、『ウルトラマンゼロ』は新人であるゼットには
荷が重いと下がらせようとする。

そしてそれに反論するのはゼットだ。

『また半人前扱いして!俺も宇宙警備隊ですよ師匠』

二人のウルトラマンの会話など興味などない——言葉を解する知
能があるのかすらわからない——ゲネガークは大口を上げて咆哮と
共にエネルギーブレスを放った。

二人のウルトラマンは左右別々に分かれてゲネガークへ向かう。

『お前を弟子にとった覚えは無^ねえ。それにお前なんか俺からしたら三
分の一人前だ!』

『さ、三分の一!?う、ウルトラショック!?!』

「オガアア!!」

光線群、エネルギーブレスときて次にゲネガークは体内に呑み込ん
でいた物を吐き出した。

『こいつ、小惑星を飲み込んでやがる…!?!』

ゲネガークが吐き出した物、それはまさかの小惑星!

まだ怪獣との戦闘経験の少ないゼットは予想外の出来事にゲネ
ガークに背を向け硬直していた。

——そして、ここが運命の分岐^{ターニングポイント}点。

本来ならゲネガークは次の攻撃をゼットではなく、自身に迫るゼ
ロに向けて放つのだが。

『ゼット!よそ見してんな!!』

『ッ!!なっ!?!』

ゼロの言葉にゼットは急いで振り返る。すると目前に迫る不思議
なエネルギーを放つ物体。

なんと、ゲネガークはゼロではなく隙を見せるゼットに向けて攻
撃を放ったのだ。

『うおっウルトラ危なっグッ!?!』

ゼットはなんとか紙一重で避ける事に成功するが、なんとゲネガーグがゼットに突撃した。ゲネガーグはゼットを超えて自身が吐き出した物に向かつて飛び、ゼットもゲネガーグと同じ方角に吹っ飛ぶ。『アレは、まさかブルトン!?!』

ゲネガーグの向かう先、それは次元を狂わせ操る隕石の様な形をした『ブルトン』という怪獣だった。

ゲネガーグはブルトンを脱出用として放ったのだ。今までゲネガーグの腹の中に閉じ込められていたブルトンも意趣返しにと異次元へ続く穴を開きゲネガーグを吸い込んだ。そしてゲネガーグと同じ方角に

吹っ飛んでいたゼットも巻き込まれる。

『うわー!?!し、師匠!?!』

『クソッ今からじゃ間に合わねえ! だったらせめて!』

ゼロが自身が持っていたアイテムをブルトンの開けた異次元穴に向けて投げた。

ギリギリゼロの放ったアイテムが異次元穴に入った瞬間、ブルトン共に姿を消した。

『……クソ、待ってるよゼット。すぐに行く』

ゼロはいつまでも弟子だと言い張る新人ウルトラマンの為に左腕の白銀の神々しいブレスレットを輝かせた。

『ウルティメイトイージス!!』

ボク、アギラの怪獣娘だとゼットに告白してから暫く経ったある日。ボクはゼットと一緒に渋谷にやってきた。

「以前、同じ怪獣娘のミクちゃんとうインちゃんの二人と一緒に来たんだ」

「へえ、確かミクラスとうインダムの怪獣娘なんだよな」

「うん」

「凄い偶然だよな、同じカプセル怪獣の魂を宿した怪獣娘が揃うなん

て」

ゼットは「いや、寧ろこれは必然なのか？」なんて呟きながら前回ミクちゃんとウインちゃんと寄ったのと同じ店のクレープをかぶりついていた。因みにゼットの頼んだクレープは生クリームとチョコソースだけのシンプルなもの。

「……………ふふ」

「ん？」

「なんでもないよ♪」

最近あつた話をなんて事のない様に話しながら二人で街を歩く。なんだか、その、デート…してるみたいで嬉しい。

昨日、ボクから誘い悩む事なく了承したゼット。いつもは巢鴨で遊んでるんだけど、今回勇気を出して『若者の街』って感じの渋谷に来て良かった。

「むぐむぐ、んっぐ……………良し！じゃあ次どこ行くよ？」

「うーん、そうだなあ…」

「じゃあ、色々見て周ろうぜ！渋谷は広いからこのままじゃ周り切れないぞ、ほれ逃げ逃げ」

「え、あ、ちよつと！」

ゼットは手を差し出してボクの手を取ると駆け出す。ゼットに引っ張られる形になったけどボク、手を繋いでるんだ。

「も、もう。どれだけ急いでも全部は周れない」

その時だった。空に大きな穴が開いたのは。

「な…に、あれ？」

穴の中はまるで宇宙の様だ。黒の中を光の粒が高速で動きぐにやぐにやと歪んでいる。なんだかテレビの砂嵐を連想させる様な見た目をしている穴。

「アキ、離れるぞ」

「ぜ、ゼット？」

周りの人達皆が空の穴を見上げ、沢山の人がスマホを向けて撮影してたりして足を止めてる中、ゼットだけはボクの手を引いてその場から離れようとしている。

「イヤな予感がするんだ。少しでも遠くに離れるべきだ」

「……でも」

ゼットはボクを連れて離れようするけど、ボクは怪獣娘だ。もしもゼットのイヤな予感が当たったのならボクが皆を守らないと！

ボクがそう決意した瞬間、ポケットからバイブ音と振動が伝わる。

「ごめんゼット」

「あ、おい！アキー！」

ゼットと繋いだ手を離してポケットからスマホの様な機器『ソウルライザー』——怪獣娘の変身を安定させ暴走を抑制する機能が備わっている——を取り出して駆け出す。

ソウルライザーの画面にはWARNINGの文字が点滅している。

「ソウルライド、『アギラ』!!」

ボクはソウルライザーを使い怪獣娘の姿へと変身した。

「あいつ……ああ、くそッ」

怪獣娘へと変化したアキが人間離れしたスピードで走り、もう豆粒程の姿も見えなくなった。……あいつには怪獣娘としての力があるから何かあったとしても大丈夫だと信じよう。

「それにしても、なんだよアレ」

俺は更に穴を見上げる。やっぱりイヤな予感がする。

「……ん？」

ふと何かを蹴り視線を足元に向ける。……なんだ、これ？

俺は足元に落ちてる物を拾った。黒と青の不思議な機械？それと三枚のメダル。メダルにはそれぞれ横顔が描かれて……ってこれは!?

「すげえ！ウルトラマンの横顔だ！」

この三枚のメダルに描かれている三人を俺は知ってる。

ウルトラセブンとウルトラマンレオ、それにウルトラマンゼロだ！

「なんかのグッズか？こんなの知らねえ、レアもんだ！」

空の穴の事などすっかり頭から抜け出してメダルに夢中になっていた、その時だった。

空の穴から巨大な影が大きな音を立てて渋谷の街に落ちたのは。

「ギュゴオオオオアアアア!!」

砕けた道路や建物の粉塵が舞い、直後に穴から現れたソレの咆哮によつて吹き飛んだ。

「で、でけえ」

それは、怪獣だった。巨大で凶暴な人類の脅威となる存在。

地球から居なくなつた怪獣が、再び地球に現れた。

国際怪獣救助指導組織、通称『GIRLS』。

GIRLSとはその名の通り何も知らない怪獣娘を暴走しない様に保護、カウンセリングを行い、同時に怪獣娘の研究。更に怪獣娘が社会に溶け込めるように支援する組織である。

そんなGIRLS東京本部司令室にて、本部の最高責任者である、左右に分けて結ばれた赤い長髪と服と呼んでいいのか怪しい格好の獣殻シエルに身を覆う、友好珍獣の怪獣娘『ピグモン』がモニター越しに東京の渋谷で暴れる巨大怪獣を見詰めていた。

「一体、何が……!?!」

「どこからどう見ても怪獣、ね」

ピグモンの横に立つのは、僅かに黒が混じつた桜色の長髪にアンテナのような角、白と黒の独創的な獣殻シエルに身を包んだ、豊満な胸の露出の大きい美女が、宇宙怪獣の怪獣娘『エレキング』だ。

「現場近く、アギラさんから連絡です!!」

「アギアギから!?!」

「出て」

「はいー」

アギラからの連絡、それは渋谷に現れた怪獣による破壊活動の様

子。ピグモンはアギラに住民の救助を任命し、エレキングは司令部の職員にGIRLS所属の怪獣娘達、その中から住民の救助活動と避難指示。そして怪獣と戦闘が行える者に指示を出す様に命令した。

「頼むわよ、ゼットン」

「——了解」

ソウルライザーを耳から離して仕舞うと、自身が立つとあるビルの屋上から暴れる怪獣に視線を向ける。倒すべき敵、明らかに規格の違う巨大な化け物に彼女は挑まなければならぬ。

——何故なら、彼女こそが最強。世界中の怪獣娘の中でも最も強力な怪獣の魂を宿しているから。

黒い髪（額には黄色の結晶）、黒い姿（豊かな胸のみ主張する様に黄色）、黒を基色とする獣殻を纏う彼女の名は『ゼットン』。

嘗て、ウルトラマンを倒した事のある最強の宇宙恐竜の怪獣娘だ。

「これより、怪獣と交戦を開始する」

ビルの屋上から忽然と姿を消すゼットン。

その直後、街で暴れる怪獣を幾つかの爆発が襲った。

「ギョオオオオ!!」

感じるのは熱と衝撃。突然の痛み^{ダメージ}に怪獣が吠えた。

「……………」

身に宿す怪獣の魂のチカラにて空に浮かぶゼットンは、自身の周りに複数の火炎弾を生成すると一斉に怪獣に向けて放った。

ドンドンドンドン!!と爆音を立てて怪獣の身体を火球が打つ。火球が迫る方角を振り返る事で怪獣は漸く敵の姿を認識した。

——こんな小さき者が我に歯向かっているのか？ ツ許さん!!

「ゴオオオオ!!」

怪獣、ゲネガールグは大きな顎を開きゼットンを喰らおうと口を閉じる。が、瞬間移動を可能とするゼットンには脅威にはなり得ない。

ゲネガールグの背後を取ったゼットンが額の結晶にエネルギーを終

結させる。『ピポポポポ…』と独特の音を鳴らしながらチャージし、放たれるのは、

「一兆度の火球、アナタは耐えられる?」

『トリリオン・メテオ』

巨大怪獣の悲鳴が轟き響く。頭が割れそうな程の大音量に耳を押さえながらも怪獣娘の一人が行う避難指示に従って歩く。

振り返れば見えるのは巨大怪獣と戦う怪獣娘ゼットンの姿。

「……」

比べるのもバカバカしい程のサイズの差。50m級のバケモノと2mに満たない少女。だというのに戦闘が成立している。それだけ怪獣娘の異常さが浮き彫りになる。

「……」

やっぱり、心配なのは幼馴染^アの事。彼女に宿る怪獣の魂、アギラにはゼットンの様な空を飛ぶ力も巨大怪獣にダメージを与えられるほどの攻撃手段も無い。

空も飛べなければ炎を吐く事も出来ない、身体能力も数多の怪獣の中では並レベルだろう。あるのは俊敏な動きと鋭い角。

(怪獣娘に成ったばかりのお前に出来る事なんか限られてんだ。…頼むから無理、すんなよ)

俺は、何故かさつき拾った変な機械に手を伸ばしていた。自分ですら訳もわからないが置いてはいけけない気がした。

「——え?」

拾った機械から手を伝って何かが流れ込んだ。ドクンと、心臓が一度大きく鼓動し無意識に空を見上げた。

空に浮かぶ穴から巨光が落ちた。

「……シエア」

それは巨人だった。

鉄仮面の様な顔に煌めく銀色のボディ。胸には赤く点滅するZの様な文字。

その姿は、間違いなく。

「ウルトラ、マン」

膝を突いた姿勢から立ち上がり、怪獣に向かってファイティングポーズを取るウルトラマン。

「……はぁ……はぁ」

胸が熱い、心臓が痛い程に煩い。俺じゃない俺が叫ぶ。「何やってんだよ早く走れよ!!」と。

「っ！」

「あーちよつと君!!」

俺はこの胸の叫びに抗う事なく列から抜けて走り出した。怪獣娘さんの制止の声も耳に入らない。

「ジュアッ!!」

ウルトラマンが拳を怪獣に叩き付ける。拳から始まり、チョップに蹴り、組み付いてからの膝蹴りや肘打ち。格闘戦を果敢に仕掛けるウルトラマン。

「グオオオツ!!」

「デュア!？」

勿論怪獣もやられっぱなしにはならない、反撃する。首を振ってウルトラマンを弾き距離を離れたところで怪獣の背中が発光する。

「ジャア!?……ディアー！」

ウルトラマンは怪獣の背中の中へ光に反応して駆け出す。けれど、一瞬足りず光が解放され——ようとした瞬間、飛来した複数の火球が着弾し爆発した。怪獣が悲鳴を上げ、光が収まる。

「……アナタは味方、でいいのね?」

火球を放ったのは勿論、ゼットンだ。ゼットンはウルトラマンに視線を合わせるとウルトラマンの肩に降り立つ。

「私が援護するわ」

一言、告げると彼女の姿が消える。またテレポートしたのだろう。

「グウ…グゴオオオ」

戦いはウルトラマンとゼットンの優勢だった。ゼットンの援護は的確で、怪獣に思い通りの攻撃をさせなかった。

このまま、ウルトラマンとゼットンが怪獣を倒してくれるかと思つた矢先、ウルトラマンが膝を突いた。ウルトラマンの胸の発光機関カラータイマーが赤く、そして早く点滅している。

その意味は即ち、ウルトラマンの活動限界を告げていた。

「なっ!?!」

これにはゼットンも驚き動きが固まった。

本能か、それとも策略か、その隙を怪獣は逃さなかった。

「ゴオオオオ!!」

「!?!ジャア!?!」

「ッ!!」

背中から炎を噴射して怪獣がウルトラマンに突進する。ウルトラマンは避ける事が出来ずに直撃し倒れる。

そして怪獣は、すかさず次の手に移る。背中を発光させて光弾をゼットンに向けてばら撒く。

「……………づうー!」

ゼットンは火球を複数生成して放ち、光弾を相殺する。一発でも撃ち漏らせば街に、住民に被害がいく。ゼットンは端正な顔を歪ませて火球を放ち続ける。空中で弾ける火と光の花が幾つも咲く。

「グウウ、ゴオオオオツ!!!」

「はあ…はあ…、くっ!」

顎を大きく開いてエネルギーが集結する。ゼットンは疲労を隠す事が出来ない状態ながらも上空へ飛んだ。自分を狙っているのなら被害を無くす為に空に撃たせる必要がある、自身はテレポートで回避すればいい。

「グウ…グフ」

が、怪獣は知っていた。彼女が何を守っていたのかを！

怪獣がゼットンから背を向ける、そして振り向いた先は避難所の一つ。

「!!」

「ゴガアアアッ!!!」

一切の慈悲無く、怪獣のエネルギー砲が放たれた。ゼットンはレポートで割り込むと巨大なバリアを張ってエネルギー砲を受ける。

「ぐううう……ッ!?!」

受けた瞬間に全身をとてつもない衝撃が掛かり、バリアに罅が入る。ピキピキと音を立て罅は広がり小さな穴が空いて、エネルギーが漏れる。

「う、ああ、くう……」

バリアの全体に罅が走る、全身を押し潰される様な衝撃。純粋な質量の差がここで響く。寧ろゼットンはよく耐えた方だろう。

だが、それもここまで。意識が薄れゆく、もうダメだ。弱音が生まれジワジワと広がる。何故耐える?もう諦めたらいい、大丈夫、痛みは感じる間も無く自分を構成する全てが消えて無くなる。責任も、関係も、全て失くなる。

——トン……ん、ゼットンさん!

「ツツ!!」

アギラの声、自分に真っ直ぐな目を向けてくれる彼女の声が聞こえた。

小さく視線を下に向けた。

アギラだ、真下のビルの屋上からこちらを見上げていた。その瞳には揺るぎない信頼があった。

「頑張ってください!ゼットンさーん!!!」

アギラ、ゼットン
彼女は私を信じていた。

私の為じゃない、知らない誰かの為でもない。私は、私を信じてくれる後輩の為に、諦め負ける訳にはいかない!!

「ツツ!アアアアアアアアああアアアアああアアアアああアアアア!!!」

——気合でどうにかなる程、現実には甘くは無い。彼女が成したの

は数秒多く保たせたただけだ。
だが、その数秒が奇跡を起こした

光が満ちる、希望が煌めく。

——…しよ……ださい、……を。

新たなウルトラマン伝説、その幕開けを告げる閃光。

——…昌和……ください、我……を！

刮目せよ、鮮烈な光の巨人の姿を！

——ご唱和ください、我の名を！！

【ULTRAMAN Z】

【ALPHA — EDGE】

始まりの刃をその身に刻め！

ご唱和ください、我の名を（後編）

——時は、僅かに遡る。

「はあ…はあ…はあ…」

走る、走る走る。肺が痛い、呼吸が乱れる、何度も転びそうになる。でも止まらない、止まらない。

今は一瞬一秒を争う機会なんだ！俺はそう自分に言い聞かせて足を進める。そして目的の場所に辿り着いた。

「う、うるとゴホゴホ…くっ、う、ウルトラマン！」

ピーオンピーオン、と機械的な音声と赤く点滅する胸のカラータイマーを鳴らして立ち上がるうとするも、失敗しているウルトラマンに声を掛けた。

「ジャ、ジャア…」

「!!……っ」

ウルトラマンが俺の声に気付いて俺を見る。やっぱり近くで見るとめちやくちやデカイ。俺は臆する気持ちをぐっと我慢して話し掛ける。右手には拾った謎の機械、左手には三枚のメダルを持って。

「これ、アナタの物だろ！これがあつたらあの怪獣に勝てるのか!!」

見た事も無ければ用途もわからない、そんな機械とすぐそばに落ちていたウルトラマンの横顔が描かれたメダル。そして現れたウルトラマン本人。無関係な筈がない。俺は確証の無い確信を持ってウルトラマンに言葉を発する。

「ジャア!？」

そして実際にウルトラマンは「何故それを」とでも言いたげに驚いた反応を見せた。やっぱり、コレは元々ウルトラマンが持っていたアイテムだったんだ。

「これ、返す。だから立ってくれ頼む！俺には出来なくてもウルトラマンなら出来——」

「……ジャア」

「る……って、え？」

だったらこれを返せばあの怪獣を、俺がそう思い機械とメダルをウルトラマンに渡そうとした瞬間、ウルトラマンから意を決した様な反応を見せたと思えばウルトラマンは目も眩む様な光となり俺を呑み込んだ。

——…人。目を開けなさい、地球人。

「——ん？……はっ!？」

反射的に腕で目を守る様に動かし目を閉じていた俺は、不思議な声に呼び掛けられてゆつくりと目を開いた。

「どこだ、(トラン)?」

視界に映るのは暗い空間だった。見渡す限り果てはなく、先の見えない空間が続いている。更には赤、青、黄色と不思議な光がふわふわと浮いている。

『こちらです、地球人』

「え？…つてうお!？」

背後から声が聞こえて振り返れば、さつきまで倒れていた筈のウルトラマンが立っていた。

『突然の事で混乱していると思うが話を聞いて欲しい。私はウルトラマンゼット』

「ウルトラマン…ゼット…」

『頼みがある地球人。今の私はウルトラヤバい状況に陥っております』

「……ん？つてそれじゃあどうすれば!？」

『一つだけ手はある。私とお前が一つに成ればもう一度戦える。手を組まないか？私もお前の力が必要なのでございます!』

「……」

…聞き間違い、じゃないよな？やっぱり、何というか。

「言葉遣い、変じゃね?」

『——え、マジ?参りましたな、地球の言葉はウルトラ難しいぜ』

「えっと、それは一先ずどうでもいいや。兎に角、アナタと手を組めばあの怪獣を倒してアイツや家族、それに皆を守れるんだな!？」

『ああ、守れる…!』

言葉遣いこそはちよつと変なウルトラマンだけど、今の言葉には信頼出来る重みがあった。だったらやるべき事は一つだけだ!

「やる…俺がアナタの力になる…どうすればいい!!」

俺の返答にウルトラマン——ゼットは頷いて眩い光へと変化した。光は小さく一点に集結して形となり俺の手元に降りてきた。それはさつき拾ったアイテムと同じ物だった。

「これって」

『さあ、その『ウルトラゼットライザー』のトリガーを押します』

ウルトラマンのアイテム、『ウルトラゼットライザー』の取手を握れば親指で押せる位置にボタンがあった。……トリガーって、これだよな?

よ、よし。俺は、ゼットライザーのトリガーを恐る恐るだが意を決して押した。

すると、俺の目の前にZの様な形の光が展開され、人一人通れるぐらいの門に変わった。

『その中に入れ』

「りよ、了解」

俺はゼットの声に従って門の中に足を踏み入れる。

門の中は不思議な空間だった。幾つもの光が幾何学模様でも描く様に駆け巡っている。

その光の中から一枚のカードが現れる。カードにはゼットの横顔と、俺が描かれていた。なんで、俺?

『その『ウルトラアクセスカード』をゼットライザーにセットだ』

ゼットにセット……いや何でもない。

俺は言われた通りにゼットライザーにアクセスカードをセットする。

《Zetuto Access Granted》

「うおっ!お、おお?」

機械的な音声に困惑していると光が俺の腰に集まり形になる。何かのケース、って言うよりはホルダーに見える。開けてみると、中に

はさつき持っていたメダルが三枚入っていた。

『ゼロ師匠、セブン師匠、レオ師匠のウルトラメダルだ。スリットにセットしちやいなさい。師匠達の力が使える筈だ』

「了か……ん？師匠？……師匠!?ゼットってあの有名ウルトラマン達の弟子なのか!？」

『え？あ、ああ』

「す、すげえ！ウルトラマンの弟子、それも三人も!!うおー！ヤベー！」

『い、いいから早くセットしちやいなさい!』

「え、あ！ご、ごめん」

俺は急いで三枚のメダルをそれぞれのスロットに入れる。順番はウルトラマンゼロ、ウルトラセブン、ウルトラマンレオの順だ。

チラリと目線だけゼットに向けると何やらもじもじしてる。もしかして、照れてる？

『セットしたな？じゃ、じゃあ次はメダルをスキャンだ』

「えつと、あの、俺が言うのもなんだけどもつと急がないか？」

『安心しろ、この空間は時空が歪んでいるからここでの一分は外での一秒だ』

「あ、そうなのか。なるほど」

じゃあ今だと、現実じゃ十秒も経っていないのか。

俺はゼットの言葉に少し安堵すると言われた通りにゼットライザーを動かしてメダルを認証させる。

《ZERO.》《SEVEN.》《LEO.》

認証し音声が届き終わると、空間を駆け巡る光から幾つか軌道を変えて集まる。集まった光は形を変えてゼットに変わった。

『よし！なら俺の名を呼べ!』

「ウルトラマンゼット」

『あ、いえ。もつと気合を入れて言うんだよ!』

「お、おう」

『よし、じゃあもう一度。今度はウルトラ気合入れていくぞ』

ゼットが腕を広げて胸を張る。あたかも自身を主張するかの様に。

『ご唱和ください、我の名を!』

あ、いや、多分意図して自分を主張してるわ。

『ウルトラマン、ゼエツト!!』

よ、よし。これで変身して俺がああな怪獣を倒すんだ。

ゼットライザーを握る手に力が籠る。俺は声の限り叫びゼットライザーを天に翳した。

「ウルトラマン!ゼエエツト!!」

.....

何も起きない。もしかして、不良品、とか?

『トリガー!トリガーサイゴニオスノ!』

「.....これ?」

『ソウ、ソコ』

.....。は、はは、はや、

(早く言えええー?!?!?)

俺は恥ずかしさに赤面しながら半分八つ当たり気味にトリガーを強く押した。

トホホ、こんな締まらない変身したの俺だけじゃないの?

どこからともなく現れたのはメダルの元となった三人のウルトラマンの虚像^{ビジョン}。それぞれが声を上げて光に成ると飛び交いやがて一点に集結し、その地点から一人のウルトラマンが現れ巨大化する。

素体こそはウルトラマンゼットのまま、上半身に青と銀、下半身は赤と銀のカラーリング。胸と肩のアーマーはそのままに腿にはプロテクター。

一番の違いは頭部にある。額にはウルトラセブンと似たビームランプと頭頂に元からあるトサカの左右にウルトラマンゼロのゼロスラッガーの様な双刃。

——宇宙拳法、秘伝の神業。

【ULTRAMAN Z】

【ALPHA — EDGE】

「ジュワアツ!!」

そして、時は重なる。

ゼットンが張ったバリアが破れる瞬間、怪獣——いや、ゼットと一体化した今なら奴の名前がわかる——ゲネガークに飛び蹴りを見舞わせ、そのまま自分でもびっくりする程の超スピードで力尽きて落下しようとするゼットンさんを掌に乗せる。

「はあ……はあ……」

よかった、どうやら疲れているだけで怪我も無さそうだ。俺はゼットンさんを優しく心掛けて安全な場所に降ろす。

(お疲れ様です。後は任せてください！)

他の怪獣娘の子がゼットンさんを支えるのを確認すると、つてあれはアキ？アキはゼットンさんに肩を貸しながらもこちらをじっと見つめてくる。

「……アナタは？」

「ジャア」

どうやら人の言葉は話せないみたいだ。俺は立ち上がるとアキ達に背を向けてゲネガークに向けて足を進めた。全身に満ち溢れるウルトラマンの光を感じながら。

(すげえ、これなら戦える！)

『息を合わせて戦うぞ！地球人!!』

(応ッ!!)

俺はゼットの子の言葉に気合いを込めて応える。ゼットの子の口癖を借りるとするなら。

(覚悟しろよ？今の俺は、いや、俺達はウルトラ強えぜ！)

また現れた巨人。よく見ているときっきの巨人と似ている。まるできっきの巨人に色々付け足した感じ。見渡すときっきの巨人はどこにも居ない。多分、あの巨人はきっきの巨人が変化した姿なんだ。

「……………」

でも、何故だろう。あの巨人が、巨大な怪獣に向かって歩き出した巨人と、ゼットが重なって見えた。

……ううん、そんな訳ない。それより今は早くゼットンさんを連れて離れないと。

否定した筈なのに消えない想い。

ボクは無意識の内に祈っていた。

——どうか、あの巨人が勝ちます様に。

起き上がるゲネガーグを正面に捉えると静かに構える。これはメダルを通して与えられたウルトラマンレオ、そしてレオの弟子でもあるウルトラマンゼロの宇宙拳法の構えだ。

「ジイ…ヤア…」

適度な脱力、無駄な力みを削ぎ落とす為に息を吐き、動じる事なく無くゲネガーグの突進を片手で受け止める。腕に伝わる衝撃が腕から胴へ、胴から腰へ、腰から足へ分散しながら流れ最後には地面の確かさに吞まれて消える。

完全に停止したゲネガーグに今度はこちらから反撃に正拳を放つ。ガンツと確かな手応えを感じゲネガーグが怯むのを察する。続けてもう一発打ち込んでゲネガーグを後退させ、その隙に再度構えを整える。

「ギイガアアア!!」

「……………ジツ」

ゲネガーグが顎を広げて噛み付こうとしてくるので今度は両手で受け止める。右手はゲネガーグの鼻先の角を、左手で下顎を押さえて動きを止める。するとゲネガーグは顎を振るう事で俺の手を払い除け、今度こそと突進してくるが角の側面、続けて大きく開けた口内、頬の内側に裏拳を叩き込む。口内の痛みに堪らず怯んだゲネガーグの胴体に蹴りを一発。左腕で顎を押し上げ胴体による右腕によるチョップを数発打ち少し距離を取る。

「グウウ…ッ!!」

「……………」

常に構えを崩さず、冷静に相手を見据え、如何なる攻撃にも対処できる様に心掛けよ。パンチは拳で打つのでない、足先から腰、胸や肩も使い全身で打ち込め。

誰かに教わった訳でもないのに自然と理解できる。戦い方が、この力の使い方が!!

「ディアッ！ディアッア！デエイアッ!!」

馬鹿の一つ覚えの様に再び突進してくるゲネガーグに俺は左足での回し蹴り、右足での後ろ回し蹴り、そして仕舞いにウルトラマンレオのレオキックの様な炎を纏わせた回し蹴り『アルファバーンキック』と、流れる様な三連蹴りをゲネガーグにくらわせる。

堪らず後退あとずさり距離を開いたゲネガーグは吠えながら身体を赤く発光させる。また光弾をばら撒く攻撃をするつもりだろうが。

(その攻撃は何度も見てんだよ!!)

俺は人差し指と中指だけを立てる手の形を左右の手で作り頭部に近付ける。胸のアーマーが光を発し、肩のアーマーへと伝わり、頭部の双刃に集束、エネルギー状の刃『ゼットスラッガー』を形成。

「イイヤァー！トゥワー!!」

さらにゼットスラッガー同士を稲妻状のエネルギーで連結させヌンチャクの様扱いポーズを決めてから駆け出す。

ゲネガーグの背中から無数の光弾が次々と放たれ続けるがゼットスラッガーを繋げたヌンチャクを巧みに扱い全て叩き落として距離を詰めるとそのままヌンチャクをゲネガーグに叩きつけた。それも一発ではなく何発も。俺のヌンチャク捌きにゲネガーグの身体に無数の切り傷を刻まれる。

『これが宇宙拳法、秘伝の神業か!?ウルトラ強え!!』

頭にゼットの興奮した声が響く。もしかしたらこれがゼットの素なのかもしれない。

ゲネガーグが距離を取る。突進や噛みつきぐらいしか出来ないゲネガーグは接近戦でボコボコにされ、かと言って光弾はヌンチャクに

よって弾かれる。ゲネガーグは最後の手段として口を開きエネルギーを溜め始める。

ゼットンさんのバリアを破ったエネルギー砲を撃つつもりの様だが。

(させる訳ねえだろ!!)

「ジャァー」

腰を下ろし、左腕を腰に、右腕は胸の前で横に伸ばすウルトラセブンのエメリウム光線やウルトラマンゼロのエメリウムスラッシュに似たポーズを取り、同じ様に額のビームランプから放つ碧色の光線『ゼスティウムメーザー』でゲネガーグの口内を撃ち抜いた。口内のエネルギーが暴発してゲネガーグが大きく悶絶する。即座で撃つ事出来、尚且つ精密な射撃が行えるゼスティウムメーザーはかなり重宝しそうだ。

(そろそろトドメを刺してやる!)

「グギイ……ッ、ガアアアッ!!」

「ジャァ!?!……ズウツ」

その場で暫くバタバタ暴れていたゲネガーグに向かってトドメの必殺光線を撃とうと構えた瞬間、ゲネガーグが起き上がり突進を仕掛けてきた。しかも背中から推進器官パルニエでブーストを掛けて。

俺は不意を打たれその突進をモロに受け背後のビルを破壊し、空に運ばれる。

(くっ、離れる!!)

「ディヤッ!!」

俺はゲネガーグを蹴り飛ばし空中に浮遊して体勢を整える。その間にゲネガーグは大口を広げチャージを終えていた。エネルギー砲を最後の1撃にするつもりか?

(はっ!いいぜ、受けて立ってやるよ!)

俺もさつき撃とうとした必殺光線を再度構える。

両の拳を向かい合う様に胸の前に並べればアーマーが光を放ち、エネルギーが腕に伝わる。拳を手刀の形にしてから両腕を今度は上下になる様に並べてから左腕を斜め上、右腕を斜め下に伸ばせば光の

『Z』の文字が描かれる。光のZを圧縮して両腕を繋ぐ稲妻状のエネルギーにしてから右腕と左腕の向きを逆転させてから手首を重ねる様に腕を十字に組んで放つ、ウルトラマンゼットの必殺技！

『(ゼステイウム光線!!)』

解き放たれ真っ直ぐ伸びる光線とゲネガーグの放ったエネルギー砲がぶつかり、超エネルギーがスパークする。

威力は互角、だがゲネガーグが自分ごと進む事で押し込んでくる。

(ツッ・負、け、るつかー!!)

更に一際輝き光線の威力が増しゲネガーグのエネルギー砲を押し返す。そしてゼステイウム光線がゲネガーグに届いた。ゲネガーグは光に身体を灼かれる痛みに絶叫しながら地面に叩きつけられ爆発、倒されたのだ。

ゲネガーグの爆発に巻き込まれて小さく光る何かが散らばったのが見える。

俺は地面に着地するとゲネガーグが爆発した地点に振り向きゲネガーグが完全に倒されたのを確認すると空に向かって飛び上がった。

その際に、Zの軌道を描いたのは完全に無意識だった。……しかも後でテレビのニュースを見たらZが斜めに倒れたから寧ろNに見えた。トホホ、締まらないのは変身だけにしてくれよ。

「……ええっと、確かこの辺だよな。ゼットが言ってたメダルが落ちたのって」

ウルトラマンゼットとなってゲネガーグを倒して空へと飛び上がった直後、俺はゼットに『散らばったメダルを回収してくれ、御頼み申し上げます!』とやっぱり可笑しな言葉遣いで頼まれ、気が付くと地上に立っておりゼットの頼み通りメダルを探していた。

「おーあったあった。これ、だよな?」

拾ったのは二枚のウルトラメダル。ウルトラマンエースとウルトラマンタロウの横顔が描かれたメダルだった。取り敢えず腰のメダルホルダーに入れておこう。

「ゼットー」

んや？背後から呼ばれので振り返れば、そこにはアキの姿が。
……なんか、怒ってる？

「何でこんな所に居るの！危ないでしょ!!」
「……あ」

嗚呼、なるほど。うん、その通りだわ。アキが俺の前までやってきてペタペタと大きな怪獣娘としての手で身体を触ってくる。

俺がウルトラマンゼットに成ったって事は、黙ってた方がいいよな、うん。

「いや、えつと、これは」

「大丈夫、怪我はない？」

「え？あ、ああ、大丈夫。どこも怪我してないよ」

「……よかったあ、ゼット、何度も電話してるのに出てくれないし、もし何かあったらって思うとボク、心配…したんだ」

「…っ、ごめん」

目尻に涙を溜めるアキに何か言おうと思ったが何も思い付かず、俺は一言謝る事しか出来なかった。

「ううん、いい。こうして無事でいてくれたから。でも、もう心配させないで。……こわ、かったよ」

「…わかった。二度とお前を心配させたりしない」

……嘘だ。確信はないけど俺はまた、ウルトラマンゼットとして戦う事になる。そんな気がする。

「……………」

すっかり回復したゼットンがアキラを空から見つめている。怪獣は倒されたとは言えまだ安心は出来ないと暫く見守っていたが、何事も無く安全だと確認するとテレポートしようとした瞬間。

「……………」

視界の端できらりと光る何かを発見した。ゼットンは光る物の近くにテレポートするとソレを拾った。

「これは？」

拾ったのは一枚のメダルだった。銀色のさっきの巨人に似た存在

の横顔が描かれているメダル。

「……………」

何故だろう？このメダルを見てみると、何か心に騒つくモノがある。

ゼットンには気付いていないがゼットンが拾ったのは彼女のカイジューソウルと因縁のある『ウルトラマン』の力が込められたウルトラメダルだった。

「……………」

ウルトラマンのウルトラメダルを手放す気になれず、ゼットンはメダルを持ったままテレポートした。

闇の中に蠢く影。黒いスライムのような塊に腕と角を付けた生命体と呼んでもいいのか疑問に思う存在。これらの存在は『シャドウ』と呼ばれている。出自、生態、目的、全て不明。わかっているのはシャドウは人類の敵だという事だけ。

そしてシャドウを秘密裏に抹消する者こそが怪獣娘。このシャドウはつい先程まで怪獣娘から追われていた、だが怪獣の出現により怪獣娘がシャドウ討伐よりも人間の救助任務に当たった為逃げ切る事に成功した個体であった。

「……………」

声帯を持たないシャドウは音を放つ事なく蠢き、とある物を見つけた。

ウルトラゼットライザー。ゲネガークの腹に収まっていたのである。うソレをシャドウは模様なのか本当の目なのかわからない単眼で見詰め、やがてゼットライザーに覆い被さった。

モゴモゴ、カタカタとゼットライザーを呑み込んだシャドウが蠢き、圧縮する。

「……………」

そこに在ったのは、ウルトラ——否、『シャドウゼットライザー』

と呼ぶべきだろう。青と黒のカラーリングは黒と紫へと変わり悍しい気配を放っている。

「へへ、へへへへへへ」

シャドウゼットライザーに近づく人影。何処にでもいる若者の一人と言った風貌の男は、妙にコミカルな歩き方をしながらシャドウゼットライザーを見下ろしニタアと笑う。

男が前髪を掻き上げるとその姿が変わる。金髪に赤い瞳、金と黒のボディ。胸の中央にはウルトラマンのカラータイマーに似た器官が備わっている。

彼の正体は、『暗黒星人』と呼ばれるババルウ星人の一人だ。彼は同族全員が得意とする高度な擬態能力を使い地球人に紛れていた異星人で、その目的は怪獣娘を利用した地球侵略だった。

「折角、GIRLSに職員として潜入して漸く作戦開始って時に怪獣、そして何よりウルトラマンが来た時はどうしようと思った、けくどく♪」

ババルウ星人はシャドウゼットライザーを拾い上げるとにまにまと笑いながら小躍りする。

「なんだかワカンねえけどこんなん作るって言ったらウルトラマンの奴らしかいねえよなあ」

使い方などさっぱりわからないというのに強力な力を手に入れたとでも言いたげに機嫌が良い彼は、背後で蠢く影に気付かなかった。

「いやー、こ、れ、も？日頃の行いが良かったからかなー！」

そしてターンして振り返った瞬間、物影からナニカが飛び出しババルウ星人の顔に飛び付いた。

「うげえ!? な、なんだよこれ！離れアア、ア、ああ、アアア!？」

顔に張り付いたナニカを引き剥がそうとのたうち回るババルウ星人だが、その口内へとナニカは侵入。ババルウ星人はええづくが侵入を抑える事は出来ずナニカは完全にババルウ星人の中へと侵入した。

最初こそババルウ星人も痙攣していたがやがて動かなくなる。

「……!!」

動かなくなつたババルウ星人が突然として立ち上がる。とても不

気味で不自然な、まるで身体の動かして方に慣れていないかの様だ。それも少しの間で、すぐに正常な動かし方を理解すると歩き出す。そして落としたシャドウゼットライザーを拾い上げ、近くのゲネガールの肉塊に手を突っ込み橙色の結晶を取り出しシャドウゼットライザーと結晶を交互に見ると一言呟いた。地球の人間だと理解出来ない言語で辛うじて『キエテ カレカレータ』と聴き取れる。

意味は、

——いい気分だ。

ナニカに寄生しはいされたババルウ星人の姿が変わる。一人の男性の姿に変わったババルウ星人、いや、寄生生物セレブロは不気味で歪んだ笑みを浮かべた。

セレブロの周りにはシャドウゼットライザーを通じてか次々とシャドウが湧き出てきた。

T o B e C o n t i n u e d

侵略者を討て！（前編）

GIRLS本部にてピグモンが書類を手に持ち廊下を歩いている。その顔には隠し切れない疲れが浮かんでいた。

「はあ…」

「大変ね、ピグモン」

「……エレエレ」

ため息すら溢すピグモンにエレキングが声を掛けた。

「どうだった？」

「どうだったも何も、怪獣襲来なんてわかる訳ないじゃないですかー！」

今にもむきー！とでも言いそうな程の怒りを爆発させるピグモンにエレキングはやれやれと肩を竦める。

実はピグモン、というより日本中のGIRLSの各代表と日本政府のトップによる緊急会議が行われ、怪獣娘が怪獣襲来の原因なのでは？とイチヤモンを付けられていた。

特に怪獣が現れた現地であり、GIRLSの本部である此処は日本政府から風当たりも強く、散々言いたい放題言われた挙句今後の対処法を求めてきたのだ。

現在、巨大怪獣相手に戦闘が可能なのは日本在住の怪獣娘の中ならゼットンぐらいなモノだろう。だが、それも「可能」なだけで怪獣を倒せるかどうかという話は別だ。正直な所ゼットン一人の力じゃ怪獣を相手に勝利する事は出来ないだろう。

「シャドウを相手にするのは話が違うんですの…」

「そう、ね」

シャドウ、人類の敵にして怪獣娘が倒すべき天敵。シャドウが相手なら大きくても精々十数メートル。実力のある怪獣娘なら十分に戦える相手だ。

だが、先日の巨大怪獣はおよそ五十メートル。スケールが違い過ぎるのだ。

「はあ……、巨大怪獣の対処法を考えて政府と全GIRLS支部に通

達しろだなんて無茶ですよお」

「……………」

エレキングもお手上げらしく小さな案すらも出てこずに黙する。

「せめてあの巨人——ウルトラマンさんと対話が出来ればいいのですが」

「ウルトラマン、ね」

現状、唯一怪獣に勝てる存在が先日怪獣と共に現れた新たなウルトラマン。嘗て地球の怪獣退治に手を貸してくれた光の巨人と同族と思われる存在。

「取り敢えず、何とかその場凌ぎのものでもいいから何か考えないといけないわね」

「ですう〜」

そんな会話を廊下の突き当たりから聴いている人影が一つ。

「……………」

ゼットンだ。

彼女は先日拾った一枚のメダルに目を向ける。もしかすればこれがあのウルトラマンへと通じる手掛かりになるかもしれない。だどいうのに報告する気にならない。このメダルを手放したくなかった。

「……………」

胸をチクリと刺す罪悪感を感じながらゼットンは何処かへと姿を消した。

——同時刻——

『本日のニュースです、〇〇日に出現した巨人を政府は『ウルトラマン^{ゼットン}Z』と呼称する事が決定しました。ウルトラマンZは〜〜』

GIRLS本部の休憩室でボク、そして友人のミクちゃん（ミクラスの怪獣娘）とウインちゃん（ウインダム of 怪獣娘）の三人でテレビに映るニュースを見ながら雑談を繰り広げている。

「ウルトラマンZね〜、ウルトラマンNじゃなかったんだ」

「だから言ってるじゃないですか。アレはNじゃなくて倒れたZで

すって」

「でもNに見えるじゃんかー!」

「それは、そうですね」

ミクちゃんとウインちゃんの会話を聴きながらボクはあの巨人の——ウルトラマンZの背中を思い出していた。大切な人と重なったあの背中を。

「……ちゃん、アギちゃん?」

「え?」

「大丈夫ですか、何だかぼんやりされてた様ですが?」

「う、ううん。大丈夫」

「本当ですか?もしかして何処か怪我を?」

「検査は受けたんだよね?」

心配してくれる二人にボクは何でもないと言いながら話題を逸らす。

内容は「また、怪獣が現れたらどうしようか?」というものだ。

「て、言っても私達に任せてもらえる事なんて避難指示ぐらいなんだよねえ。あーあー、私もレッドキング先輩みたいに強かったらなあー!」

「そうですね。変身出来ると言っても私達はまだ新人。出来る事も任せられる事も限られてますからね」

「でも、いざという時はボク達がみんなを守らないと……!」

「うん!」

「ですね」

ボク達は手を重ねて決意する。ボクがみんなを、ゼットを守るんだ!

——その時だった、GIRLSにあの宇宙人がやってきたのは。

「……チラツ。よし、大丈夫」

街の裏路地から姿を表す俺。

え?なんでそんな所から出てくんだって?まあ、簡単に言えば俺は

ついさつきまでゼットさんと話してたんだ。

ゼットさんと対話出来るあの空間『インナースペース』って言うみたいだけど、あそこへの光の入り口『ヒーローズゲート』は俺がゼットさんと一体化してウルトラマンゼットになつてる事を隠してる以上見られるのはまずい。だからこうして人気ひとけの無い裏路地に居た訳だ。

ゼットさんとした会話の内容？それも簡単に言えば今回の怪獣騒動の発端だ。

ゼットさんが元々居た宇宙の存在に宇宙中でデビルスプリンター、とかいう邪悪な因子によって凶暴化した怪獣達。その対策として開発されたのがウルトラゼットライザーとウルトラメダル。でも、そのゼットライザーが先日倒した怪獣ゲネガークに奪われ、ゼットさんがゼットさんの師匠のウルトラマンゼロさんと一緒に追いかけたけど、異次元に繋がる穴にゲネガークと一緒に呑み込まれてこの地球にやってきた、らしい。

スケールがデカい、流石ウルトラマン、話が宇宙級の話だったわ。

あ、あとウルトラマンゼットさんの年齢が5000歳と俺よりも遥かに年上な事を知った俺は敬意を込めてゼットさんと呼ぶ事にした。……ゼットさんはなんか慣れない感じだったけど5000歳ってウルトラマンの中では若い方なんだろうか？

「あと、変身はギリギリまで追い込まれて俺とゼットさんの気持ちさがグツと出来上がってからじゃないとできない、か。色々制限が有るんだな。ま、いいか！それより今は何して時間を潰すかの方が重要だしな！」

現在の俺の服装は高校の制服姿。学校帰りにアキと一緒にGIRLSに寄って別れ、またアキが出て来たら合流、で一緒に帰る。

何やらまたいつでも怪獣が現れてもいい様に一緒に帰る、だとか。完全に保護対象なんだよなあ。

「まあ、俺がウルトラマンゼットに成れるとかアキも知らないし」

怪獣娘はどんな怪獣の魂を宿していたとしても普通の人とは比べ物にならない力を持つてるからどっちが頼りになるかって言えばア

キの方なんだろうけど。なんて言うかなあ…つい最近まで隣で話しながら歩いてたのに急に守ってあげるって態度されてもなあ。100パーセント善意だし嬉しいっちゃ嬉しいんだけど複雑だ。言葉にできない事がモドカシイ。

……まあ、いいや。暇だしなんか動画でも見るか。折角だし何か怪獣娘関連の動画でも…お、大人気キングジョーの動画だ。それもライブ配信！

暗い茶色の腰まで届く長髪に空色の瞳、端正な顔付きに抜群のプロポーション。そしてそのプロポーションを大きく露出させる獣殻^{シエル}。前世ではウルトラセブンを追い詰めた強力なロボット怪獣にして、明らかにその晒した肌の多さも人気の要因の一つであろう彼女が、画面の向こうでパシヤリ、パシヤリと色々なポーズで写真を撮られてる。キングジョーの獣殻^{シエル}は地球上のあらゆる兵器でも破壊不可能で傷付ける事すら難しいと言われてる、のに関わらず獣殻^{シエル}に覆われる大きな胸がポーズを決める度にたゆんと揺れてる。ホント怪獣娘は不思議だなく。

「いやー…きらっきらっですね!!」

「……んあ?」

公園のベンチに座ってライブ配信を観ていると、近くから大きな声が聞こえた。つい声の方に振り向くと俺みたいにベンチに座ってスマホを見ている黒いスーツに紫のネクタイの成人男性。

……何見てんだろ?

「おや?」

あ、拙い。目が合った。

「…!!君は」

なんかヤバそう。よしならば今すぐ退散!逃げるがか

「君もキングジョーさんのファンなんだね!」

◇しかし 回り込まれて しまった。

いや、実際に回り込まれた訳じゃないけど。兎に角、なんか面倒くさそうな人に捕まってしまった。

「キングジョーさんはイイ。ぜひ共に夜明けのコーヒーを飲みたいも

のです」

「な、なるほど…?」

それから十五分以上に亘って『キングジョーさんの此処がイイ b y. J J』を聞かされる羽目になった。いや、まあ、この人、マジで話し上手で俺も何度かなるほどって感心できる箇所もあった。ちよつとねつとりした話し方が玉に瑕だけど。

気が付けば互いに連絡先交換してたし。

「いやー、ありがとうゼツト君。僕の話を最後まで聞いてくれる人は少なくてね。…最近大好きな友達もなんだか冷たくて」

しょんぼりした様子で話す J J さん。

それはその友人相手にもキングジョーさんの話ばっかしてるからでは?

「それにしても、 J J さんがキングジョーさんが好きなのはよくわかりましたけど、どうしてそこまで好きになられたんですか?」

また長い話になりそうな予感はしたが、実際まだ暇なものも事実なので聞いてみる事にした。

「…:僕はヒカリが好きなんだ」

「光?」

「そう、ヒカリさ。さつきも言っていた友人なんだけどね、彼はどんな時でも真つ直ぐで誰かの為に本気に成れるヒカリみたいな人なんだ。僕にはどうやってもできる気がしない」

「……………」

空を見上げる J J さん。

俺は黙って続きを待った。

「世の中にはほんの少しだけいるんだ。どんな困難や悪意に倒されても、諦めず立ち上がり立ち向かえる様な人が。そう言う人こそヒカリ、と呼べると思うんだ。僕も彼のそんな所を妬んで喧嘩別れた事もあるんだけど再開した時、彼は喧嘩した事も覚えてないって言って手を伸ばしてくれたんだ。その時思ったんだよ。『嗚呼、彼こそヒカリなんだ。きらつきらな心の持ち主なんだ』ってね」

「そのきらつきらつな光がキングジョーさんからも感じられたと?」

「そう言う事だよ。彼女の真つ直ぐな瞳を見た時、テレビ越しでもわかるきらつきらつなヒカリを感じたんだ。それから僕はキングジョーさんの事を調べた。調べれば調べる程彼女のヒカリに惹きつけられたんだよ。本当に大切なものは目には見えないのさ」

「……………」

「友人の彼のように言うなら見える物だけ信じるな、かな」

「見える物だけ信じるな…ですか」

“本当に大切なものは目には見えない”、
“見える物だけ信じるな”。

“なんだか、深い言葉だな。”

「あと、純粹に容姿が好みつてのも大きな要因だね」

「台無しですよJJさん」

「ハハハハハ」

それからも他愛もない会話を続けた何かとキングジョーさんの会話に持つていこうとするJJに少し呆れつつも友人、と言っても良い関係になれた、と思う。

「あ、ヤバイ。すいませんJJ、俺ちよつと時間が」

「ああ、いいよいよ。僕の方こそ長い間話に付き合わせてごめんね」

「いえ、楽しかったですし大丈夫ですよ」

「それは良かった。ほら、時間がないのだろう？早く行ってきなさい」

「すいません、失礼します」

やっべー！思ってたより話し込んだしまった。今から急げば約束の時間に間に合うか？兎に角走れ！

「……………ゼツト君。君にも素質、あると思うよ」

「ああ、無理。間に合わない絶対！」

もう五分以上本気で走り続けてるから足が限界。もう走れねー！

「先に連絡だけ入れとくか」

少し遅れると連絡しようとスマホが取り出した瞬間、ピコンと通知音が鳴る。目を向ければUNITELIOEの様なもの came 来たみた

いだ。相手は、アギアギ？^{宮下アキ}何だろうか？時間まではまだ少しあるし。あ、もしかして少し遅れるとかか？だとしたらラッキーだなて思いながらUNITIEの内容を確認する。

——内容は一言、『たすけて』と。

「……………は？」

『続いてのニュースです。国際怪獣救助組織、GIRLSの本部に襲撃が行われ、中の職員など一切連絡が取れない事態に陥ってるこの事です。日本政府は、これを以前の怪獣事件と何かしらの関連性があると判断し自衛隊を派遣したとの事です』

「……………、アキイツ!!!」

俺は全力で走り出した。もう走れないと思っていた足は驚く程の力を引き出し、過去最高の速度で走れた。

「すぐに助けにいくぞアキ！」

『フォッフオッフオッフオッフオッフオッフオッフ』

「このやろう！」

大きなハサミの両腕、セミの様な顔をした異形の人型にミクちゃん
が殴り掛かる。けど、

「うわっ！つて、すり抜けた!?!」

「違いますミクさん！それは幻覚です！」

『フォッフオッフオッフ』

「っ！今度こそ！」

不気味な笑い声を響かせながらボク達が相手にしているこの異形の存在——異星人は施設内に突然現れると職員、それと他の怪獣娘さんをハサミから放った赤い光線で次々と止めていった。既にピグモンさんとエレキングさん、他にも様々な人が異星人によって止められる。

ボク達もバルタン星人を止める為に戦ってるけど、光線の他にも分身を作ったり、ゼットンさんみたいに瞬間移動したりと豊富な能力で翻弄されていた。

『フォッフオッフオッフ』

「!?アギさん危ない!」

「え?あつ!」

ボクの後ろに現れた異星人にいち早く気付いたウインちゃんがボクを突き飛ばした。その後、ウインちゃんに赤い光線が直撃しウインちゃんの動きが止まった。まるで時間が止まった様にぴくりとも動かない。

「~~~~!よくもウインちゃんをー!!」

「あ!ま、まってミクちゃん!?」

「てりやー!!」

ミクちゃんが右腕を大きく振りかぶってパンチを放ち、異星人に直撃した。ミクちゃんは「やった!」と喜ぶけど。

「そこから離れてミクちゃん!」

「……え?」

ミクちゃんのパンチを受けた宇宙人が煙の様に解けて消えて、その後ろに立っていた本物の異星人が赤い光線をミクちゃんに向けて放ち、今度はミクちゃんが止められた。

「そ、そんな……」

『フォッフオッフオッフ』

異星人が笑いながら近付いてくる。ボクは恐怖に後ろに退がろうとして躓いて尻餅をついた。それでも座ったまま退がり、やがて壁に追い込まれる。

「な、なんで、こんな事を、するの……?」

『フォッフオッフ……』

「……あれ?」

異星人の姿が、消えた?……どうして?

『私は、バルタン星、の者だ』

「ッ!」

停止していたウインちゃんが突然喋り出した。でも身体は未だに動いていない、口だけが勝手に動いている様に感じる。

『私は、この者達の、脳髓を使って会話、している』

今度はミクちゃんが話す。こちらも口だけが動いて、ううん、動かされてる。

「なんで、こんな事をするの?」

もしかしたら話が通じるかもしれない。ボクは淡い希望を込めて聞いてみた。

「『私の目的は二つ。一つはこの地球を手に入れる事』」

ミクちゃんとウインちゃんの二人が同時に喋り出す。

それよりも地球を手に入れるって、それはつまり。

「侵…略…」

「『そうだ。私はこの地球の原住民を全て消し去りこの星を私の物にする事にした』」

「そ、んな、事。…出来る訳ない!!」

ボクは目の前の侵略者に気持ちだけでも抵抗する為に強気に出る。

未だに足に力が入らなくて立てずにいるボクが睨み付けても滑稽なだけだと思う。でも、これがボクが精一杯出来る事だった。

「世界中には沢山の怪獣娘がいるんだ!お前一人なんかでどうにかするなんて無理だ!」

「『その為の君達だ』」

「……………え」

「『私のもう一つの目的、それは君達カイジュームスメを捕らえ、私の尖兵として扱う為だ。この星の住人は『イノチ』なんていう理解できない物を守ろうとする。それが同族なら尚更』」

「……………あ、ああ」

理解した。この侵略者がどれほど悪意を持ってやってきたのか、どれほど恐ろしい策を練って現れたのか。

恐怖に、涙が、流れる。声が出ない、奥歯がガチガチと鳴る。

「『それに、私は調べた。『ゼットン』、最も強いカイジュームスメが此処に所属している事を。奴を捕らえ私の兵として利用すれば、例え他のカイジュームスメが戦う事を選択したとしても負けはしない』」

「あああ!あああ!?!?!」

侵略者バルタン星人が現れる。腕のハサミをボクに向け、ハサミを

開いた。

「?!?!? やだ、ヤダ、ヤダヤダヤダ?!?怖い怖いコワイ助けて助けてタスケテ
助けてよ、ゼツト」

侵略者を討て！（中編）

「つう、はあ…はあ…、くそっ！」

息を乱しながらもなんとかGIRLSの施設に辿り着いたが、沢山の野次馬の人と自衛隊による包囲網が邪魔で入れない。どうにかして施設内に入らないと、アキが心配だ。

「なにか、なにかないか！」

その時だった、GIRLSの建物の一部が爆発した。

そして爆発から二つの影が飛び出し、地面に着地した。

『フオッフオッフオッフ』

「……………」

一人はゼットンさんだ。そしてもう一人は、なんだあれ？

両腕の手首から先が大きなハサミのセミ…みたいな顔の人型。宇

宙人…か？あんな奴知らないぞ!?

「な、何アレ？」「さ、さあ？」「あいつが襲撃犯？」「着ぐるみ、なのかな？」「でもあんな高い所から降りてきたぞ」「ゼットンさん、胸でケエ!!」

野次馬の人達が謎の宇宙人？とゼットンさんにスマホを向けて録画しながら好き勝手に話している。というか一人ゼットンさんの胸しか見てない奴いたぞ!?!…確かにでかいけど。

『フオッフオッフオッフ、フオッフ!!』

宇宙人は両腕のハサミを開いてゼットンさんに向けると赤い光線を放った。が、ゼットンさんはテレポートした為当たらない。そして宇宙人の背後にゼットンさんが転移して拳を放ち、宇宙人の胸を貫いた。やったか！と思ったら宇宙人は二つに割れた。ちようど真ん中から右半身と左半身が分かれそれぞれがぐるりと振り返り無い半身が生えた。うげえ!?!気持ち悪!?!?

二体になった宇宙人が足を動かす事なくスライドする様に移動する。それもかなりの速度で。残像を幾つも生み出しながらゼットンさんを包囲する様に周回する宇宙人が、突如ピタッと停止する。

「なっ!?!」

「隊長！そもそもアレに言葉が通じているのですか!？」

宇宙人が此方を向いて歩き始めると野次馬の人達は慌てて逃げ出し、自衛隊の隊長と呼ばれた人が宇宙人に向けて警告するが宇宙人は止まる気が感じられない。言葉が通じてないのか、銃火器を脅威に思っていないのか、或いは両方か。兎に角宇宙人は足を止めない。

「くっ、構わん！撃て、撃てえ!!」

隊長さんと思われる人の指示で自衛隊の方々が一斉にライフルを撃ち始め、バババババツ！と銃声が響き渡る。宇宙人に迫る無数の弾丸だが、

『フォー!』

宇宙人が片腕を上げて一鳴き、たったそれだけで弾丸全てが宇宙人の目前で停止した。

それだけじゃない。

「うわっ!?」「な、なんだよこれ!!」

その半ば悲鳴みたいな声は後方から聞こえた。俺や自衛隊の人達が振り返ると野次馬の人達の半分ぐらいが何も無い空間を叩いている。…なに、してんだ？

「なんだよこれ、壁?」「ここに見えない壁がある!」「どうなってんだよ!?!」

「何してんだよ早く来い!」「いけねえんだよ!!」

「ママー!」「アヤ!?!」

見えない壁?まさか、分断されたのか!?

俺も野次馬の人達の元に向かう。…ある。確かに透明な壁みたいなものが。

「どきなさい!これならどうだ!!」

自衛隊の一人が壁の内と外の人を離れさせると壁に向かって銃を撃った。銃弾は壁に阻まれ破れなかったが、僅かにだが着弾点から極彩色の色が広がりその全貌を垣間見せた。見渡せばわかるがドーム状に壁が——バリアが展開されていた。

「お、おい。アレなんだよ」

誰かが空を指差し叫んだ。つられて空を見上げると上空で浮かん

でいる物体が。このバリアはその浮遊物体からまるで鳥籠の様に展開されている。お決まりの展開なら宇宙人の宇宙船……か、何かだろうか？

『フオッフオッフオッフオッフ！』

「させない……！」

ゼットンさんは依然宇宙人と戦ってる。宇宙人の相手はゼットンさんに任せよう。俺はアキを助けにいく!!

「!?君、待ちなさい」

『フオッフオッフオッフ』

「くっ……！」

俺はGIRLSの建物に向かって走り出し心の中で謝罪しながらゼットンさんや宇宙人の横を通って施設内に入った。

「アキイ!!何処だー!!返事しろ!!」

………。返事はない。クソッ!頼むから無事でいてくれよ。

「アキーアキー?返事してくれ!頼むから!!」

何処にいった、返事してくれよ……ッ。

……?……!人影だ。誰か居る!シルエットからしてアキじゃないけど何か知ってるかもしれない。

「す、すいません!人を探して……あの?」

声を掛け、肩を揺さぶるが反応が無い。

俺は不思議に思い前に立ってみるが。

「……嘘だろ?」

固まってる。何か、怯えてる様な焦っている様な顔でまるで時間も止まっているかの様に停止している、以前テレビで見た事のあるGIRLSの職員が着ている制服に身を包んだ人。

「これもあの宇宙人の仕業、しかない、よな」

生きていいのか死んでいるのかわからない。もし死んでいるのだとしたら。もし、アキが既にこうなっていると……した、ら。

心臓が痛い程に鼓動し息が乱れる。嫌な汗が流れ髪が張り付きとても、気持ち悪い。胸の中を不安や恐怖の様なイヤな感情もが渦巻く。

「ゼツ、ト…?」

「!?アキい!!」

「うわっ。ぜ、ゼツト、苦しい」

「よかった、無事でよかった」

覚えのある、求めていた声が後ろから聞こえ急ぎ振り返る。

茶髪に眠たそうな印象を与える目付き。顔を青くし震えている幼馴染の姿を見た時、気付けば俺はアキを抱き締めていた。

「あり、がとう。ゼツト」

「いや、正直。来ても何も出来そうにない。…ごめん」

「そんな事、ないよ。ボクのUNITEを見て、来てくれたんでしょ？」

「おう」

嬉しい。こんな、危険な所にUNITEを見てやって来てくれたゼツトが。でも、同時に悔しくもある。力のある、怪獣娘のボクがゼツトを守るって決めたのにこうやってゼツトに守られてる。

守りたい人に守られる。情けない自分がイヤになる。

「何があったのか、説明してくれるか？」

「…：わかった」

ボクはゼツトにあの侵略者——バルタン星人の事をゼツトに話した。話した方がいい、そんな気がしたから。

バルタン星人の目的と、バルタン星人がGIRLSの人達に何をしたのか。ボクも危なかったけどゼツトンさんがギリギリで助けてくれてそれからはずっと隠れていた事を。

「…：…侵略者バルタン星人、か」

ボクの話聞いたゼツトは俯いて右手を腰に当ててる。

…：あれ？ゼツトの腰に何かある？見えない、けど何かがある…様な気がする。

「決めた」

「え？」

「アキ。後は任せろ」

「何を言つて、つて何処に行くの!!」

ゼットが突然走り出した。ボクは驚いて反応が遅れ、慌てて追い掛けたけど曲がり角で見失った。

「ゼット?…どこなの?ゼット!ゼット!!」

ゼットが消えた。それだけでとてつもない恐怖と孤独が襲い掛かる。不安で圧迫されて足に力が入らなくなる。どこ?…?どこに行つたの?やだ、こわいよ。一人にしないで。

とうとう足が崩れそうになる、その瞬間だった。強い光が輝いた。目も眩む様な光なのに何故か目が離せない。

「……ウルトラマン、Z」

ウルトラマンZ
光の巨人が現れた。

よかった。うまくいった…!!

ゼットライザーのトリガーを押すとヒーローズゲートが現れ、勢いそのままに飛び込んだ。

インタースペース内に立つと目の前にアクセスカードが現れ、俺はアクセスカードを取つてゼットライザーにセットする。

《Z e t t o A c c e s s G r a n t e d》

続いて腰のメダルホルダーを開いて三枚のメダル——ウルトラマンゼロ、ウルトラセブン、ウルトラマンレオのウルトラメダルを取り出す。

「宇宙拳法、秘伝の神業!!ゼロ師匠、セブン師匠、レオ師匠」

《Z E R O . 》 《S E V E N . 》 《L E O . 》

三枚のウルトラメダルをゼットライザーのスリットにセットしてゼットライザーに認証させる。

光が集いウルトラマンゼットが腕を広げて出現する。

『ご唱和ください、我の名を!ウルトラマン、ゼエエツト!!』

「ウルトラマン!ゼエエツト!!!」

俺はゼットライザーを天に翳してトリガーを押した。

現れる三人のウルトラマンの虚像^{虚像}。光と化した御三方が一点に集

中。そこから一体の巨人が現れる。

「ULTRAMAN Z」

「ALPHA | EDGE」

「ジエアツ!!」

侵略者を討て！（後編）

『フオッフオッフオッフ！』

「くっ」

勝利を確信し高らかに笑い声を響かせるバルタン星人。目の前には身体のあちこちにかすり傷や砂埃などの汚れを付け、膝を屈して地面に手を突いた四つん這いで頭を下げるゼットンと高笑いするバルタン星人。

わかりやすい勝者と敗者の図が、そこにあつた。

『フオーフオッフオッフオッフ！』

「……っ」

ゼットンはバルタン星人との戦いに敗れた訳ではない。寧ろバルタン星人がある行動を起こすまででは互いに無傷の状況が続いていた。ならバルタン星人が起こしたある行動とは？——人質だ。

バルタン星人は壁の内部を無重力空間に変えると自身の宇宙船から捕獲用エネルギーネットを使い一般の人間や自衛隊の人員達を根こそぎ捕らえ人質とした。人質とした人間の一人を操り翻訳装置として扱い、抵抗すれば捕らえた人間を全て消滅させるとゼットンに告げたのだ。

ゼットンはバルタン星人の言葉に従い抵抗をやめ、バルタン星人は意味のわからない愚かな種族だと嘲笑った。

それからはバルタン星人のやりたい放題だった。ハサミから電撃光線や白色の破壊光線を低威力に抑えてゼットンに浴びせ、殴る蹴るの暴行。しまいには捕らえた人間のうち数名を選びゼットンに暴行する様に指示した。最初こそ拒否する人間がいたがハサミを鳴らすだけで意見を変えてゼットンに手をあげた。殺されたくない、死にたくない、自分を守ってくれるゼットンに本気で攻撃し、袋叩きにする。

それでも抵抗しないゼットン。常人よりもずっと遥かに頑丈だと言っても限度はある。ゼットンは身体を襲う痛みを根を上げる事なく歯を食いしばって耐え続ける。

フオツフオツフオツ、バルタン星人の笑い声が木霊する。

ゼットンが痛めつけられる姿に満足したバルタン星人は数名の人間を再びエネルギーネット内に捕らえると翻訳用の人間を使って言い放った。

『私の目的はこの星の原住民を全て消し去り、この星を我が物とする事だ。どの道お前達は消えて無くなるのだ』

悲鳴が、絶叫が、怒りが、慟哭が、絶望が、満ちる。

人間達が叫ぶ、ゼットンに宇宙人を倒せ！と。何をしてるんだ！ふざけんな！さつさと倒せよ！早く助けて！起き上がれよ！役目だろ！

さつきまで自分達が手を上げた事を棚に上げて少女に身勝手な言葉を投げ掛ける。

ゼットンは動かない、頭を下げたままプルプルと震えるばかり。

『フォーー！』

バルタン星人がトドメに掛かった。

当初の目的の一つでもあるゼットンの捕獲。バルタン星人はハサミをゼットンに向けると宇宙船からエネルギーロープが放たれゼットンの腕や足、腰などの関節や首に絡み付いてゼットンを捕らえる。大の字の姿で吊るされ無理矢理前を見させられる。

バルタン星人がゼットンに近付く。一步、また一步。敢えてゆっくり歩み恐怖を煽る。

「……………」

ハサミを鳴らし笑い声を響かせ一歩ずつ距離を詰める。

「……………い、いや」

ガチガチと歯を鳴らす、恐怖に顔が歪むゼットン。

「いや……………いや…」

空から罵倒が聞こえる。心無い言葉がゼットンを責める。

「こな、いで……………!?!」

ゼットンの目前で立ち止まり、ゆっくりハサミをゼットンの顔に近寄せ、ハサミを開く。暗い昏い奈落の様な穴が視界に広がる。

その時、頭痛と共に頭に声が響く。

——お前は、この星を侵略する為の兵器として利用してやろう。
バルタン星人のテレパシーだ。何故今までしなかったのかわから
ないが最後の最後にバルタン星人はゼットンの頭に直接話し掛け、
否、一方的に叩き付けた。

悪趣味にも火の海となった地球の街の上空に浮かび、仲間や一般人
に向けて火球を放つ自分の映像を付けて。

「ア、アア、……あ」

遂に恐怖が限界を迎え心が折れたゼットンの姿が変わった。頭の
角と額の結晶が消え、服装がGIRLS職員の制服に。

変身が解け、ただの少女としての姿が露わになる。

『フォ?』

バルタン星人も一瞬だけ戸惑ったが、洗脳してから再度変身させれ
ばいいと赤色光線を撃とうとしたその時。

——光が顕現する。

銀色の巨人、刃が如き光の戦士、轟く悲鳴を耳にして、来たぞ我ら
の『ウルトラマン』。

ウルトラマンゼット、アルファエッジ。

「ジェア……」

ここに降臨。

『バカなウルトラマンはこの宇宙には居ない筈
フォツ!?フォツフォツフォツフォツ!!』

!!さつきまで何を言ってる変わらなかつたあの宇宙人、バルタン星
人の言ってる事が何となくだけどわかる。

『アレは宇宙語だ。ゼット、お前は私を通じてあのバルタン星人の言
葉を理解しているんだ』

なるほど。流星ゼットさん、

宇宙の言語も理解できるとは御見逸れしました!!

『え?いい、いやだから頭が低い……』

(よし、行きましようゼットさん、ってアレは!)

ゼットンさんが捕まってマリオネットみたいになってる!それにな

んか巨大な網みたいのに沢山の人が!?

「……ッ！このセミヤロウ！散々好き勝手しやがって！ヤキを入れてやる!!」

「ジイアア!!」

俺は右手を握って拳を作り思いっきり振りかぶればバルタン星人は慌てて姿を消した。はい、作戦通り。

バルタン星人が消えた瞬間に俺は拳を解いてゼットンさんに手を伸ばす。

(ゼットンさん確保ー!!)

掌にゼットンさんを優しく包めばバルタン星人の宇宙船から伸びる縄も自然と千切れる。立ち上がり掌を開けばちよこんと女の子座りしたゼットンが……え？誰この子？

「……ウルトラ、マン」

ええつと。……あ！ゼットンさんの人間形態っていうか変身してない時の姿か！あーあー！確かに似てる似てる。いやー、びっくりした。よし、兎に角ゼットンさん無事救出。じゃあ次は網の中の人達だな。

俺は片手にゼットンさんを乗せたまま網の真下にもう片方の手を向ける。すると手から柔らかな光の光線が放たれ地面にぶつかると広がる。クツション、よし！

続けて宇宙船に向けて額のビームランプからゼステイウムメーザーを撃つ。超高熱光線は一直線に宇宙船を狙い、直撃。宇宙船は火花と煙を出しエネルギーの網が途切れる。自然と網の中の人達が落下するがさつきの光線が作る光の領域に入った瞬間、ふわりと柔らかかに降り自分の足で無事着地する。

「うおー！」「やった！助かったんだ!!」「ありがとうウルトラマンZ！」「アヤー！」「ママー!!」

ついでに宇宙船が壊れた事でバリアも消えて壁の向こうの人と合流する。ほら、早く逃げろ逃げろ。

自衛隊の人達が一般の人達に逃げる様に指示する。自衛隊の人達の言葉に従って次々と避難する人々。と、忘れちゃいけない。

膝を突いて片腕を伸ばす。ゼットンさんも早く避難してください。最初ビクツとした自衛隊の人達だけど掌に乗っているゼットンさん（人間バージョン）を見ると俺の意図を読んで保護してくれる。「彼女や住民達は我々が責任を持って守りきる。だからウルトラマン、あのバケモノの相手は頼んだぞ!!」

「ジイヤー！」

応ツ!!任せてとけよ自衛隊のオツチャン!!

『フォー!!フオツフオツ!!』

現れたなセミヤロウ。

背後から声が聞こえた為、立ち上がり振り返れば、俺と同じ巨体にまで巨大化したバルタン星人がいた。へっ、上等じゃねえか!!

（覚悟しろよ！俺は、いや、俺達はウルトラ強えぜ!!）

「ジエエツアアー!!」

俺は勢いよくバルタン星人に向けて飛び蹴りを放つ。

『バカめ
フオツ!!』

蹴りが当たる寸前、バルタン星人は嘲笑う様に一鳴きしてから姿を消した。くそ、どこ行きやがった？

『フオツフオツフオツ!!』

!?!後ろからあの独特な笑い声がし、振り返れば奴が俺にハサミを向けている。奴はハサミから白い光線を放った。

『死ねえ
フオーツ!!フオツフオツフォー!!』

「ジイア!?!?」

俺はバルタン星人の白色光線をモロに受けた。づう…ツ、ちくしよ
う痛え。

『気を付けろ、ゼット。バルタン星人の放つ白い光線は破壊光線だ!』

（知ってたなら早く言ってくださいよ!）

知らなかった訳じゃないんでしょ!?

くっそー。自衛隊のオツチャンと約束した手前カツコ悪い所は見
せられねえんだよ!!

「ジイヤー！」

バルタン星人に向かって駆け出す。バルタン星人も舐めてやがる

のかテレポートはしない。

『フォー！』

「ジィ……」

バルタン星人は右腕のハサミを振って攻撃してくるが、俺は急ブレーキを掛けて減速。バルタン星人のハサミは見事に空振り空を切る。アタックチャーンズ！

「ジエアー！」

『ブオ!?』

俺はバルタン星人の右足の甲を踏み付け、バルタン星人も短い悲鳴を上げる。だが、まだだぜ。これの本当の目的はお前を逃がさない事にあるんだからな！

「ジエアー！ジエアー！ディアアツ!!」

『フオ!?ブオツ、フオツ！』

足を踏み付け固定しゼロレンジによる脇腹に左フック、肩に右チョップ、奴の腹に右足での膝蹴りの三連打だ！

『フオ^調ーツ^子フオ^乗ツ^るフオ^なツ!!』

うわつと。くそ、アイツ。自身から分身を作り、その分身をぶつけて俺を弾き飛ばしやがった。

『フオツ！フオツ！フオツ！』

そのまま俺を弾き飛ばした分身体が攻撃してくる。ハサミでの近接戦だが、闇雲に両腕を振り回してくるだけ。宇宙拳法嘗めんな、そんなもん軽く捌いて反撃だ。正拳連打からのアルファバーンキックで分身を消し飛ばす。

分身体を倒したら次は本体を！と辺りを見回したが奴の姿がどこにも見当たらない。どこだ？どこにいる？っていつづう!?

背中に灼けつく様な痛みが走り、振り返ればバルタン星人がいやがる。この野郎!!俺がバルタン星人に向かって駆け出そうとする寸前に奴の姿が消えた。またかよ！

「ジエア……」

『フオツ!!』

「ジャアツ!?!」

今度は背中にハサミで直接攻撃される。くっそ、コイツ！後ろからばっか攻撃ばっかしゃがんで、卑怯だぞ！！俺はバルタン星人に拳を打ち込むが手応えが全く感じられない。証拠に拳を受けたバルタン星人が煙の様になって掻き消えた。

『フォッフフォッフフォ』

『(ゼステイウムメーザー！)』

『フォーフフォッフフォッフ』

『(ゼットスラツガー！)』

レポートで出現する度に光線技を撃つが、受けたのは分身にせものばかり。くっそ、モノの見事に翻弄されてる…！

『フォッフフォッフフォッフ』

『フォッフフォッフフォッフ』

『『『『フォッフフォッフフォッフ』』』』

『『『『『『『フォッフフォッフフォッフ』』』』』』』

一体が分裂して二体に、二体に分裂して四体に、四体が分裂して合計八体になり囲まれる。

八体のバルタン星人が突撃して総攻撃を仕掛けてくる。数的有利っていうのは単純に強みだ。俺は防戦一方になり、それでも捌き切れず攻撃をくらってしまう。こっちは本体を見分けないと奴にダメージを与えられないのに、奴の分身は俺に攻撃できる。

(くっそ、分が悪いなんてもんじゃないぞ!?)

七体のバルタン星人は俺を中心にして囲い、両腕のハサミを向けてくる。奴らのハサミから破壊エネルギーの光が漏れる。

(え？七体？残りの一体は…)

『ウルトラ拙いぞゼット！避けるんだ！』

(は、はい!!)

俺はバルタン星人の白色光線を空へ飛び、避け様とするが。

『フォー!!』

『ジイヤ!?!』

バルタン星人の分身体の一体が俺の頭上に出現、そのまま俺に覆い被さって地面に叩き付けられる。

(邪魔だ！離れる!!)

『ゼットツ!!!』

(なっ!?)

『『『『『フォーツ!!!』』』』』』

ゼットさんの声の直後、七体のバルタン星人が白色光線を一齐に解き放つ。それも一発だけではない、次々と光線を撃ち続け爆撃を行う。

「ジイイアアアア?!?!」

(アアアアアああああアアアアアああアアア?!?!?)

『フォツフォツフォツ!』

痛い熱い痛い熱い痛い熱い痛い熱い痛い熱いイタイアツイイタイアツイ?!?!?

バルタン星人の分身体ごと俺に破壊光線が殺到し、痛みに絶叫してしまふ。

『無様なウルトラマン
フォツフォツフォツフォツ!』

「……イア」

ピーコンピーコンと、カラータイマーが赤く点滅する。エネルギーの量の低下や負傷を負った時に危険信号の役割を持つカラータイマーが鳴り出した。……はは、寧ろまだ生きてる事が奇跡なのでは？

爆撃が止んで倒れ込む俺をバルタン星人が嘲笑う。

勝利を確信でもしたのかバルタン星人が歩み寄ってくる。

『ウルトラマンだからと警戒したが、
フォツフォツフォツ、
さてはキサマ未熟者だな
フォツフォツフォツ?』

「……………」

『笑いモノではないか身の程知らずよ
フォツフォツフォツフォツフォツフォツフォツ!!』

『(……ゼステイウムメーザー)』

『ブオツ?!』

隙だらけ且つアホ丸出しで高笑いするバルタン星人の片目にゼステイウムメーザーをぶつけて爆破する。

片目にハサミを押し当てて悶絶するバルタン星人を尻目になんとか立ち上がる。へっ、ざまあみろってんだ。馬鹿みたいにベラベラ喋

りやがって。

(詰めが甘い辺り、お前も若造なんじゃないのか?)

『フォツ!? フォーフォツフォツフォツ!!』

あり? 通じた。……まあ、それならそれで挑発させてもらおうかな。

怒って馬鹿正直に突撃してくれば儲け物だし。

(ムキになるのは凶星だからっていうよな? なんだお前、若気の至りで地球侵略に来たのか? その癖にはウルトラマンが来ない星を狙うとかビビってる証拠じゃないか)

『フォツ……フォォー……!!』

奴は激怒して大量の分身体を作り出した。人間なら顔を真っ赤にして怒ってんだろうな。

ってか、そうきたか。作戦失敗じゃん、拙いなこりゃあ。

『せめて、本体さえ見抜く事ができれば。くそっ! 目で見ても違いがわからねえ!!』

(目で、見ても……)

ふと、とある言葉を思い出した。

GIRLSに来る前に出会ったあの人の言葉を。

(——『見える物だけ信じるな』か。……よし、ゼットさん。目を閉じてください)

『……え? へ?』

(いいから早く、お願いします)

『わ、わかった!』

俺の言葉にゼットさんは困惑した様子だったけど言う通りにもらう。

俺だけでなくゼットさんの視界が途切れるのを確認すると小さく俯き、両足でしつかり地面を踏んで、掌を前に向けた状態で左腕を胸より上に、右腕は逆に胸より下に配置して集中する。耳で音を拾い、肌で風の流れを感じ、足で地面の振動を確かめる。情報を得る視界をシャットしたお陰でそれ以外の感覚が研ぎ澄まされる。

すると、視界以外の感覚が混ざり合い超感覚が出来上がるのを感じ

取れた。

(……！)

研ぎ澄まされた超感覚が奴の隠し切れない感情の昂りに反応した。視界が閉じて漆黒の空間だというのにはつきりと奴の姿を捉えた。

——後頭部に向けられる奴のハサミ、俺の頭を吹っ飛ばすつもりだろう。

「ジイイヤア!!」

奴が光線を放つ瞬間、俺は屈んで躲した。

奴が困惑する気配を感じる。そして俺は、

(そこだあああ!!)

振り向きさま様にアルファバーンキックで奴の片腕ハサミを破壊した。

(よっしやあ!!)

『ウルトラヒットー!!』

『イギヤアあオレのウデがアアアア?
ブオーー!!?ブオツブオツブオー!!?』

俺とゼットさんの興奮する声とは裏腹に、奴は腕を破壊された痛みで倒れてゴロゴロと転がり回る。

「ジイア」

『……ッ!?フォッ!』

俺がうつ伏せに倒れるバルタン星人の側に近寄るのを奴が察知すると、奴の姿が消える。

「……ジイ」

(………)

俺は再び目を閉じて感覚を研ぎ澄ませ、奴の居場所を探る。

……見つけた。これで終わらせてやる!

アーマーが光を放ち、腕にエネルギーが集束する。ゼットさんと息を合わせ必殺光線を解き放つ。

『(ゼステイウム光線!!)』

十時に組んだ手から凄まじい威力の光線が放たれ、まっすぐに空へ、逃げるバルタン星人へと伸びて直撃する。

バルタン星人の断末魔すら消し飛ばす程の光がスパークし、直後空に紅蓮の大華を咲かせた。

「…………ジイヤッ!!」

バルタン星人が完全に倒されたのを確認すると空へ飛び立った。

「やったー!」 「ありがとう!!ウルトラマンZオオオ!!」 「うおー!!助かったんだ!!」

少し離れた所からウルトラマンZを喝采する声で満たされる。皆がウルトラマンZに感謝し、無事に助かった事に安堵している。

私は一般の人達とは少し離れた所で自衛隊の人達に保護されている。異星人が倒されてウルトラマンZも飛び去り自衛隊の人達に指示を終えた隊長と思われる人が歩み寄ってくる。

「君も、よくやってくれたね」

自衛隊隊長の人が私を労ってくれる。その瞳には少し不安が見え隠れしていた。多分、一般の人達が私に暴力を振るった事を危惧しているのだろう。

「大丈夫、です…」

「…………そうか。ゆっくり休みたまえ」

そう言う私を一人残し隊長の人は部下の人達の元へ向かった。

「……………」

傷付かなかったと言えば、嘘になる。守る人達から暴行されて罵倒された。正直、ショックは大きかった。

けど、覚悟はしていた。私は怪獣娘の中では古参の方だ。その上、私が宿すカイジューソウルは怪獣の中でもトップレベルで危険な怪獣。当然、受け入れては貰えなかった頃もあるし今でも怯えられたりする。だから少し慣れてる所はある。

それでも怖くない訳がない…!みんなは私を最強の怪獣娘と呼ぶ、誰も寄せ付けない孤高の存在だと。

「…そんな訳、ない」

私は、唯、怖いだけ。皆私をゼットンの怪獣娘として視る。

もしも失敗して、失望されるのが怖い。誰か共に行動して、想像と違うと見放されるのが怖い。守り切れなくて、失うのが怖い。怪獣娘

じゃない私を知って、否定されるのが怖い。

——目的のないまま活動してる自分を知られるのが怖い。

他にいないから、出来る人がいないからしてるだけ。自分のしたい事なんて何もわからない。いつもいつも悩んで悩んで悩んで、それでも答えなんて出てこない。ただ言われた事、頼まれた事をしているだけ。

アギラに似ていると感じたのは、自分のしたい事がわからなくて悩んでいる姿に共感したから。悩み続けながらも前に進もうとする姿に憧れたから。今の妥協する様になった私とは違い怪獣娘になつたばかりの頃の私を思い出してしまったから。

私は怖がりだ。自分の意思の示し方もわからなくて、素の自分を他人に見せる事が出来ない様な人間だ。

——でも、ウルトラマンからすれば私もきつと特別じゃない、守るべき人々の一人の筈なんだ。

「……このメダル」

ウルトラマンの横顔が描かれたメダル。

相変わらずこのメダルを見ていると胸がざわつく。

「……ウルトラマン」

でも、このメダルがああウルトラマン。

私を二度も救ってくれたウルトラマンZとの繋がりだと思つくと、胸がドキドキする。

「ゼット…様…」

一方その頃。

「ボクを一人にしないでよー!」

「ご、ごめん。ごめんって」

(痛い!痛いつてアキさん!?ヤメテ!お願い!!)

ポカポカとアキに叩かれる。怪獣娘になってないし手加減もしてくれてるんだけどバルタン星人戦でボロボロになった俺には激痛で、涙が出そうになるのを必死に堪えてる。

「ゼツトのバカ!!」
（ギイイヤアアア
!?!?)

大潜入!?虹の魔境調査作戦! (前編)

侵略者バルタン星人によるGIRLS襲撃。この事件は政府によるGIRLSを、怪獣娘の評価を著しく低下させる事態となった。

襲撃からたった数分で無力化され、中にはベテランの怪獣娘が複数名居たというのに。そして何より最強の怪獣娘のゼットンの敗北、それが決め手となっていた。

政府はGIRLSに責任追及を行い、世の怪獣娘反対派の人間はこれをチャンスとテレビや雑誌、様々なマスメディアを要して怪獣娘を批判し排他的な呼び掛けを行った。そして納得し怪獣娘を毛嫌にする人がちらほらと現れ始めた。

だが一般人の大半は、この怪獣娘の批判する声に不満を募っていた。常に何処で何を話し合ってるのかわからない政府なんかよりも、より身近な存在で、尚且つ事故や事件が起きた時は自分達の為に動いてくれる怪獣娘を擁護する一般の声も多数上がっている。

現在、インターネットなどではどこもかしこも怪獣娘の話で持ちきりだった。少しでも批判的なコメントでもすればより多くの肯定派の人達に袋叩きにされる事など日常茶飯事になっていた。

その一方でウルトラマンに対する評価は肯定する声こそ溢れているが否定する者は一人もいなかった。

人間というのは現金なもので50メートルある巨人でも危険な存在なら恐れ、守ってくれる存在なら受け入れられる。何も知らない人達からして重要なのは自分達にとって有益か有害か、それだけだった。

そしてGIRLS襲撃事件から早一月が過ぎた頃、東京渋谷の上空に毎日とある時間になると雨も降っていないというのに虹が見えるという異常現象が起きた。

「いいですか皆さん!」

毎度お馴染みGIRLS東京支部。その会議室にて五名の怪獣娘

が集合していた。

ピグモン、ゼットン、エレキングの三人に、どくろ怪獣の怪獣娘であり大怪獣ファイト初代チャンピオン『レッドキング』、そして大怪獣ファイト期待のルーキーにして古代怪獣の怪獣娘『ゴモラ』。

ゼットン、エレキング、レッドキング、ゴモラの四名はピグモンの言葉を待つ。

「はつきり言っただけ私達にはもう後がありません。異星人によるGIRLS無力化、その影響で日本政府の人達は私達の存在意義を疑っています」

「はあ!?なんだよそれ!」

ピグモンの言葉に声を荒げたのが、レッドキングだ。

鼻先に絆創膏を貼り、『レッド』キングなんて名前を持ちながら黄色の無骨な獣殻シエルを上半身に纏い、真逆にフリルのスカートにガーター、それと尻尾の先にはリボンと、可愛さを下半身に詰め込んだ様な姿をしている少女は机を叩いて立ち上がる。

「落ち着きなさい」

そして怒るレッドキングを宥めるエレキング。彼女は冷静に事実を事実のまま受け止めている。もしくは事前からピグモンに話を聞いていたのかもしれない。

「お前は悔しくねえのかよ!何も知らねえ奴らに好き勝手言われた拳句に、俺達怪獣娘を否定されてんだぞ!!」

「だから落ち着きなさいと言っているでしょう。それにバルタン星人の時に私達は何も出来なかった、その事実は変わらないわ」

「でもよ!!」

バルタン星人の停止光線によって止められた者にピグモンやエレキングは勿論だがレッドキングも含まれていた。彼女はバルタン星人に背後から停止光線を浴びせられ何も出来ずに止められていた。

面倒見の良い姉御肌な性格の彼女は何の力も無い職員は勿論、後輩の怪獣娘を守る事が出来なかった事を悔しく感じていた反面、バルタン星人に果敢に挑んだ後輩達を誰よりも誇らしく思っていた。

そんな怪獣娘達を批判する政府に人一番反感を抱いていた。

「これ以上無駄な議論に時間を割くつもりはないわ」

「なんだと!」

だがエレキングはそんなレッドキングの激情を切り捨てた。

「ちよちよちよつと待ってストップ!ストオオストップ!!」

「離しやがれ!!いい加減我慢ならねえ!!」

「キャッ!」

頭部の両側面に対で二本、額にも一本、合計三本の角に灰色の髪。身体に宿す怪獣と同じ様な腕と脚、そして尻尾を備え、何故だかスク水に似た獣殻シエルのゴモラがエレキングに掴みかからんとするレッドキングを止めようとするが振り解かれる。ズンズンとエレキングに歩み寄るレッドキング、けれどエレキングは視線すら向けやしない。

その態度が一層レッドキングを刺激し、とうとうレッドキングが拳を振り上げた。

「……そこまで」

「離せよ」

振り上げられた腕をいつの間にかレッドキングの背後に立っていたゼットンが掴み止め、レッドキングはそんなゼットンを横目で睨み付ける。

「さ、ピグモン。本題を話して」

「……はあ、わかりました」

すぐ近くで睨み合っている(睨んでいるのは片方だけだが)二人を無視してエレキングはピグモンに続きを促し、ピグモンも溜息を吐きつつもレッドキングはゼットンが止めてくれると信じて話し出す。

「つい最近、渋谷の空に見える謎の虹の調査を依頼されました」

「依頼?何処から?」

「国連からです」

「!!!!」

ピグモンの言葉に全員の視線が集中した。ゼットンすらも驚いた様子でピグモンに視線を向けていた。

「より正確に言うならば国連から依頼を受けた政府から、ですけどね。でもこれは、落ちた私達怪獣娘の評価を戻す。いや、以前よりも更に

上げる事も可能な筈です。逆に今回の依頼を失敗すれば」

「本当に終わりって事ね」

「はい。なので絶対に失敗できません」

「なら成功させればいいんだろ？ だったら善は急げだ！ 行くぞ!!」

レッドキングがピグモンやゼットン達に背を向けるが、次のエレキングの言葉でピタツと停止する。

「作戦内容も聞かずに何処に行くというの?」

「……………」

レッドキングは何も言わずに元の席に戻り、目を閉じてむすつとした顔で腕を組んだ。ほのかに頬が赤くなっているのはきつと気のせいではないのだろう。…………可愛い。

「……………」

「……………」

皆の視線が集まる中、続きを早く話せと促すレッドキング。

頬の赤みが少し増した。

「えー、コホン。これより依頼と作戦の内容について説明します。まず今回の事の発展に至った理由ですが、ついさつきも言った通り謎の虹の調査です」

「虹の?」

「はい。どうやらあの虹の座標から異常な磁波が感知されたみたいでして。調べてみた所、以前の巨大怪獣とウルトラマンZが出現した穴。あれと場所が一致し、樹海の異次元空間へと繋がっていたみたいなんですよ」

「異次元空間…」

「はい。今回発見した異次元空間は何が待っているかわからない未知の塊です。一説ではあの異星人はこの異次元空間を通ってやってきたと言われています」

「……………」

ピグモンが話した作戦内容。それは自衛隊と共に異次元空間へと侵入し調査する事。

「調査内容は異次元空間の規模、空間内の生命体の有無、そして異次元

空間の先について。この三つです」

「異次元空間の規模はそのまま、どれ程の広さかを調べる。次に異次元空間内の生命体の有無。それはつまり」

「怪獣がいるのか、いないのか調査します」

「……」

異次元空間内に怪獣がいるか？それは大きな問題である。仮に怪獣がいて異次元空間から街に出て来た時、ウルトラマンZと共に現れた怪獣の様に大暴れするかもしれない。

ウルトラマンZが現れて戦って貰えばいいという意見もあるだろうが、そもそもウルトラマンZが来てくれる保証は無いのだ。それにウルトラマンZが来たとしても街で戦闘すれば少なからず被害は出る。

「そして最後、異次元空間の先についてですが」

「……先？」

ピグモンの言葉にゼットンが返した。

「はい。もしかすれば異次元空間の先、そこはウルトラマン達がいる次元に繋がっている可能性があります」

「!？」

「ゼットン？どうかしたのか？」

「………何でもないわ」

ゼットンは手の中にある一枚のメダルを見詰める。

「ゼット様……」

「という訳で、今回この場に呼んだのは他でもありません。異次元空間の調査を貴女達四人にお願いしたいんです」

「なるほどねー。だからあの新人の子達は呼ばれてなかったんだね」

「作戦は三日後です」

「なんだ、すぐじゃないのか？」

「何の準備もしないで行くつもりだったの？…呆れた」

「お前はいつも一言余計なんだよ……ッ」

「まあまあ、落ち着いて。…ね？」

「………」

額に青筋を浮かべ口端がびくびくと揺れているレッドキングと、意にも介していない様子のエレキング、そしてレッドキングを宥めるゴモラに「心此処にあらず」といった感じのゼットン

このメンバーで大丈夫なのかと心配になるピグモンが小さく一つ溜息を吐いた。

大潜入!?!虹の魔境調査作戦! (中編)

「……虹、か」

高校の授業中、俺は窓側の列の席で教師の言葉を聞きながらも空に浮かぶ虹を見つめていた。

変身は出来なくてもゼットさんと会話するぐらいならこちらからでも出来る様になり、相談してみた結果。あの虹は以前ゼットさんやゲネガーグが通ったブルトンの異次元穴の影響で空間が歪み、何処でもない何処か、異次元空間に繋がってしまったらしい。あの虹も空間の歪みにより発生した磁波が虹に見せかけてるだけの様だ。夏の日差しで道路が溶けて心綺楼が出来るのと近いのかな？

「まあ、今日中にでも消えるらしいし特に気にする事はないかな」

「授業中に独り言とはいい度胸だな。ならあの英文を訳してみろみつくに光国」

げ、項羽!?!——じゃなくて英語の教師の矢的先生。

黒いさらっさらのロングの髪にノースリーブのタートルネックを着たデカイ胸の美人先生。その見た目と何事にも動じないクールな性格から男女問わずに人気者な先生。ただ、クソが付く程の真面目で少しでも聞いてないと判断すれば難題をぶつけてくるんだよなあ。

……と言っても聞いてない俺が悪いのは事実な訳だし答えますか。俺は黒板に書かれた英文に目を向ける。えっと、何々……??

「……『遠い星からやってきた男が愛と勇気を教えてくれる』」

「……ふん、いいだろう」

なんだこの英文？

俺が答えると先生は興味をなくした様に俺から視線を外して黒板の方へ向かっていった。それにしても先生の腕、っつか肌綺麗だな——づつ。

ふと背筋にゾゾツツと氷でも入れられた様な錯覚と突き刺す様な視線を感じる。俺は恐る恐る目だけ向けると。

「……ツ」

アキが射殺してきそうな目で俺を睨んでた。バルタン星人やゲネ

ガークと戦った俺だが、あの二体よりもずっと怖いぞ！

ツーツと冷たい汗が一滴額から流れ、俺はアキと目が合わない様に窓の外に顔を向ける。くわばらくわばら……ん？

(虹の所の近くに、なんだあれ？ヘリコプター？……でもなんかゴツいな、プロペラ二つ付いてるし。軍用、とかか？つてもしかして異次元空間に入るつもりか!?)

俺は軍用ヘリ？に目を凝らす。すると思った通り、ヘリは虹のすぐ近くで消えた。異次元空間への歪みに入ったんだ。

(ウルトラマンになって助けに行こう)

「おい光国、二度目はないぞ！……それともなんだ？お前は私と二人で放課後にでも補習を受けたいのか？」

「……ギリイ」

取り敢えず今は真面目に授業を受けよう。

い、いや、別に齒軋りしただしたアキにビビった訳じゃないよ？学生の本分は勉強を受ける事なだけだし。

(誰に言い訳してんだ俺?)

何故だか胃の痛い時間を過ごした。

「いつもの時間でいいよな？」

「……………うん。またね」

「お、おう。……………行ったな」

学校を終え、どこか不機嫌なアキをGIRLSまで送り届けた俺はそそくさと人気の無い裏路地に入り込む。念の為もう一度周りを確認し、人がいない事を確認してからゼットライザーを取り出す。

空を、虹の箇所を見上げればゼットライザーを握っているからか異次元空間への歪みが今にも消え掛かっているとわかる。

急がないと……ッ。俺はゼットライザーを額の前に上げて祈る様にぐっと握った。

「ゼットさん、お願いします」

ギリギリまで追い込まれ、それでも諦めない俺とゼットさんの気持

ちがぐつと噛み合った時に漸く変身できる。それが俺がウルトラマンZに変身する最低条件。

「……うぐっ」

だが例外もある。それはゼットさんの意思で変身する事だ。

既に何度か試した事もある。

「……っ、……ッ」

身体が俺の言う事を効かなくなる。まるで俺の中に別の存在が居て、それに動かされてる様な……いや、事実その通りなのだが。

まだ慣れない感覚について反射的に抗ってしまい呻く様な声が漏れる。

俺の身体は一人でゼットライザーのトリガーを押した。俺の背後にヒーローズゲートが現れ、続けてアクセスカードをゼットライザーにセットする。

《Zetuto Access Granted》

機械的な音声が鳴り、メダルをセットする事なくゼットライザーのブレードを動かし最後にトリガーを押した。

背後からヒーローズゲートが迫り俺に触れる。ヒーローズゲートが俺を過ぎた時、俺の姿は地球に初めてやってきた時の、オリジナル本来のゼットさんの姿に変わっていた。しかもサイズは俺の身長とほぼ同じ。等身大のウルトラマンZだ。

『全く、この姿はウルトラキツイって言うてるだろう』

(す、すいません)

俺の身体を借りてゼットさんが変身するこの状態なんだが、実はエネルギーの消費が普段の比じゃなく50秒しか維持出来ないという欠点を抱えている。

俺個人の見解なんだが、さっきも言ったけどウルトラマンZには俺とゼットさんの二人の気持ち歯車みたいに噛み合う事で変身できるのに対して、今回の様な変身はゼットさんだけの意思で無理矢理に変身しているからなのは、と考えている。

つまり、この状態でもゼットさんと心を合わせる事が出来ればアルファエッジの時みたいに三分間の変身が出来るんじゃないか？要検

証だ。

つて今はそれどころじゃねえや。

『まあ、お前の気持ちはわかりますが』

(はは、ははは…。それよりも早く行きましよう時間は限られていますよ！)

『ああ、そうだな』

「デュワァー！」

ゼットさんは空へ飛び立つ、行き先は異次元空間の入り口。

俺の身体を借りたゼットさんは異次元空間の入り口に入り、無事侵入する事が出来た。お邪魔しまーす。

異次元空間の中は樹海だった。ゼットさん越しに見渡してみれば例のヘリが確認出来た。

『もう無理。限界でございます』

(え?…あ、ちよっ!?)

そこでゼットさんが限界を迎え変身が解けてしまい俺は空中に投げ出され、そして落下した。

「うげえっ!?!…ああ」

落下する最中、木の枝に服が引つ掛かり宙ぶらりん姿になる。枝がミシミシ言ってるし、ヘタに暴れたら枝が折れて地面に激突しそうなので取り敢えずこのまま辺りを確認しよう。

目に入るのは木と葉っぱと土と空。それが見渡す限り続いている。うん、辺り一面大自然。

「……」

そしてそんな大自然の中でとびきり異色を放つのが赤い爆発、黄色い電撃、弾ける大岩——を受ける銀色の怪獣。

集まれ怪獣娘、飛び出せかいじゅうの森。ヤバイやん。

「■■■■■■ ツッソー!!」

結構離れた俺でも咄嗟に耳を押さえてしまう咆哮。その音量は衝撃となって襲い掛かる。全身に圧が掛かりバキツと今一番聴きたくない音が聞こえた。

一瞬の浮遊感。直後、重力の偉大さを知らしめられ俺の身体は落下

する。

「わああああー?!?!あべしっ」

腰が痛い。背中からビターン!と地面にぶつかる。

不幸中の幸いなのは地面が硬いコンクリートや岩とかじゃなくて比較的柔らかい土とそのうえ、クッション代わりの草が敷かれていた事だ。

「……お陰で若くして腰痛持ちに成らずにすんだな」

腰を押さえつつ立ち上がるとゼットライザーを再度構える。連続変身で申し訳ありませんけど、今度は俺も一緒なんで頑張りましたよ!

「おおおっ!」

走り出した俺はゼットライザーのトリガーを押して目の前に現れたヒーローズゲートに飛び込んだ。

ゼットが異次元空間へと入る一時間前。

異次元空間へと侵入した自衛隊とゼットン、エレキング、レッドキング、ゴモラの四人の怪獣娘は作戦開始前、改めて行われたピグモンの指示通りに動いていた。

そして先頭を進むのはゼットンとライフルを装備した自衛隊の一人。

「まさか、また君と共に行動する事になるとはね。頼もしい事には変わりないが……大丈夫なのか?」

「……はい、問題ありません。大山隊長」

大山と呼ばれたゼットンの隣に立つ彼は、バルタン星人によるGIRLS襲撃の際の自衛隊の部隊隊長その人だ。

今回怪獣娘と共に異次元空間の調査作戦を聞き、誰よりも早くに立候補し、バルタン星人襲来の際に怪獣娘と直にコミュニケーションを取った彼なら今回も怪獣娘と共に活動できるだろうと彼の部隊が抜擢された。

「……………」

「…そうか」

大山はゼットンの表情から何も感じ取る事が出来ず、先の発言が嘘か真か判断出来なかった。無理をしているのではないか？大山は特別なチカラこそあるモノの若い女性である彼女を一個人として心配していた。

しかし立場上、一人に肩入れする訳にもいかない。仕方無しと彼は一先ずゼットンの言葉を信じて部下の一人の元へ向かい話し掛ける。「通信機の調子はどうか？」

「ダメです。やっぱりこの空間の異常な磁場が原因で繋がりません。それにこんなもの見た事なく、お手上げ状態としか言えません」

今回の彼らの部隊には最新の装備や乗り物が与えられていた。

軍用へりに銃器と様々な機器が渡されていた。無論通信機も異国の最新の物だ。だが異次元空間へと入った途端に通信機は使えなくなってしまう。何とか通信機を使用出来ないかと試行錯誤しているが最新、それも異国の物だ。何をどう触ればいいのかすら判らずじまいだった。

「どうぞ」

「おう、ありがとよ」

集団の殿、背後からの襲撃に対抗すべく警戒しているのはレッドキング。彼女は自衛隊の隊員の一人から水筒を渡された、彼女も礼を言ってから受け取り水を飲む。

超常の存在である怪獣娘同士が試合としてだが戦う大怪獣ファイアの初代チャンピオンである彼女、その実力は折り紙付きで現チャンピオンであるゼットンにこそ一歩届かないが今でもナンバー2の座は守り続けている。そして、再びチャンピオンに返り咲く為にトレーニングを重ねている。彼女は間違いなくトップクラス怪獣娘の一人だ。

「お前らも無理すんなよ。後ろにはオレが居るからな！」

「はは、流石に自分より下の歳の女の子に守られっぱなしは情けない

からね。まだまだいけるよ」

「へー、ガッツあるじゃんか」

そんなレッドキングは面倒見が良く、それは今この場でも発揮されている。レッドキングは隊員達と対等に話し、隊員達は頼り甲斐のある彼女の姉御肌な性格と態度に背中を守られている為、適度な緊張感が保たれている。

「……はあ、呑気なものね」

部隊の上空にはエレキングが乗る軍用ヘリが位置し、頭部の対になる三日月型のツノをアンテナみたいにくるくると回して近くに動くものがないかレーダーの様に探知している。

それは真下にいる部隊の人間は勿論、更に下である地中に潜るゴモラの居場所もしっかりと察知していた。

「……！止まって」

「!?一旦とまれ!」

「了解!」

エレキングの角がナニカを捉えた。異次元空間の強力な磁場の影響で感知しづらくはなっていた為、ソレは突然エレキングのレーダーに反応した。

「ん?……皆、とまれ!」

頭上のヘリから顔を覗かせ、目立つ様にケミカルライトを振るう部下の姿にいち早く気付いた大山は、部隊を停止させてゼットンに目を配る。

大山と視線が合い、あらかじめ意図を教えられていたゼットンはこくりと頷き、レポートでエレキングの元へ向かった。

「何か、感知したのでしょうか?」

「かもしれないな。全員に警戒する様に伝えろ」

「ハッ!」

その時だった。

ドシンドシンと地響きを起こし、エレキングはおろか普通の人間である隊員達でも何故今まで気付かなかったのか不思議な程大きな音

が近くで鳴り響く。

不可思議な現状に戸惑うも流石は訓練された者達というべきか、すぐさま陣形を組んで警戒態勢に入る。怪獣娘も遅れて警戒する。

「上だ!!」

「まさか……!?!」

「おいおい、ウソだろ」

人の何十倍の巨大な尻尾、銀色の体表に黒い罅のような模様を走らせ、両側頭部にはヤギの様に渦巻く角、後頭部から尻尾の先までトゲの様な背鰭を無数に生やし、およそ括れの見当たらない凶体の怪物。

見上げるとこちらを眺めていた、怪獣『シルバゴン』が全員の視界に映った。

「……ギイグウ?」

シルバゴンは首を左右に振って視線を巡らせる。まるで何かを見失い、探しているかの様に。

「くそっ!上の奴らは何してんだ!」

「俺達もこの距離で気付かなかった。きつとこの空間が異常、或いはあの怪獣の能力かもしれない!」

「言ってる場合ですか!?!隊長どうすれば!」

「まだ撃つな、却って刺激する可能性がある。今現在、襲われていないのは奴が案外温厚な性格なのかもしれない」

「そ、そんな事が、あり得るんですか?」

「人間だってそれぞれ性格は違う。最大限警戒しつつ様子を見よう」

「了解」

すぐそばに怪獣が居るというのに、慌てず大山の指示に従う隊員達。彼の隊長としての人望、信頼が窺い知れる。

シルバゴンは凶悪な顔からは信じられない程に大人しく、首を小さく振って辺りを確認している。まるで何かを探している様にも見える仕草だ。

「何かを探しているのでしょうか?」

「わからん。だが、念の為にへりは遠ざけておこう。連絡できるか?」

「はい」

大山の指示を受けた部下は腰元から銃口の大きい銃に一発の弾を装填すると空に向けて放った。

バビュンと音を立てて赤い煙が空へ線を描く、彩煙弾だ。ヘリの方も意図を理解した様で煙の方へ離れようとした、その時。

「……ギィア」

シルバゴンは煙を辿り、顔を上げ、そして吠えた。探し物が見つかったのだ。

シルバゴンが腕を伸ばす、離れようとする軍用ヘリに向けて。

ヘリは伸ばされる腕に慌てて離れようとするが捕まってしまった。

「グワオオオオ!!」

ヘリを掴んだシルバゴンは無邪気な子供の様に喜び、無邪気な邪悪さを曝け出した。ヘリを掴んだ腕とは逆の腕で振り上げれば、直後にヘリに叩き付けようと振り下ろされた。

——瞬間ヘリから飛び出す人影が。

「させないわよ」

エレキングだ。

彼女は腰に装着された尾の様な太鞭を右手で握り、取り外すとシルバゴンの目に向けて振るった。バチンツ！と音がし、シルバゴンがヘリを離して目元に両手を押さえてたたらを踏む。

対して浮遊能力の無いエレキングが上に伸ばした左腕をゼットンが掴みテレポートでヘリの元へと運ばれる。

「……凄く堅いわね」

シルバゴンを己の武器で叩いた時、この世のものとは思えない異常な堅さを思い知った。鉄や壁の様な無機質な硬さでは無く、生命体特有の堅さ——だというのに鋼鉄なんかを遥かに凌駕する怪獣の皮。まるで限界を超えてギュウギュウに綿を詰め込まれたヌイグルミだ。

「これは厄介よ、ゼットン」

「——問題無い。貴女達もいる」

「私は戦闘タイプじゃないのだけれ」

「自衛隊の方達を避難させて」

言葉を遮る彼女にいいのか、と視線で訴える。

だがゼットンにはエレキングに目を向ける事すらせずシルバゴンを見据えている。

「わかったわ」

やがて観念した様に返事をすればゼットンは何も言わずに轉移した。

「オラア!!」

「!?ギイアオオオ!?!」

レッドキングが自慢の豪腕をシルバゴンの右脚の膝裏に叩き付ける。がくん!と膝が曲がりバランスが崩れる。

そこに、

「足元注意ってね!」

ゴモラがシルバゴンの足元から飛び出した。

直後に右足の下が崩れ、陥没する。足を取られて前のめりの姿勢になる。

「ギイオオオ!?!」

「……ゼツ、トン!」

両腕をブンブンと振り回しながらなんとか倒れない様にバランスを保とうするシルバゴン。仕草だけならなんだか可愛らしく見える光景だが、容赦無くゼットンがシルバゴンの後頭部に流星の様な飛び蹴りを見舞い、脳が揺れたシルバゴンはそのまま前方へ倒れた。

「うわっ!……おつとつとつ、ふう」

ドシーン!と大地が揺れる。ゴモラなんかは大袈裟にバランスを崩すもなんとか持ち直す。

「こいつを、くらいなあ!!」

どこからともなくレッドキングが飛び出す、両腕で掴み掲げるのはおよそ3メートル程の大岩。それを伏せるシルバゴンの後頭部に落とす。

「続くよー!」

レッドキングに続いてゴモラがシルバゴンの頭目掛けて攻撃する。両足で大地をしっかりと踏んで全身に力を込める。ぶわつと赤いオーラがゴモラの身体から滲む様に放出され、額のツノに集結する。人の目ではわからないがよく見ると角が微弱ながら振動しているのがわかる。

「チャージ完了！じゃあ、いっくでー！『超振動波』!!」

それは本来は固い岩盤などを柔らかい土へと崩し、地面の中を自在に掘り進む為の能力を衝撃波として攻撃する技。ゴモラ自身がいざという時にしか使わない奥の手。規格の違スケールいからダメージは微々たるもの——と侮る事なかれ。

振動が生み出す破壊エネルギーは実体ある物質である限り確実なダメージを外から内へ、内から外へ打ち響かせる。

「ギオオオオッー!!!」

それでもやはり威力が足りず、精々頭痛程度の痛みしか感じていなかった。寧ろシルバゴンに怪獣娘達を敵と判断させ、怒らせる結果となった。

咆哮という衝撃はシルバゴンに比べて短小すぎる者共どもをまとめて吹き飛ばした。

「うわー!？」

「くうっ、なんて馬鹿げた大声だよ」

咆哮で怪獣娘達を吹っ飛ばしたシルバゴンは起き上がり、その巨軀故の災害級の暴れっぷりを披露する。

地面を踏み砕き、腕を大気を薙ぎ払い、山や木を蹴飛ばす。飛来する土塊や岩、木の破片が無差別な砲弾となって襲いくる。

「……………」

「あぶッあぶな!？」

「フッ！ハッ！」

「くっそお、これじゃあ迂闊に近づけねえぞ」

ゼットンテレポートで振り回される腕を躲し、ゴモラは地中にいながら踏み潰されそうになり、エレキングは飛来物を右手の尾鞭や左手の円盾で防御し、レッドキングは大岩の陰に身を潜めている。

巨体故の脅威、巨大故の強み、怪獣としての王道——怪獣娘の失われた原初の力こそが彼女達の相手なのだ。

バシユ！——ドカーン!!

「ギイガアア?!?!」

怪獣娘達が苦戦しているその時だった、風切り音と共に飛来したナニカがシルバゴンに直撃したのは。

爆発の熱と音がシルバゴンの顔面を殴り付ける。

「……?!?!」

宙に浮くゼットンが飛来物の軌道を辿れば、ロケットランチャーを構えた大山隊長の姿が。

「彼女達に遅れるな！我々が何の為に日夜訓練を積んできたか思い出せ!!我々、人間の力をあのバケモノに思い知らせてやるぞ!!」

ゼットンには聞き取る事が出来なかったが大山の言葉は、部下達全員の士気を高め武器を向けさせた。勇ましく雄叫びと共に銃弾が、ロケット弾頭、更には組み立て式の砲台からミサイルが放たれる。

人類の叡智の結晶の一つである近代兵器が異次元の怪獣に立ち向かう。

「ギイウウウ……ッ!」

顔を集中的に狙われシルバゴンもたじろいだ。

威力自体は大したものでは無く強靱なシルバゴンの身体には蚊に刺された程にも効きはしない。だが、目や口内は別である。

目は弱点でない生物などいない。元より視力が弱く、動いていない物を認識出来ないシルバゴンでも目を潰されるのはたまったものではない。『目』とは生物共通の弱点だ。

「ギイグウ……ガアアアアア!!」

だが、シルバゴンもバカではなかった。いや、或いは生物としての本能が為したのだろうか？

シルバゴンは単純に両腕で顔を隠して自衛隊の元へ走り出した。

「なっ!?撤退ー総員撤退だー急げえー!!」

その指揮は最適だった。最も取るべき選択と言えた。

が、最適な答えが必ずしも最善に繋がる事は無い。

「だめだ！追いつかれる!」
逃げられる訳が無い。体格差サイズが違い過ぎるのだから、人間が100歩走ろうとも怪獣は一步で踏み潰す。

レッドキングが岩やら木やらを投げるが気を引く事すら出来ない、ゴモラはシルバゴンの足元の土を崩そうとするが追いつかない、ゼットンが火球を次々と放つがシルバゴンの表皮を軽く炙る程度にしかならない。

「……………」

逃げる自衛隊を背後にエレキングが尾鞭と円盾を構えるが挑んだ所で結果は目に見えている。

(どうする、どうすればいい!?)

必死に思考を巡らせ打開策を考える。

けれど案は何も浮かばない、寧ろ瞬く間に潰れる距離に焦りを抱き思考が白熱化する。

(——あ、ダメ、だわ)

エレキングを暗い影が覆う、頭上にはシルバゴンの巨大な足が見える。

思考に耽る余り、全てが手遅れとなった。エレキングの命はシルバゴンの足によって潰され、後には彼女だったモノだけが残るだろう。いや、それすら残らないか。潰れる、砕け、踏み躪られてバラバラになり土と混ざって終わり。

諦めた。なまじ聡明だったが故にエレキングは逃れられない死に抗うと云う行為を捨てた。

「……………」

目を閉じ、死を受け入れる。そしてシルバゴンの足はエレキングの目の前に落ちた。

「キャッ」

大きな揺れと全身を打つ強風にエレキングをらしからぬ声を上げて尻もちを突いた。

反射的に目を開けて見上げた。自分は何故生きているのか、何故私の死ウツメイが変わったのか、一体何が起こったのか確かめる為に。

「ギイオオ……グガア……」

「ジイ……アア」

シルバゴンの呻きと聞き覚えのある声が、耳に届いた。

何者かがシルバゴンの首に両足を絡め、肩車の様な姿勢と成り後方に体重を掛けている。これによりシルバゴンの足はエレキングに届く事なく地面を踏み締めていた。

「ジェヤアー！」

そしてシルバゴンの上の——ウルトラマン光の巨人は身体を捻ってシルバゴンを倒れさせた。

「う、ウルトラマン、Z」

その男に、場所も次元も関係無し。

怪獣から命を守る為、光の巨人は光臨する。

「ULTRAMAN Z」

「ALPHA — EDGE」

(え、とんでもねえ露出じゃん。エロキングだわ)

『おいコラ』

怪獣が倒れた際にゴロリと転がり、勢いを利用して立ち上がり戦闘態勢を整える。

(ふう、大丈夫。俺は落ち着きましたよゼットさん)

『……………』

………なんすか、ゼットさん。その『大丈夫かコイツ?』って目は。

しょうがないじゃないですか、あんなヤバい格好してるあの人が悪いんですよ。こちとら高校生、見るなって方が無理なんですよ!!

『いや!その理屈はウルトラおかしいだろ!?!』

(可笑しくありません!?ゼットさんだって絶対見てたでしょ!!)

『え……いや、そんな事、ないでございますよ』

(見てましたね?見てたんでしょ、正直に白状した方がいいですよ!)

『ああもう！そんな事より来るぞゼット！』

ゼットさんが誤魔化すよう言うが事実怪獣は向かってきてきているので此方も迎え撃つ。俺は怪獣——銀色の身体してるしシルバゴンとかでいいだろ——シルバゴンに向かって駆け出した。

「ギョオオオオ!!」

「ジエヤツ！」

シルバゴンが咆哮しながら頭を突き出して突進してくる。俺は奴のヤギみたいに渦巻く角を掴んで抑えつけ——切れずに腹で受け止める。ぐうつ、思ったよりもずつとパワフルだぞコイツ!?

(こっの、ヤロウ！)

シルバゴンの顔に膝を打ち込み、怯ませた隙に押し除けると正拳を打つ。って硬え!?!ホントに生き物かコイツ!?

「ギョオオオオ!!」 「!?!ジヤツ！」

シルバゴンが腕を振り回して攻撃してくるが半歩程下がれば躲せる。そしてすかさず反撃に奴の横っ腹に肘打ち、正拳、膝蹴りと三連打を叩き込む!……けど、シルバゴンは堪えた様子はない。

(ああ……これはアレですね)

『ウルトラタフなヤロウだな……!』

すげえ防御力、それにあのパワーが突進だけなんて訳もないだろうし。純粹に厄介なタイプの怪獣だなコイツ。 という訳で作戦変更!リーチを保って戦うぞ!

「イヤ……トウワー!!」

ゼットスラツガーを稲妻状のエネルギーで繋いでヌンチャクのようにした、『アルファチェインブレード』を展開して構える。 打撃がダメなら斬撃で、とシルバゴンに一発、二発、三発をゼットスラツガーで叩き込む。ゼットスラツガーが奴にぶつかる度に火花を散らした。

(まだまだいくぜー!)

「ジエアツ！トウワー！ジィヤー！」

左手で振り下ろして一撃、右手に移してから横薙ぎに一撃、もう片方のゼットスラツガーを左手で操り一撃。ぐるりと回転しながら大

振りに一撃……て、うおっ!?!シルバゴンがゼットスラッガーを啜えて止められ、仕舞いには噛み砕かれた。

「ギィィオオオオ!!」

(ちよ、あぶっ、まつ!?)

反撃だと言わんばかりにシルバゴンの猛攻。防御は得策ではないとなんとか避け続けるけど、やべえ…段々キツくなってきたぞ。シルバゴンが右腕で殴り付けてくるのを屈んで躲し、左腕で薙いでくるのを往なし、突進での頭突きを前転で避ける。

(だつたらこれでもくらいやがれ!)

アーマーが光を放ち、左右に広げた両腕にエネルギーが迸る。

『(ゼステイウム光線!!)』

両腕を十字に組んで即席の必殺光線を放ち、突進を躲され隙だらけなシルバゴンに直撃し炸裂、シルバゴンが吹っ飛んだ。

(よっし…これは流石に効いた、だ…ろ…?)

俺は自分の目を疑った。

シルバゴンが何事もなく立ち上がりやがった。

大潜入!?虹の魔境調査計画! (後編)

(……嘘、だろ?)

シルバゴンがゼステイウム光線をマトモに受けたというのにピンピンしてやがる。ただ、シルバゴンも流石にノーダメージとはいかなかったのだろう。ふらついているが、すぐに持ち直した。

「ギイイ…、ガアアア!!……ギイゴオ!!」

シルバゴンは俺と同じ様に光線でも撃てるとでも思ったのか、ゼステイウム光線の動きを真似てから十字に腕を組むが当然何も起きず、怒って地団駄を踏んでる。

(いくら溜めの少ない即席だからってあの光線はゲネガーグ、それにバルタン星人だって倒した技だぞ!?)

だが、俺はそれどころじゃなかった。

ゼステイウム光線で倒し切れなかったのは兎も角、大したダメージにならず平然と起き上がられた事のショックで茫然としていた。

「ギイガアオオオオ!!」

『ポケットとするなゼット!』

「ツ!?ジイアア!」

うぐツツ、ゼットさんの声に我に返ったが既に遅く、奴の突進頭突きをモロに受けて後退する。シルバゴンが続けて殴り掛かり、俺は奴の拳を受けて吹っ飛び背中から地面に倒れる。

「ギイアゴオオオ!」

「ジエアア!」

「そんな、ウルトラマンが負けてるぞ」

それは誰の言葉か、或いは全員の心の内か。ゲネガーグ、バルタン星人を倒した光の巨人がああ怪獣に苦戦しているじゃないか。

確かに前回のバルタン星人を相手にした時も苦戦していたが、それはバルタン星人が分身や瞬間移動などでウルトラマンを翻弄したからだ。攻撃が当たりさえすれば有効打となった。

だが、今はどうだ。バルタン星人を相手にした時とは違いウルトラ

マンの攻撃は怪獣に直撃している、それも何度も。なのに効果が無い。あの穴から出てきた大顎の怪獣とバルタン星人、両方を倒した光線もあの怪獣には有効打には成り得なかったら。

「ゼットン…様…」

「隊長、大変です!!」

「!?…どうした、何があった?」

誰もが、怪獣娘達ですらショックを受けている中、ヘリが彼らの側に降り立つと、一人の自衛隊員が慌てた様子で飛び出し大声で叫んだ。大山はなんとか精神を落ち着かせるとヘリから降りた部下に訊ねる。

「に、虹が、異次元空間の入り口の虹が、消え掛かっています!」

『!?!?』

「な、なんだと!?!」

隊員が指差す方に向けば、確かに薄くなっている虹が見えた。

もし、あの虹が消えれば?全員が最悪を想像した。——即ち帰り道の消失、一生この空間に閉じ込められるという事を。

「総員、可能な限りヘリに乗り込め!脱出するぞ!!君達」

大山は部下を数人ヘリに乗せるとゼットン達怪獣娘に頭を下げて頼み込む。

「すまない、どうか我々を運んでもらえないだろうか!?!」

「おう!」

「任せといて!」

「……ええ」

大山の言葉にレッドキング、ゴモラ、エレキングが了承する。

しかし、

「待って」

「……ゼットン?」

ゼットンだけは大山の言葉に応えなかった。

「……何かね?」

「ゼットさま——ウルトラマンはどつするの?」

「……………」

ゼットンという言葉にレッドキングやゴモラ、エレキングは未だ怪獣と戦っているウルトラマンZに目を向ける。

「ジィヤア！」

「ギオオオオ!!」

「……彼には、ここで怪獣を、食い止めてもらう」

「置いていく、という事？」

「……………そうだ」

「!」

「……そう、ね」

大山の言葉にレッドキングとゴモラは驚いた表情をする。エレキングは大山の指示の意味を理解し、納得しようとしている。

「そりゃあねえだろ！アイツはオレ達の為に戦ってんだぞ！」

「そうだよ！それなのに彼を此処に置き去りにしていくの!」

「……私だって本意ではない。だがあの怪獣はウルトラマンでも手に余るバケモノだ。あんなヤツがもしも地球に来てしまえば大惨事になる。それは許容出来ない。幸い、入り口さえなくなればヤツはこの空間から出る事はない」

「その為にウルトラマンを見捨てるのかよ!」

「落ち着き、なさい。彼の言葉が正しい事ぐらい……貴方達も、わかっているでしょう」

「お前も助けてもらったんだろ！それでいいのかよ!!」

「……………」

レッドキングの言葉にエレキングが動揺する。レッドキングの言う通り、エレキングはつい先程命を救われている。なのに、取り残していく事に思う所があるのだろう。

「喧嘩している暇はない、兎に角今は脱出する事に集中するんだ！」

「納得出来るか!!」

「今作戦での指揮権は私にある！」

「ふざけんな!!」

ウルトラマンを見捨てる事が出来ないレッドキングとあくまで自衛隊員として行動する大山。話は平行線のまま終わりそうになかつ

た。

「…レッドキング、大山隊長の指示に従って」

「ゼットン!」

なんとゼットンが大山の指示に肯定した。ウルトラマンの戦いを一番食い入る様に見ていたのはゼットンだ。バルタン星人の事件でウルトラマンZに救われてから彼女はウルトラマンZに異様に執着する様子を見せる事も多々あった。

この中で一番、ウルトラマンZに好感を抱いていたゼットンだと思っていた。だが、違ったのか?

「私がゼットキ——ウルトラマンを援護する」

「ゼットン君!」

否だ。ゼットンはウルトラマンと共に戦う事を選んだ。

もしかすると、ウルトラマンと共に永遠にこの異次元空間に閉じ込められるかもしれないと云うのに。

「何を言ってるんだ、そんな危険な事を認められる訳がないだろっ!」

「おう、わかった。任せませゼットン!」

「こ、こら! 離しなさい!!」

レッドキングが大山を片腕で抱え、もう片方の腕をゼットンに向けて伸ばし親指を立てた。

周りを見ればゴモラとエレキングは既に大山以外の隊員を運んだ様で、この場にはゼットン、レッドキング、大山の三人しか居ない。

「まだリベンジを果たしてねえ、勝ち逃げは許さねえぞ? —— 絶対ウルトラマンと一緒に帰ってこい」

「ええ、任せて」

「そんな危険な事はやめるんだ! いくら君達に特別な力があると言っても君達はまだ子供なんだ!!」

「おら、暴れんな。行くぞ」

「話を聞きなさい——アアアああアアアああ?!」

大山の言葉には耳を傾けずレッドキングがジャンプする。常人にはあり得ない跳躍力に大山はジェットコースターにでも乗ってるかの様に声を上げた。

あつという間に小さくなつていく大山の絶叫から意識を外すとゼットンがテレポートを行った。

(がふっ!?…ツツクソ！)

シルバゴンに投げ飛ばされて背中から地面に落ちる、がすぐさま起き上がってシルバゴンに向かい合う。

クソツタレ！わかつてはいたけどなんて馬鹿力だよ、完全にパワー負けしてる。しかも体力的にはまだ余裕があるが、制限時間的にはそうじゃないみたいで胸のカラータイマーが鳴り始めた。

「ゼットン様」

(え?あ、ゼットンさん……あ?)

立ち上がった俺の肩にゼットンさんが立っていた。い、いつの間に。しかもめっちゃナチュラルに立ってるし、まったく気付かんかったわ。

「私が援護します」

じつ、と強い意思が籠もった瞳で見つめてくる。俺も肩のゼットンさんを見つめ返し、互いに見つめ合っている形になる。……決意は固そうだな。それに、正直有難い。

(お願いします、ゼットンさん)

「ジエア」

「……………ツツ」

俺はゼットンさんに向けて頷く。……ってあれ?ゼットンさんが突然顔を晒し俺に背を向けて蹲み込んだ。……肩の上で。

(…ち、近い…顔が、熱い)

俺にはよく見えなかつたけどこの時ゼットンさんの頬は紅に染め、両手で頬に触れていた。

「ジ、ジエア?」

(だ、大丈夫かな?)

「……………グ、グモー」

更には身体をばたつかせた。

え、ホントに大丈夫？育成方針の違いで太つちよで薄汚くなった怪獣みたいな声が聞こえたんだけど。

「ツ……あ」

すると、体を揺らす拍子にポロツと何かを落とした。……ポケットがある様には見えないけど何処から落としたのそれ？

「あ、あー」

(よっと)

慌てた様子で手を伸ばすが取りこぼし、落下しようとする所を俺が掌で受け止める。

なんだこれ、元々が摘める様な大ききな上に俺が巨人ウルトラマンに成ってる事もあってめちゃくちゃ小さく見え……ってこれは!?

『ウルトラマンのメダルだ!!』

インナースペース内にゼットさんの驚愕した声が響く、ゼットさんの反応も合わさって確信する。

これは、この地球に初めてやってきた始まりの巨人、『ウルトラマン』だ！

「……ゼット様?」

驚きのあまり硬直してしまった俺をゼットンさんが不思議そうな目で見詰めている。

「…もしかして、それが必要なんですね?」

「ジ、ジイヤー…」

いや、まだわからないのについて頷いてしまった。でも、ゼットンさんは何かを確信した様な目をする俺に目を合わせて言った。

「だったら、使ってください。そのメダルが貴方の力に成るのなら」

……ゼットンさん。

『ゼット、お言葉に甘えるところ。真つ赤に燃える勇気の心を手に入れるんだ!!』

(……ツッ! 応ツ!!)

ありがとうございます、ゼットンさん!!

ウルトラマンのメダルをぐつと握り締める。するとインナースペース内に居る俺の手の中にソレが現れるのを感じ、俺はすぐさま腰

のホルダーを開いて二枚のメダルと共に掌に広げた。

『マン兄さん、エース兄さん、タロウ兄さんのメダルだ!!』

「真つ赤に燃える、勇気の力!」

ウルトラマン エース ウルトラマンタロウ
マン兄さん、エース兄さん、タロウ兄さんのメダルをゼットライザーにセットしてブレードを動かし認証させる。
スキャン

《Ultraman》《Ace》《Tarō》

いつも通りゼットさんが現れ、腕を広げて胸を張る。

『ご唱和ください、我の名を!ウルトラマンゼエツト!!』

「ウルトラマン!ゼエエツト!!!」

上に翳したゼットライザーのトリガーを押す。

偉大な三人のウルトラマンの虚像ビジョンがアルファエッジの時と同じ様に光となつて駆け巡り、一点に集つて赤き『力』のウルトラマンが顕現した。

〔ULTRAMAN Z〕

〔BETA — SMASH〕

「ウルドラマアアンゼツドオツ!ベータズマツジユ!!」

変身した時に飛び上がり、空中にて軽やかに身体アクロバティックを捻る。ウルトラマンタロウのスワローキックの様にドロップキックをシルバゴンにくらわけて開幕の一撃を飾る。

「デュウワツ」

ドロップキックをくらわせた際にシルバゴンと一緒に倒れ込むが、奴より先に立ち上がる。

「イイチ」

オリジナルやアルファエッジの時とは比べ物にならない屈強で筋肉質な体型。

「ニイ…ツ」

カラーリングは他の形態とは一変して赤と銀を基色とし、頭部——
—と言うよりは顔の上半分だけ覆う覆面レスラーのマスクの様な装飾が施され、耳?が尖っている。

「スウワン!!」

ぶ厚い筋肉の鎧を見に纏い背中から胸のカラータイマーの周りを掛けて、ウルトラマンZタロウの様なプロテクターを身に付けたウルトラマンが右腕を掲げ高らかに咆えた。

「ダアアアアツツ!!!」

ウルトラマンZ第三の姿。

赤いパワータイプの『ベータスマッシュ』。

力強い叫びと赤き力の波動が遠くに見える山を噴火させ、まるで入場の演^{パフォーマンス}出の様に初登場を彩る。

「ギガア、ギイオ、ガアア！ギャガアオオオ!!……ガアアアツツ?!?!?」
シルバゴンがウルトラマンZの真似をする様に吠えて右腕を掲げた。けれど当然何も起きないし起こる訳がない。

姿が変わる事も、噴火する事も無い。シルバゴンは悔しがっているのか怒っているのか、その場で地団駄を踏んで暴れる。

「ギイゴオオオ!!」

「デイイヤツ！」

やがてシルバゴンの暴力の矛先がウルトラマンZに向く。それに対してウルトラマンZはなんとシルバゴンと同じ様に走り出し真正面からぶつかり、力比べを行った。技も駆け引きもない、純粹な力と力の勝負。

腕に、腹に、脚に、全身に力を込めて緩める事なく取っ組み合う。

(力比べじゃオラアアア!!!)

「ジイ…ツ、ディアアアツ！」

「ギギヤ!?!」

ベータスマッシュのパワーは剛力を誇るシルバゴンにも負けていない。均等——いや、僅かにウルトラマンZが勝っており一步前に踏み出した。

「デュウワアア!!」

ウルトラマンZが突き進む、シルバゴンは押されて後ろへ退がる一方。やがて、その超パワーで豪快にシルバゴンを押し除けた。

シルバゴンは踏鞴を踏んで後退し、そこにすかさずベータスマッシュの剛の拳が顔面にぶちかまされる。続けて首元にチョップ、シル

バゴンの右側に周ってから延髄蹴り。更にはシルバゴンを背後から持ち上げ、頭から落とし脳天を地面に叩き付ける。これがウルトラヘッドクラッシュシャーだ！（違います）

「ギガアアアアッ!!」

シルバゴンも反撃する。

両腕で殴り付け、頭突きをかまし、最後にぐるんと反転して尻尾を振るう。

「ツツ、デイヤアッ!」

（よいっしょオオオ!!）

——が、掴まれ、更に力を込めて振り回される。シルバゴンの足が地面から離れてぐるんと回る事、一周、二周、そして三周目で投げ飛ばす。

「ジャッ!」

ウルトラマンZの身体の銀の部分、それに胸部のプロテクターが光を発する。光は両手へ伝わり、手を合わせて左腰に置いてから右腕を大きく右上へ広げた。

放たれる三日月状の光刃、ウルトラマンエースのバーチカルギロチンに似た切断光線『ベータクレセントスラッシュ』が、立ち上がったばかりのシルバゴンの背中を深く切り付けた。

「ギイギアアアア?!」

シルバゴンの悲鳴が轟く。

（これで終わらせてやるよー）

「ジイイ…ツヤア!!」

ウルトラマンZがシルバゴンを掴み、上空高く投げ飛ばすと追う様に飛ぶ。直後、ウルトラマンZの身体から紅蓮の光が放たれる。特に右腕の肘から先は一層強く激しく輝き、もはや炎の様であった。

『ゼステイウムアッパー!!!』

燃え盛る剛拳を突き上げる、拳の直線状にはシルバゴン。空を飛ぶ術を持たないシルバゴンにはその一撃からは逃れることは出来なかった。

ウルトラマンZのゼステイウムアッパーがシルバゴンに直撃する。

ゼステイウムアッパーの威力はシルバゴンの装甲じみた防御力をも打ち砕いて大爆発を起こし、シルバゴンは断末魔すら叫ぶ事が出来ずに爆散した。

「……流石、ゼットン様」

うつとりとした顔でウルトラマンZの近くに寄るゼットン。

「……ジイヤ」

「え？……？？」

「ディア」

「……乗れって事ですか？」

ウルトラマンZはゼットンに手を伸ばした。

一体どういう意思なのか理解出来なかったゼットンだが、ウルトラマンZがもう片方の手で掌を指差す事でなんとなくだが通じた。試しに訊ねてみたら頷いてくれた。

「……っ、し、失礼します」

どこか緊張した様子でウルトラマンZの掌の上に乗ったゼットン。ゲネガールグ、それにバルタン星人から救ってくれた時と同じ構図だと思いついてゼットンの頬が赤くなる。

「ジイヤ、シュツワッチ!!」

ゼットンを手に乗せたウルトラマンZが空を見上げて飛び立った。眩い光がゼットンの視界を埋め尽くしたのはそのすぐ後の事だった。

結果的に言えば、俺とゼットンさんは地球に返ってこれた。

異次元空間の出入り口が完全に閉じていた為、俺は赤いパワータイプの新形態ベータスマッシュの超パワーで次元の壁をブチ破って脱出する事が出来た。

「あー、疲れた、もうムリイ」

現在、俺は情けない声を出しながら自室のベッドの上に倒れてい

る。

シルバゴンとの戦いはバルタン星人程傷だらけになった訳じゃないが、とても体力を使う相手だった。堅いし、力強いし、タフだし。ベータスマッシュに成らなかつたら正直勝てたかわからん！ゼットンさんには感謝してもしきれない、もうGIRLSに足向けて寝れねえわ。

「ゼットさんもお疲れ様です」

重い目蓋を開けて、机の上に置いてあるゼットライザーに目を向ける。

ゼットさんも異次元空間へ行く為に単身で変身させてしまったし、その後の戦闘も大苦戦だった。相方として恥ずかしい限りだ、選んで貰ったんだからもっと強くならないと……！

「これからも宜しくお願いします」

そう声を掛けると、返事をしてくれたのかゼットライザーのライト部分が小さくキラリと光った様に感じた。……へへ。

よいしょつと、仰向けに態勢を変える。ああ、明日も学校だな。まだ六時過ぎだけど寝よかな。アキにも心配掛けるだ……ろ……う、し。

「はっ!?!」

バツとベッドから飛び起きて充電器に挿したスマホを見る。

「……………Oh」

『ねえ、まだ?』『今、何処にいるの』『無視しないで!』『大丈夫?何かあった?』『お願い、返事して』『ぜつと』『ねえ』『こわいよ』『へんじくください』『ぜつと』『ぜつと』『ぜつと』e t c.

スマホのロック画面に映される百に至る数のアキからのUNIT E。

「やっべー」

何も見なかつた事にして寝ようか、なんて考えが浮かぶがアキからのUNIT Eを見れば心配を掛けたのは一目瞭然。返事をしないなんて事は出来ない。

暫く考えたが上手い言い訳が浮かばない、本当の事を言う訳にも行かないし。

「ええい！為る様に成れだ！」

俺は『ごめん、充電切れてた』って書いて返信した。——直後に電話が掛かってきた。ビクツと震えたが決心して電話に出た。

『……………ぜつと？』

耳に当てたスマホからアキの声が聴こえる。かなり心配させてしまったんだろう、声からかなり疲労した様子だとわかる。

『今、何処にいるの!？』

「ごめんアキ！スマホの充電切れて…家で充電してたん」

『……………帰ったの？何も言わずに？GIRLSで待つて直接言ってくればよかったんじゃないの？』

『……………』

やつべー、マジでヤベーんだけど。

アキ、ガチでキレてるぞこれ。

「……………ごめんなさい」

取り敢えず謝ろう。うん、謝罪大事、最近の若者はまず最初に謝る事が出来ないからな。

『赦さない』

「あ？？」

『許さない赦さないユルさないユルサナイゆるさない、絶対赦さない!!』

「あ、アキさん？」

『……………今から行くから』

ぷつんと通話が途切れる、というか一方的に切られた。

現状を理解するのに数秒、理解すると同時にぶわつと冷や汗が吹き出す。タシケテ…タチケテ、ゼットサン。

油の指していないブリキ人形の様なきこちない動きでゼットライザーに顔を向ける。でも、ゼットライザーはピクリとも動かず何の反応も無い。

「ゼットさん？いや、何無視してるんですか、聞こえますよね？貴方の相方が命の危機ですよ。過剰表現でも何でもありませんよ!!」

俺は慌ててゼットライザーを持ってトリガーを押す、が何の反応も

無い。

ちよつ、ちよつと!?!ゼットさん!?!いつもみたいにヒーローズゲート出してくださいよ、もしくはゼットさんが単独変身して助けてください!ゼットさん?ゼットさん!ゼットさん、いや、ゼット様。何卒、何卒お救いください!!

その時だった、ピンポーンと玄関のインターホンが鳴ったのは。

「……あば、あばば、アバツバツバツバババ!?!」

ヤバい、来たツ!アキが来た!?

どうしよう、どうすればいい?ゼットさんは相変わらず物言わぬゼットライザーの中に引き籠もっている。出なきや後が怖い、が、今も十分怖い。今の俺は怪獣を前にした一般人に過ぎない。

「ぜつと」

「ヒイツ!?!」

背後から声が聞こえた。咄嗟に振り返ってしまい、見てしまった。

「ぜつと、開けて」

窓の外に怪獣娘姿のアキが居た。腰が抜けるかと思った。

「ゼット、開けて。じゃないと、窓を壊して入るよ」

「」

いつも以上に眠そうな——否、全てを否定してそんな冷たいジト目。

口端が僅かに吊り上がって微笑みを浮かべているが、恐怖しか感じさせない顔。

フードの様な獣殻シエルのツノの先端がキラリと鈍く光り、変化した腕の鋭い爪で窓をカリカリと引っ掻き、傷付ける。

俺は恐る恐る、窓の鍵を開ける。逃げられないのがわかっていたから、だからせめて、少しでもアキの機嫌を損ねない様に。

「ゼットー!」

「うっぷっ!?!」

窓を開けた瞬間にアキが飛び込んできた。俺はアキに押されて倒れる。

「ゼット」

「アキ」

「そこに正座して」

「……………はい」

その後、俺はアキに二時間説教された。

深夜、カタカタとキーボードを叩く音がする。

自作のパソコンの画面だけが明かりとなった部屋で一心不乱に調べ一人の女性が居た。

彼女は画面の情報を読み解き、またしても自身が求めている情報が無い事に察して手を止める。

「……………ウルトラマン、Z」

薄紫色の長髪に黄色と黒の三日月型のヘアピンを付け、眼鏡を掛けた彼女の名は『湖上^{こがみ}ラン』、またの名を『エレキング』だ。

彼女は眼鏡を外して眉間を揉む、怪獣娘となった時は感覚が強化されて不要なそれを机に置くと椅子に凭れて目を瞑る。そうすれば目蓋の裏に鮮明に浮かぶ光景が。

シルバゴンに踏み潰されそうになった時、救ってくれたウルトラマンZの姿。その後、自身に向けられた熱い視線。人間とは違う鉄仮面の様な顔と発光する銀色の目にじっと見詰められた時を思い出して身体が熱く為るのを感じる。

ぎゅつと自身の身体を抱きしめて圧迫すればより一層高鳴る心臓の音が嫌でもわかる。

「……………いえ、これは唯の吊り橋効果。一時の気の迷いよ」

他に誰も居ないというのに態々声に出して言うのは、まるで自分に言い聞かせる様に見える。——事実、その通りなのだろう。

まさか自分が、『命を救われて惚れる』なんて今じゃ使い古された事態——それも創作の中で——に陥るなどあってあり得ない。

「……………チラッ」

けれど、彼女は今一度パソコンに目を向ける。

正確にはパソコンに映るウルトラマンZ（アルファエッジ）の画像を、だが。

「……………ッ」

眼鏡を掛けていないのにも関わらず、はっきりと視える姿は彼女自身がウルトラマンZの姿をイメージで補っているからだろう。

その事実気がつくのに数分の時間を要したのはまた彼女だけの秘密だ。

ティアー・ドロップ（前編）

戦禍が広がっている。

幾多もの光が右へ左へ、上へ下へ奔り弾ける。

『救助は、彼は来ないのか!?!』

『ダメです！ウルトラサインを出しましたが反応がありません!!完全に逸れてしまった様です!!』

『このままじゃ全滅するぞ!!』

其処は宇宙空間。煙と火花を放つ宇宙船が追跡者達から逃げている。

宇宙船の周りには数人のウルトラ戦士が追跡者と戦っている。だが、

『ぐわぁー!?!?!』

『○○○!?!?くそお！ツツ！あがぁあ!?!』

一人、また一人とウルトラマンが撃ち落とされる。そして宇宙船を守る最後のウルトラマンが倒された。

これで宇宙船を守る者がおらず、宇宙船は追跡者達の攻撃をモロに受ける。宇宙船はせめてもの抵抗にバリアを張るが、*“焼け石に水”*としか云えず、すぐにバリアが破られて追跡者の攻撃が宇宙船に直撃する。

揺れる宇宙船内の機器から火花が散る。

『ぐわっ！くそ、これ以上は保たない。こうなったら船を囷にして聖女様と兵器だけでも!』

『——いけません!!』

宇宙船内のウルトラマンの一人、宇宙船の艦長が下した判断。それに異議を唱える者も一人。聖女と呼ばれたウルトラマン——いや、ウルトラウーマンだ。

名を『涙を語り継ぐ者』。

——この始まりは小さな諍いだった。

他星を侵略しようとする宇宙人と、それを止めようとした宇宙警備

隊。だが宇宙警備隊か、それとも宇宙人か、今や定かではないが手を出してしまい、相手を死亡させてしまった。

これにより火蓋が切られ、宇宙と宇宙の狭間で宇宙警備隊と異星人大連合との間に戦争が始まった。最初は一つの星との小競り合いの様なものだったが、宇宙警備隊をよく思わない無法者の異星人同士が手を組む連盟となり、宇宙警備隊も増員させた。こうなれば、後はイタチゴッコである。やがて連盟は大連合となった。

——それも、とある者達の介入によって終わりつつある。

ウルトラ兄弟だ。ウルトラ兄弟では幹部であるウルトラ六兄弟を除いたウルトラマン80、ウルトラマンレオとアストラの兄弟。それにウルトラマンメビウス。彼ら四人の介入により戦況は大きく傾いた。

やがて異星人大連合の敗北も時間の問題かと思われたその時、宇宙警備隊にとある情報が入った。今も戦争が続いている宇宙領域の近い星で、ウルトラマンの力に近い光を感じさせる古代の兵器が見つり、異星人大連合が狙っているという。

大いなる伝説を持ったその兵器は、今の状況をひっくり返すだけの力があると判断した宇宙警備隊大隊長ウルトラの父は、その古代の兵器が大連合の手に落ちる前に光の国の聖女に回収を命じた。

護衛として、若くも強い力と心を持った新世代のウルトラマンの一人と共に。

そして無事、大連合よりも早く見つける事が出来た。

だが大連合の残存勢力に見つかり襲撃を受けた。

幾十にも及ぶ宇宙船と怪獣の大群に彼らは護衛のウルトラマンと分断されてしまい、その後もなんとか必死に逃げ続けるが今、限界を迎えていた。

『……聖女様、お願いします。どうか、どうか貴女様だけでも兵器を持ってお逃げください』

『ダメです！私だけ助かっても意味がありません、貴方達も』

『貴女様は光の国の聖女！簡単に死んでいい存在ではありません!!そ

してその兵器は凄まじい力を秘めています、奴らに渡す訳にはいきません！貴女様と兵器は我々とは「価値」が違うのです!？」

『——ッ!』

『皆！聖女様と兵器を！』

艦長ウルトラマンの号令に他の乗組員達が頷き、涙を語り継ぐ者に手を向けそれぞれが光を放った。

光は彼女を包み覆うと赤い球体状のバリアへと姿を変えた。涙を語り継ぐ者が内側からバリアを叩き何かを叫んでいる。

『艦長、聖遺物をお持ちしました』

『うむ、兵器を聖女様へ』

『はっ!』

『後は、聖女様を何処へ送るか……だが』

『艦長!!近くに知的生命体の居る惑星があります!』

乗組員の一人が船内のモニターに惑星の映像を投影する。

『この惑星は?』

『——地球です』

『なんだって?……宇宙警備隊の、ウルトラ兄弟達が守ってきた星か。あの星なら……だがこの宇宙の地球には怪獣が居なくなった為守護の対象から外されてから暫く経っていた筈。聖女様を送って受け入れてもらえるか、いや、もしも聖女様を追う怪獣や凶悪宇宙人が現れた時、戦う事が出来るのだろうか』

『艦長！聖女様にはウルトラ・オペレーションが御座います、いざという時は……』

『うむ。いや、だが』

艦長が判断を迷っているその時、船を衝撃が襲い強く揺れる。船内の危機が火花を散らし、モニターにノイズが奔る。

『くっ、迷っている場合ではないか。聖女様と聖遺物を地球へ送るのだ！我々は聖女様が無事に地球に渡れる様に奴らを引き付けるぞ!』

『『ハッ!』』

涙を語り継ぐ者がバリアを叩く、一切の気配を断つ為に張られたバリアは念話すら遮断し、彼女の声が彼らに届く事は無い。

それでも彼女の言葉が彼らにはわかった。

『やめなさい』『諦めないで』『命を捨ててはいけません』

最後の最後まで乗組員を案じるその姿に、その優しさに、聖女の名に恥じない高貴さに乗組員は命を懸ける価値を感じた。

『聖女様、どうか御無事で!』

バリアに阻まれ艦長の言葉も彼女には伝わらない。

それでも、彼女の無事を祈らずにはいられなかった。艦長、そして乗組員が彼女に敬礼を向ける。

追跡者達に見えない様に宇宙船の陰に隠れた死角から地球に赤い球体が飛ばされる。

宇宙船は最後に軌道を変えると、追跡者達を少しでも引き付け、彼女から離す為にエンジンに無茶を掛けて最大速度で進行しだし、彼らの思惑通り追跡者達は宇宙船に襲い掛かる。

やがて、宇宙船は追跡者達の攻撃に耐え切れず大爆発した。

(皆、さん。……っ)

彼女はそれを観ている事しか出来なかった。バリアに触れる左の手で強く拳を握る。聖遺物を胸に抱く力が込められる。

そして決意する。命を掛けて追跡者達を引き剥がしてくれた彼らに、自分達の護衛として戦ってくれた彼らの覚悟の為に生きて帰らなければならぬ。

ウルトラサインは飛ばされている。後は一度宇宙を救った彼がウルトラサインに気付いてくれさえすれば。

それまで、なんとしても生き残らなければならない。

(お願いします。誰か、誰か助けてください)

彼女は地球に戦える者が居る事を祈る。身勝手だとはわかっているし、巻き込まれる地球の人間——何より彼女を追う者と戦うであろう人間に申し訳ないと思っている。だが、祈らずにはいられなかった。自分は、戦う事を禁じられているから。

両腕を聖遺物を胸に抱き、祈る姿は正に聖女であった。

(……それでも、もしもの時は私が、掟を破つても!)

聖女が密かに決意する。

「ギイ……」

『お、見つけたのかい？あの星？……へー、地球って言うのか』

聖女の決意を嘲笑う様に、追跡者達の船の一つが赤い球体の行き先を捉えていた。青く美しい惑星を宇宙船のデータベースから検索した宇宙人はニタア…と嗤った。

『ふひひ。地球、地球か。ウルトラマンが守らなくてもいいと判断した星かあ』

無邪気な少年の声でありながら、背筋の凍る様に恐ろしい。この異星人はその性格の悪さから地球を敢えて悪く言う彼は、クスクスと笑いながら従えた怪獣に目を向けた。

一匹の怪獣をまるでペットの首に紐で縛っている様に光線を照射するのをやめると、怪獣の脳内に直接語り掛けた。

『ほら、行っておいで。そしてセイジヨさまを見つけるんだ。邪魔する者は殺せ、セイジヨさまと関係を持った奴も殺せ、セイジヨさまが落ちたあの星の人間全て殺せ。つまりは皆殺しだ。できるよね？だって沢山沢山、好物だって食わせてやったろ？…出来ないとは、』

——言わせないよ

「!?ぎ、ギイ……!!!」

異星人の声に怪獣は怯えた様子で聖女を追いかけて出した。

宇宙空間でも獲物を逃さない優れた嗅覚を最大限駆使して聖女の匂いを辿る。怖い怖いご主人様に殺されたくないから。

『……くふ、くふふ。そうだ、同盟者達に伝えるのはやめておこう。所詮奴らとは光の国の奴らと戦う為に互いに利用し合っただけだし』

異星人は不気味に笑う。

聖女を追う怪獣の後ろ姿を眺めるその目には、

『それに、これはチャンスだ。光の国の奴らが持つてゐる古代の超兵器、そして光の国の聖職者の能力^{チカラ}。その両方を手に入れる……ね』

——恐ろしい悪意と、

『待っててね、光の国のセイジヨさま。君の命はボクのモノなんだから、サ♪』

——悍ましい程の執着が込められていた。

「ゼツトツ!!」

背後から突き刺す様な声が聞こえる。今の一言でそれが見ずとも察する事が出来た。

だったら、後は信じて前に駆け抜けるだけ。

「……たっけえ!？」

前に数人の男が空を見上げている。俺はそいつらの横を通り過ぎ、邪魔な奴が居ないのを確認すると目を閉じて最適な、位置を探る。

俺の頭上には球体が俺と同じ速度で山形に軌道を描く。白と黒のカラーリングの頭ぐらいの大きさのソレを俺の感覚が捉えた。速度、軌道、回転が音と風で感じ取れる。

「……!」

——ここだ。今、このタイミング!!

俺は前に出した足で地面を強く踏み締めて、腰に力を入れてもう片方の脚を抜刀する。位置取りは完璧、角度も速さもだつて。

脳裏に怪獣と戦った時の炎の蹴りが浮かび上がる。

その時、彼と対面する人間——否、その場に居る彼を見ていた人間全てが幻視した。

足首から先に紅蓮に燃ゆる炎を纏わせた右足が、火の軌跡を刻みながら落ちて来たボールを蹴り抜く瞬間を!!

「「いっけえ!!」」

「オオオツ!!」

名付けるなら『アルファバーンシュート』。

チームの声援を背中に受けて、プロサッカー選手の『斑鳩ジョージ』の『流星シュート』に迫る必殺シュートが解き放たれた。

狙うは一点、相手チームのゴールど真ん中。唯其処のみ!

「ひいつ!？」

自身に迫る驚異にゴールを守るキーパーが悲鳴を上げて飛び退いた。キーパーが身体を丸めて頭を抱えて離脱した以上、ゴールを守る者は誰もおらず、ゴールのネットを突き破らん勢いでボールが突き刺さった。

ゴールによる一点追加と同時にピーー!と試合終了のホイッスルが鳴った。

「点数3対0により赤チームの勝利!」

『『ヨツシヤアア?!?!』』

「ゼットお!流石だぜ!!」

「にしし、だろ?」

歓声上がる。

俺の友人の一人『早田 シンジロウ』が肩に腕を回して褒めてくるのを笑いながら親指を立てて返す。

「さっきのシュート、まじヤバかったぞ!一瞬炎が出たみたいに見えるたし!」

「マジ?俺、もしかして超次元サッカーしちゃった?」

「そんな訳ないだろう」

肩を組んだ俺とシンジロウの側にもう一人やつてきた。俺の冗談に真面目に返し、人差し指で眼鏡をクイツと上げたクールなクイツの名前は『諸星 ダン』。

シンジロウとダン。この二人は小学校の頃からの俺の親友だ。

「ダン、さっきはナイスパスだったぜ!」

「そうだよダン!お前、よくあんな無茶苦茶なパス出来たな」

「ふん、そいつならうまく合わせられるとわかっていたからな」

「熱い信頼って奴だな!へへ、ありがとうよダン」

「……………ふんっ!」

俺の言葉に背を向けて離れるダン。その後ろ姿に俺とシンジロウは顔を見合わせてから笑った。アイツのツンデレは小学校からの筋金入りだからな!

——「おいゼット!お前主役なんだからこっちこいよ!」

「おう！すぐ行くー！」

俺はクラスメイトに呼ばれて駆け出す。後ろからはシンジロウの「ちよっ!?待てよー!」と言う声が聞こえたが無視する。

チームの奴らからは歓声を、相手チームからは悔しいという声を、そして両方からさっきのシュートについて訊かれる。シンジロウ、それにダンも加わって訊いてくるが、ウルトラマンとして戦う事で覚えただなんて正直に答える訳にもいかず適当に誤魔化——せる筈が無く、俺はクラスメイトの奴らから追い掛け回されるハメになった。

平和な日常のワンシーン。

高校での体育の授業、クラスの男子が半分に分かれて行うサッカーは大勝利に終わった。

「シュート、凄かったね。ゼツト」

「お？観てたのかアキ」

「うん」

女子はあの体育の時、少し離れた場所で別のスポーツをしてた筈なんだけど。

まあ、十中八九、

「見学^{サボ}ってたな？」

「うっ」

どうやら凶星のようで、眠たそうな目を少し見開いて見せた。

アキは運動が苦手だ。昔から祖父母と一緒に居たからかおっとりとした、何とかジジ臭いアキは激しく動くスポーツ等がもっぱらダメダメだ。唯、運動神経自体は悪くはなさそうなんだよなあ、怪獣娘に成ってる時は機敏に動くし。単純に性格と相性の問題なのかもしれない。

「そ、それよりも！」

アキが慌てた様子で話題を変えた。へへ、愛^うい奴め。

普段から眠たそう（偶に怒っていると勘違いさせる）目付きをしているけど、割とコロコロと変わる表情につい笑みが浮かぶ。

「……むう、何笑ってるの?」

「ん? ああ、いや……平和だな、って」

「平和?」

「そう。最近は怪獣も現れないし、怪獣娘が出る様な事件もあんまり無いし……最近、起きた事と言ったら新しい怪獣娘の子が暴走したって事ぐらいだけど、今はもう解決したんだろ?」

「うん。サンドリアスの怪獣娘みただけで最近は先輩のレッドキングさんが面倒見てる」

「へえ、レッドキングって言えば暴れん坊な怪獣で有名だぞ。やっぱり怪獣と怪獣娘は違うって事だな」

「そう、だね」

アキはGIRLSの資料で見た怪獣レッドキングを思い出してた。
太い手足や尻尾にガツチリとした胴体とは逆に小さな頭の怪獣を。

「……で、ん?」

「……」

「どうした?」

「……あれ」

アキとたわいのない会話を繰り返しながらいつもの様にGIRLSに向かっていると、アキが急に立ち止まって空を見上げている。何かあったのか訊いてみたら、視線の先を指差したからつられて指した方向を見ると、赤い球体がゆっくりと落ちてきていた。

なんだ、あれ? 全長45〜50メートル程の大きさの赤い球体——
—なのだが、まるであちこちに陥没の様な凹みがある。宇宙船……には見えないが、攻撃でも受けたのだろうか?

「あっ!」

「消えかかっている?……ってあれは!!」

まるで点滅でもするかの様に赤い球体の外殻? が薄くなり、内側の存在のシルエットが垣間見えたとしたら、赤い球体が解けて無くなった。

「あれはウルトラマン?」

「ウルトラ、ウーマンじゃない?」

赤い球体から現れたのは銀色の巨人——ウルトラマンだった。唯一言付け足すとしたら、そのウルトラマンは女性的な体型をしていた。

ウルトラマン、いや、ウルトラウーマンは首を左右に振って周りを見渡している。困惑しているみたいだがどうやら敵意がある様ではなさそうだった。

「……………よかった」

ウルトラウーマンを見たアキは小さく呟いた。……………もしかしたら、以前のバルタン星人の様な侵略者じゃないかと心配していたみたいだ。

なら、後の問題は、中のウルトラマンが誰なのか。それと何故地球にやってきたのか、だな。

俺が思考に耽っていると、アキのポケットからビー！ビー！と音がした。アキは慌てた様子でポケットからソウルライザーを取り出すと耳に当てた。

「はい、こちらアギラ！」

『……』

「はい。…はい、わかりました。ゼット！」

「……………どうした？」

「ボクは変身してGIRLSに向かうからゼットは今すぐ帰って」

「……………」

「……………」

これは、何を言っても無駄かな。

俺はアキに了承した事を伝えた。アキはどこかホツとした表情を見せたけどすぐに引き締めて俺に「寄り道せずに帰る事！家から出たらダメだよ！」と言い残して走り出した。…お前は俺の母親かよ。

アキが見えなくなると俺は家へ——ではなくウルトラウーマンに向かって足を進めた。

ウルトラウーマンは両手を組み合わせ、少し俯いた。その姿はまるでファンタジー物とかでよく見る教会で祈るシスター、いや、聖女の様だ。

『……ッ……！』

——その時だった。何かが頭の中に響いた。念話、テレパシーつてヤツがゼットさんと一体化してるからか俺に届いた。

『……て……ぎ……！』

——半分、いや大半がノイズみたいに聴こえるが、間違えようのないそれ。

『お願い……、助け……さいッ』

——それだけで、その言葉だけで十分だった。

『お願いします、助けてくださいッ！』

なんせ俺達は『ウルトラマン』なんだから!!

ティアー・ドロップ（中編）

いつも通りの路地裏にてゼットライザーを取り出す。

「取り敢えず、変身しましょうかゼットさん！」

俺は意気揚々とゼットライザーのトリガーを押した。

「……………あれ？」

何も起きなかった。

「え？あれ？ゼットさん？あのー、聞いてます？助け、求められてますよ。ここで行かないやウルトラマンじゃないですよ？」

ゼットさん呼び掛けながら何度もトリガーを押してみるがうんともすんとも言いやしない。

もしかして、本当にもしかしてだけど——乗り気じゃ、ない？

「ゼットさん!?いや、あのーあの人……人でいいのかな？兎に角助けを求めてるんですよ！ゼットさん！ゼットさーん!!」

お願いしますぜットさん！ついさつき『俺達は『ウルトラマン』なんだから!!』……とかカッコつけて思っちゃったんです。これで変身できなかったらめっちゃくちや恥ずかしいんですけど!?

それでも 彼は 答えてくれません。

「……………」

顔が恥ずかしさで熱くなるのを感じる。

いや、ぶつちやけ声に出した訳じゃないから誰かに聞かれたりしてないけど、それでも恥ずかしいものは恥ずかしい。

それでも、変身出来ないものはしようがないので取り敢えず今は落ち着く事。そして忘れる事に集中した。

「…………ふう、落ち着いた」

落ち着いたもんは落ち着いたんです（自己暗示）

「それにしても、なんでですか？」

右手のゼットライザーに目を向ける。試しにもう一度トリガーを押してみるが、やっぱり何の反応も無い。

…………まあ、じつとしてても如何にもならないし、あのウルトラウーGIRLSマンの近くに行こうかな？あ、いや、もしかしなくても怪獣娘の人が

居るだろうし、見つかったらアキにまた怒られる。

如何したモノか、と悩んでいた時。ゾクリと背筋をイヤな感覚が走った。

「ーッ!!」

何がなんだかわからないが兎に角その場に突っ立っているのはマズいと感じた俺は飛び込む様に前転してから振り返る。

「ーッ」

「……影?」

名状しにくい黒いアメーバみたいな蠢くモノ。

なんじゃこりゃ!?

「ーッ!」

「うおっ!?…と、襲ってきたって事は敵だなオメー!」

俺は目の前の異形の影に臆する事なく駆け出し、勢いを付けてジャンプからのドロップキックをかます。俺の両足は影のど真ん中を捉え、影はボールの様にぶつ飛び、地面にぶつかり跳ねた。

「へ、へへ。どうだ参ったか! (いてえ、肘打った)」

ドロップキックした際、地面に肘を打ちジンジンと痛むのを我慢して影に指差し不敵な笑み(自称)を浮かべる。(実際は表情が引きつっており目尻に小さな水滴が溜まっている)

「ーッ!」

「……あ?ちよっ!効いてくない!」

影は暫くモゾモゾと蠢いていたが、ムクリと起き上がると同じ様に飛び掛かってきた。

「こっんにやる!」

飛び掛かる影の側面に俺は回し蹴りを叩き込む。

だが、

「ぐっ、重^{おっも}ってうわ!」

俺の蹴りを受けた影だが弾かれず衝撃を吸収され、逆に脚に絡み付いてそのまま押し倒された。影に触れられた瞬間から気色の悪い感覚が全身を駆け巡る、異物^{ナニカ}が入り込んでくる様な感覚。

影は俺の腰回りに覆い被さるとぶわっとな胸元まで弾ける様に広

がった。

「だぁー！くそ、離れろお!!」

俺は両腕で押し退けようと抗うが影はずっしりと重く、俺の力じゃ引き剥がすどころか押し戻す事すら難しい。

脚は完全に呑まれて動かない、殴つてもクッションでも叩いてるみたいに少し凹むだけ。その間も影はゆっくり広がってくる。

(なんか、なんかないか!?)

右腕で対抗しつつ左腕で辺りに何かないか手探りで探る。

すると指先に硬い感触が、目を向ければそこにはゼットライザーが転がっていた。影に押し倒された際に落としてしまったのだろう。

…ゼットライザーのブレードって先尖ってるよな。……いくっきやねえ!!頼む!!

「くらいやがれ!」

左手で掴んだゼットライザーを振り上げると影に向けて勢いよく振り下ろした。

すると、影は簡単にスパッと切り裂かれた。

『……?!?』

「お?効いてる!」

俺は影にゼットライザーを何度も何度も叩き付けた。

影はゼットライザーのブレードによって潰れて、切られ、引き裂かれる。そして限界を迎えた影は最後に溶けて消えた。

「はぁ……はぁ……、なん、だったんだ」

俺は荒れた息を整える為に大の字に腕を広げる。思いの外、精神的なダメージが大きかったみたいでドツと疲れた。

だが、休む暇は与えられなかった。大きな衝撃が大地を走り、俺の身体が一瞬浮遊した気がしたのとほぼ同時に後頭部に痛みが。

「オゴオ!?……くっくッ」

後頭部を両手で押さえて悶える。

異次元空間の時もそうだったけど何処かしら打ちすぎじゃない、俺?

『ギーーーーー!!!』

「ああークソオ!!少しは休ませろ!」

轟く怪獣の咆哮に俺は飛び起きると路地裏から出る。
すると、

『ギイー!ギイイ!!』

黒緑色の身体に、後方に向いたトゲの様なツノが頭や背中に幾数本も生えており、括れがなく、トカゲの様な顔をした典型的な恐竜タイプの怪獣がウルトラウーマンに襲い掛かっていた。

怪獣から逃げたからか都合の良い事に見渡す限り人の姿は無い。
俺はゼットライザーを取り出すと呼び掛ける。

「怪獣が現れたんです。今度こそ頼みますよ!」

ゼットライザーのトリガー押す。すると今度は反応してくれて目の前にヒーローズゲートが出現した。……よかったあ。

ホッと安堵の一息を吐くと、ヒーローズゲートに飛び込んだ。

「……カレカレータ」

その声が出したのは、俺がヒーローズゲートを越えた直後だった。

幾つもの光が駆け巡り幾何学模様の様な軌跡を描くインナースペース内で、俺はゼットさんと対面する。

「さつきはなんで出てきてくれなかったんですか!」

『いや、それは、その、気が乗らなかったといいますか、なんて言うか』

俺の質問にゼットさんは言葉を濁してちゃんと答えてはくれない。

『ええっと、彼女は、あの』

「……ああ!もういいです!この話は後にして今はあの怪獣をどうにかしますよ!」

『お、おう……です』

俺は意識を集中させると胸の前にアクセスカードが出現するので、手に取りゼットライザーにセットする。

《Zetuto Access Granted》

「宇宙拳法、秘伝の神業!!ゼロ師匠、セブン師匠、レオ師匠」

腰のメダルホルダーから三枚のメダルを取り出し、ゼットライザーのスロットに装填してブレードを動かして認証させる。

《ZERO》《SEVEN》《LEO》

「オオッス!!」

気合充填！覚悟完了!!

さっさと片付けてゼットさんに問い詰めてやりますよ!!

『ご唱和ください、我の名を!!ウルトラマンゼエツト!!』

「ウルトラマン！ゼエエツト!!!」

ゼットライザーを掲げてトリガーを押した。

【ULTRAMAN Z】

【ALPHA — EDGE】

「ジエヤッ！」

「ギイー!!」

『キヤア!』

怪獣——ザキラの腕の殴打に、戦闘訓練なんか受けた事のない私は簡単に吹き飛ばされ、この星の建物を壊して倒れてしまう。

『ーっ。はあ…はあ…』

痛い。腕が、肩が、脚が、身体中が痛い。ザキラの容赦の無い攻撃を私は防御すらまともにする事が出来ずに一方的に蹴られ、胸のカラータイマーが赤く点滅している。

ザキラの狙いは私だけの様で幸いこの星の人々に直接攻撃が及ぶ事はなかった。

『……づっ、あがあっ!?!』

起き上がろうとする私の腹部をザキラが蹴り上げ、私は痛みに呻きながら転がる。

「ギイイ!!」

『あぐっ、ぐふっ、アアア!?!』

ザキラは転がる私を追いかけ、同じ様に私を蹴り転がす。

「ギイー、ギイイイイイ!!!」

ザキラが勝利を確信したのかさつきまでとは一変して吼えた。ずんずんと余裕を持って近付いてくる。ザキラは鋭い牙が並ぶ口からダラダラと涎を流し両腕で拭っている。

私を、食べるつもりだろうか?……確か、ザキラは他の怪獣を——特に渡り鳥怪獣バルを好んで——食べる獰猛な肉食怪獣だ。しかも獲物を生きたまま喰らおうとする残忍な性格をしている。

『……っ、……くっ』

私を逃してくれた彼らの為にも、私は死ぬ訳にはいかない。こうなったら、例えば私が光の国に戻り罪に問われるとしても!!

私は、私達『光の国の聖職者』だけが持っている禁じられたチカラをザキラに向けて使おうとした——その時でした。

「ギイ!?ギイヤ!!」

『!!……っああああ?!?!』

私がチカラを使おうとしたのを察知したザキラが両目からレーザーを使つて私を攻撃した。眩い閃光と電撃の様なエネルギーが私の身体を暴れ回る。

『……あ……っ……う』

強力なレーザーを受けた私は、チカラを使うどころか動く事すら出来なくなつてしまった。

「ギイギイギイー!」

ザキラが笑っている。私が動かなく……抵抗出来なつた事で到頭(とうとう)食事に移るつもりなのだろう。

ザキラが倒れる私のすぐそばに寄つた。手を伸ばせば届く距離だ、ザキラの顔が近づく。怪獣の生暖かい息遣いが、口から垂れた唾液が私の顔に堕ちる。粘着性のあるベタついた体液、異臭すら感じる。

『……ひい』

痺れた身体からでも引きつった声が洩れ、身体が震える。

怖い、嫌だ、死にたくない。彼らが命を掛けて守ってくれたのに、彼らが命を捨てても信じてくれたのに……! 私は、私は何も出来ずにこの怪獣に喰われて死ぬ。

『ダ、レか……タス、け……て』

「ギィヤア！」

ザキラが顎を広げて振り被った。勢い良くかぶりつくつもりなのだろう。

……ああ、ごめんなさい皆さん。私が、弱かった所為で……ッ!!

光の国の聖女に牙が迫る、か弱い命が無惨に喰い散らかされる。

——その様な事が赦される筈がない!!

「……………ギィ?」

『……………え?』

ザキラの牙は聖女の柔肉を捉える——事なく空を切り、ザキラから呆けた声が洩れる。そしてそれは其処から離れた場所から聞こえる聖女の声も同じだった。

「ジエア」

『……………ふえ?』

背中と膝裏に感じる自身を抱き抱え、支えてくれる腕の感触。力強く勇ましい戦士の声がすぐ上から聴こえ、見上げれば目の前に自分と同じ光の国の人間の顔。

「ジィイヤ」

（大丈夫ですか?）

『……………』

（あ、あのく?）

硬直した聖女を横抱き——所謂、『お姫様抱っこ』する戦士、ウルトラマンZが心配して声を掛ける。

『……………』

（ああ、ええつと。兎に角、降ろします、ね?）

『……………（コクッ）』

（あ、よかったです）

ウルトラマンZが聖女を優しく地面に降ろして座らせる。

（お手を拝借）

『え?あ!』

地面に座らせた聖女の手を優しく取ると、もう片方の手でカラータイマーを覆うと淡い光が掌に収まる。

(今、光を送ります)

「ジエ…アア…！」

『……あつ、ありがとうございます、ごごいます』

光が伴った手を聖女の手を重ねる。ウルトラマンZの手から光が聖女に流れ込む。

『あ、……ンッ』

優しく慈しむ様な光が聖女の身体を満たし、傷を治癒しエネルギーを回復させる。十分なエネルギーが補充され、カラータイマーが青へ変わった。

『もうつ、…はあ……大丈夫、です』

(よかったです)

『ーッ!!』

ウルトラマンZが——正確には一体化したゼットが聖女に微笑む。地球人にはわからないだろう表情の変化だろうが、同じウルトラマンである彼女には彼の優しい笑みがわかった。

(あの怪獣の相手は俺達に任せて、此処で休んでいてください)

「ジエア」

『あ！お待ち下さい、お名前を！』

戦士が立ち上がり怪獣と戦おうとするのを呼び止め、名を尋ねる。

(——ゼット。ウルトラマンZ^{ゼット})

『ウルトラマン、ゼット』

(……ああ、後)

『……?』

(ゼットさんの相棒、光国ゼットです)

ティアー・ドロップ（後編）

「ギイイ……ッ」

（おう、待たせたなトゲトゲ怪獣）

警戒して唸る怪獣を俺は正面に捉える。

「ジエエアツ」

地面を踏み締め、腰を下ろし、構えを取る。

（いくぜ、覚悟しろよ？俺は、俺達はウルトラ強えぜ？）

「ジイヤア!!」

「ギイーー!!」

俺が、次に怪獣が相手に向かって駆け出す。

「ジエア！」

先手は俺の飛び蹴りだった。胴体に俺の蹴りを受けた怪獣が数歩退がるが、怪獣も反撃にと左右の腕で交互に殴り付けてくる。

（ぐう、コイツも重いな！）

一撃一撃が前回、異次元空間で戦ったシルバゴンを思い出させるパワー。なるほど、恐竜みたいなタイプの怪獣は純粋に強くてタフな傾向にあるのか。

「ギイイア！」

「 ज्याア！」

「ギャ!?!」

怪獣の噛みつきをバク転で躲しながら、右足で怪獣の顎を蹴り上げる。顎の衝撃に怪獣が怯み、ここがチャンスと畳み掛ける。

「ジエア! ジャツ! ジイイッア!!」

アルファエツジ

この形態お得意の宇宙拳法による連続攻撃を叩き込む。———更には!

『アルファバーンキック!!』

「ギイーー!?!」

大振りで放った炎を纏った上段蹴りをくらわせ、蹴りを受けた怪獣が地面を転がる。怪獣はすぐさま起き上がり、怒ったように両腕で振り回すと突進を仕掛けてきた。

俺は横に飛んで突進を躲すが怪獣は振り向いて腕で殴り付けてくる。

「ジエアー！」

怪獣の殴打を冷静に受け流し、更にはその勢いを利用して投げごろんと怪獣が転がる。けれどまたすぐに起き上がると猛突進してくる。なんだコイツ？

『なんだか必死、の様に見えるな』

(はい。なんでかわかりませんが焦ってるみたいです)

『ここは一旦様子見してみた方がいいか？』

(了解ッス)

ゼットさんの言葉に同意して怪獣の様子を伺う。

すると怪獣はぶるりと身体を震わせると、カッと目を見開いた。

『何かしてくるぞ、気を付けろゼット！』

(応っ！)

何でもきやがれ！

『いけません！ザキラのレーザーを受けてはなりません！避けてください！！』

(え？)

「ギイイー！！」

「ジエ……ッ?!?!」

あ、があっ?!?!……なん、だよこれ……!

怪獣——ザキラの目からレーザーが放たれ、俺に直撃する。今の一発で膝がガクガクと笑い、立っているのがやつとの状態にまで追い込まれる。

目からビームって、そんなのありかよ!?!

「ギイイー！」

ザキラは今がチャンスと、攻め立ててくる。まだ痺れが取れ切れない俺は避ける動作が出来ず、辛うじて防御しようとするもザキラの豪力に吹っ飛ばされる。

(いってえ……!)

『あのレーザーは強力だ！こうなったらレーザーを撃たせない様に接

近戦を仕掛けるぞ！ウルトラフュージョンだゼット！！』

(お、応^{オウ}ッ!!)

インナースペース内でゼットライザーのブレードを戻し、トリガーを押して再度認証の状態へと戻した。

「真つ赤に燃える、勇気の力!!マン兄さん！エース兄さん！タロウ兄さん！」

ホルダーからウルトラ兄弟の次男、五男、六男のメダルを取り出し、スロットに装填してブレードを動かしてスキャンさせる。

《Ultra man.》《Ace.》《Taro.》

「ウオツシャー!!」

気合いの一声と共にゼットさんが現れ、腕を広げる。

いつもの気合い入るヤツ、頼みます！

『ご唱和ください、我の名を！ウルトラマンゼエツト!!!』

「ウルトラマン！ゼエツト!!!」

掲げたゼットライザーのトリガーを押して「兄さん達」の超パワーを使わせて、もらいます!!

【ULTRAMAN Z】

【BETA — SMASH】

「デエエヤツ!!」

赤く逞しい巨人が天に向かって吼えた。

「——デヤツ！」

開幕ダツシユで距離を潰してザキラに組み付く。

(おらあ！倒^{たあお}れるオ!!)

ザキラの首に腕を回し、体重を掛けて引き倒す。

続け様に怪獣のザキラに馬乗りになり右腕で顎下を押さえつけ、左腕を振り上げて叩き付ける。

「デエア！ジイイツヤ！」

「イギーー!!?!?」

ザキラの背から降りると飛び上がりエルボー・ドロップを決める。背中に突き刺さる肘にザキラが絶叫する。

オマケにと尻尾を脇に掴んでフルスイングで反転してぽいつ！

(シャオラアア!!どんなもんじゃ!)

『ベータスマツシユに成るとゼツト、ウルトラ喧しくなるな』

(五月蠅いですよ!)

「ギイイ!!」

『!!ゼツト、レーザーくるぞ!』

うおっと!?緊急回避ー!!

ザキラのレーザーを飛び込む様に前転して躲すと、全身から力を引き出す。するとボディやプロテクターが光り、その光を両手に集結させてから合わせ、振り向き様な『ベータクレッセントスラツシャー』を放った。

三日月状の切断光線がザキラのレーザー第二射を打ち消して突き進むとザキラに直撃し、ザキラの身体に大きな袈裟の傷痕を刻み付ける。

「ギイイ…ツ」

「ダアアアツ!!」

ベータクレッセントスラツシユを受けてザキラはシルバゴンの様にふらふら状態になる。其処に突進し肩から体当たりをかまし懐に入る。よっしゃ!じゃあ熱い一発をぶちかましてやるよ!!

俺の全身から赤いエネルギーが放たれ、右腕にはより強く激しく熱い炎の様な光を帯び、思いつき振り被る。

『ゼステイウムアツパー!!』

振り上げた拳がザキラの顎を捉え、爆炎を広げて打ち上げる。

宙に浮かぶザキラが打ち上げる力を失うと、重力に従って地面に落ちる。

「ギ、ギイイ……」

ゼステイウムアツパーが決めてとなったのか満身創痍の様子の子ザキラ。

前回のシルバゴンに放ったのと同威力の一撃だったのにまだ生きてやがる。相当タフだな、コイツ。ホントに生物か?

(まあいいか、光線こいっでトドメを!)

「ジエエアー！」

再度身体が光を放ち、先程よりも更に強力なその光は両腕へと集中して迸る。大きく広げた手から手へ稲妻状のエネルギーが繋ぎ、十字に組めば全形態共通のゼットさんの従来の必殺光線が放たれる。

『ゼステイウム光線!!』

青白い閃光が奔り、ザキラを狙い撃つ。光が爆ぜ、絶叫すら光に灼かれる。残ったのは黒く焦げた怪獣の残骸だけだった。

いや寧ろ、他の怪獣と違いまだ原型を残しているだけこの怪獣の並外れた丈夫さが浮き彫りとなるだろう。

(ふう、終わった……かな)

ウルトラマンZはザキラが完全に倒されたのか確認する為に暫し観察するが、ピクリとも動かない事を確認すると、この怪獣をどうしようかと悩んだ。

(このまま放っておく訳にもいかないしな)

『でしたら、私に任せてください』

Zが対処に困っていると光の国の聖女が声を掛ける。聖女が声を掛けた途端にゼットが鳴りを潜める。一向に聖女と関わろうとしないゼットにゼットが内心で溜息を吐き、改めて後々訳を聞く事を決意しながらも聖女に向かって尋ねた。どうするんだ?と。

『私がこの怪獣を弔います。肉体を亡くし、魂が無事に怪獣墓場に渡れる様に』

(……? 怪獣墓場って何ですか?)

『え?……知らないの、ですか?』

すいません、と謝るZに聖女はポカンとした表情を浮かべる。彼と一体化したウルトラマンは一体何をしているのか、何か訳があったのだとしても共に戦ってもらう人間には教えるべきことがあるだろう!と少し憤るも表には出さず、極めて冷静にゼットへ応える。

『でしたら私がお教えします。ですが今は先にこの怪獣を弔わせてください』

(あ、わかりました。すみません、無知で)

『……………カワイイ』

(え?)

『…?…?…?どうかなされました?』

(い、いえ。何でもありません。…気のせいだったのかな?)

気のせいではありません。聖女はZが己を助けてくれた凛々しい姿とは打って変わって少し申し訳なさそうにしている姿にギャップを感じ、無意識下にだが萌えていた。聖女、『ギャップ萌え』を体感する。

それはさておき
閑話休題。

聖女はザキラの遺体の前へと歩み寄ると片膝を突き、両手を組んで祈る姿と為った。彼女の胸には「戦うしかなかった事による罪悪感」と「死後の魂の安らかな眠りを祈る気持ち」の二つが満たし、その想いが慈愛の光となって怪獣を優しく包み込む。怪獣の遺体は端々から聖女の光と同化していく。

(――)

なんて神秘的な光景だろう。怪獣相手であろうと慈しみの心を失わずに魂の安泰を祈る聖女の姿。ふと、何か光の粒が落ちた。一粒、二粒、三粒と落ちる光は聖女の涙であった。

『ごめんなさい、貴方は巻き込まれただけ。抗うことの出来ない悪に命じられ、従うしかなかった被害者。それでも私は、死ぬ訳にはいきません。この星の人々を、危険に晒す訳にはいきません。どうか、お眠りを。安らかで誰にも邪魔される事のない永遠の微睡みが、貴方を満たし包み込む様に――』

それは聖歌だった、優しい光の冥福。聖女の名に恥じない姿が其処にあった。怪獣相手に何を――と思う輩は居ない。

少なくともゼットはそうは思わなかった。

(光の国の…涙の聖女、か)

今も光の粒の涙を溢しながら言葉を紡ぐ聖女の姿に、ゼットは暫し見惚れていた。

――暗躍する者の魔の手が及ぶ迄は。

少し離れたビルの屋上に一人の若者が立っていた。GIRLS職員の制服に身を包んだ霞んだ黒髪に、顔色の悪い顔の青年は首を二度、不気味な動きで傾けると、ナニカを取り出した。

「KOSI KAREKARETA……シャドウ」

それは黒と紫のウルトラゼットライザー、謎の存在『シャドウ』によって複製された『シャドウゼットライザー』だ。

青年——正体はババルウ星人に寄生し支配したセレブロという生命体は、ライザーを突き出すとトリガーを押した。ライザーの発光部から紫色の闇ヒカリが放たれる。

『……ッ!?!』

——その時だった。聖女が怪獣墓場へ還そうとしていた怪獣が何処からとも無く現れた蠢く大量の影に覆い尽くされたのは。

(!!失礼します!)

「ジェヤア!」

『え?キヤッ』

一早く危機感を抱いたウルトラマンZは、聖女の手を取って引き寄せるとその女性的で、か弱い体軀を腕の中に納めると即座に距離を取る。

(何が起きてる?)

『はわ、はわわ!』

突然現れた影に訝しみながら右腕の中の聖女を庇う様に自身を前に出して抱き留める。

肝心の聖女様は“はわわはわわ”と言って、ほっぺ真っ赤つか、お目目ぐるぐるにしているのだが。さっきまでの神秘的な姿は何処か銀河の彼方へと旅立ってしまったらしい。

怪獣を覆う影はモゴモゴと蠢き、まるで繭の様な姿から変化している。呑み込んだ怪獣の造型フォルムを保ちながらも従来のウロコなどは失われた、全体的につるりとした無機質な姿へと変わった。

特に目なんか完全に無くなり、代わりに両眼を覆う黄色のバイザーの様な器官が出来ていた。

ウルトラマンZや光涙を語り継ぐ者の国の聖女にはわからないが、ザキラを呑み込

み変異して生まれたシャドウ。

そしてシャドウにより変異したザキラは、名称するなら『シャドウザキラ』と呼ぶべきだろう。

『■■■■ツツツ!!!』

シャドウザキラが悍ましい怨念の様な咆哮を上げる。

これが、蘇った怪獣の産声となった。

(復活、した?)

『…………っ』

俺は倒した筈のザキラがさつき襲ってきた影みたいなの奴らに吞まれて変異した姿に困惑し、背後からは聖女様が戦慄している気配がする。

(何かわからないが、もう1ラウンドやるしかないみたいですね…! 聖女様は下がってください)

『許さない!!』

「へエア!」

び、ビツクリした。

背後に居た聖女様が、いきなり大きな声を出して俺の前に出る。その様子は、間違いない、怒っている。

心の底から彼女は憤慨している。拳を強く握り締め、さっきまでの彼女と同じ人物とは思えない程の怒気を放っている。

『決して、決して!許される事ではありません!死した者の身体を利用するなど!ましてや怨念の塊で穢すなど?!尊厳の冒瀆に他なりません!!』

(お、落ち着いてください!)

『離して、ください!一体誰が!誰がこの様な非道な行いを!!』

『■■■■ツーー!!!』

(!?危ない!!)

『キヤア!』

影に取り憑かれ変異したザキラが吼え、身を翻す。すると黒紫色に

染まった尻尾が伸びた。伸びた尾はそのまま建物を薙ぎ払いながら俺や聖女様に迫る。

俺は聖女の肩を掴むと後方に投げ、両腕を防護壁として尻尾を受けた。
た。

(重ッ！つてぐあっ!?)

「デイエア!？」

パワー特化のベータスマツシユでも受け切れずに弾かれ、踏鞴を踏む。

くそ！パワァアップしてやがる!!体感的には1.5倍ぐらい、お陰で腕がじんじんと痛む。

『■■■■ーッ!』

再び咆哮。そしてとてつもないイヤな予感が全身を駆け巡った。

影ザキラに目を向ければ目部分のバイザー、その中央の奥に強い紫色の光が灯っていた。それはまるでエネルギーが溜められている——あるいは通常形態の時も使っていたレーザーを発射準備している様で。

(ツ?!マズ——)

だが、気付いた時には遅く。影ザキラのバイザーから拡散式のレーザーが放たれた。(イメージはバツクル光線)

『■■■■ツ!!』

(づぐつ、うぐぐぐぐツ。ツうぐあっ!?)

「デエエアッ!？」

両腕を壁の様に並べ、頭部と胸部を防御。影ザキラの拡散レーザーをこの身で受け、踏ん張ったが耐え切れず吹っ飛ばされてしまう。

このカラチエン野郎、良くもやりやがったな!!俺は反撃にと即席だが『ゼステイウム光線』を放った。

『■■■■!!』

(よっしーぎまみろー!)

俺が放った『ゼステイウム光線』が影ザキラの頭を捉え、光に影が消し飛ばされ、影ザキラの頭部が焼失する。

けれどその直後に、

『ーー■■ッ!!』

(!!マジかよっ!!)

失くなった頭部が、胴体から蠢く影が広がり復元された。しかもすぐさま拡散レーザーの二射目を放つなんて事をしでかしゃがった!?

(そんなのアリかよ!?)

迫り来る拡散レーザーをベータスマッシュの俊敏性じゃ避けられないと判断した俺は直撃を覚悟し、少しでもダメージを和らげる為にガードの姿勢に成る。……ってあれ? 身体を襲う熱と衝撃が来ない?

腕をどかしてみれば、目の前にオーロラのような光のバリアが変異ザキラの拡散レーザーを防いでくれていた。

『大丈夫ですか』

後ろから声がかして振り返れば、聖女様が片腕を俺に向け、俺に向けられた掌に淡い光を宿していた。どうやら彼女がバリアを遠隔展開して俺を守ってくれたらしい。

『今、傷を治します!』

聖女様は拡散レーザーを防ぎ切ると今度は両手を前に出し、俺に優しい光を放ってくれる。

聖女様の放ってくれた光が俺の身体を包み込み、心地良さとエネルギーが補充されていくのがわかる。

『攻撃は私が防ぎます。傷やエネルギーの消費も私が回復します。ですので貴方は攻撃に専念してください!……あの怪獣を、少しでも早く解放してあげてください!……ッ』

(…………)

なんてこった。本来戦う人じゃない筈の聖女様に攻撃を防いでもらい、それどころか回復までもらうだなんて。情けない限りだ。だけど、同時に頼もしくもある。それにこれで憂いは無くなった。だったら俺のすべき事は一つ、彼女の望み通りあの怪獣を倒す事だけだ!!

「ディイヤッ!」

俺は影ザキラに向けて走り出す。

先程、生物の弱点である頭部を必殺光線で破壊したが奴は倒れなかった。理由は恐らく、奴が生き物じゃないから。死んだ怪獣に取り憑き操っているのが奴の正体。何処かしら一部だけ消失させても他の大部分で補われて修復されて終わりだ。

だとしたら切断技の『ベータクレッセントスラッシュ』は効果が無いだろう。効果的だと思うのは胴体に必殺光線を当てるか、『ゼステイウムアツパー』で粉々に打ち砕くか、のどちらかしかない！

(いっ！くうっ！ぞおお！オラアアア!!!)

「ダイエア！」

『ツツ■■■■!!!』

『させません！』

接近する俺に影ザキラはバイザーにエネルギーを溜めて拡散レーザーを撃ち出す。けれど、聖女様の遠隔バリアによって完全に遮られる、

俺は展開されたバリアをジャンプで飛び越え、空中で前転。そして、

「ULTRAMAN Z」

「ALPHA — EDGE」

『アルファバーンキック!!』

アルファエッジへと形態変化し、空中前転から渾身のタイプチェンジ炎纏う飛び蹴りを影ザキラの頭部——バイザーに叩き込む。

『■■■■ツ?!?』

ばきり、とガラスを踏んで割った様な音が聞こえ、影ザキラのバイザー全体に罅が広がり絶叫する。

お前の弱点、というより失敗を教えてやるよ！それは死んだ怪獣に取り憑いた事だ！必殺光線を受け、更には聖女様によって消え掛かっていた怪獣の肉体。そんなもの、脆いに決まっている！

俺は影ザキラを踏み台に飛び上がる。影ザキラは苦しみ悶えながらも俺を狙撃しようと拡散レーザーを溜めるが罅からエネルギーが漏れて一向に溜まりやしない。

(よっしや！拡散レーザーは封じたぞ！という訳で必殺光線ぶっ放す

!!

『ゼステイウム光線!!』

『援護します!』

俺の放った必殺光線が影ザキラに直撃すると同時に、聖女様がバリアを影ザキラを囲う様に展開する。凄まじい熱量の光エネルギーが散る事なくバリア内で暴れ回り、影ザキラの身体から影を引き剥がし、端々から分解して、その悉くを消滅させる。

『——お眠りなさい。今度こそ、誰にも邪魔される事なく』

聖女様の言葉がザキラの最期を告げる。

光線とバリアが対象を失って対消滅する。そして残ったのは儂い光の残滓だけだった。

「ジッシャー!」

地面に着地して、ザキラが居た場所に目を向ける。隣では聖女様が祈りを捧げていた。数秒、或いは十数秒程が経ち、聖女様が祈りを終えて俺に向き直ると深く礼をする。

『ありがとうございます、貴方のお陰で助かりました』

(……いえ、此方こそ聖女様が援護してくださらなかったら危なかったです)

『……ふふ、そうですか』

クスクスと可憐な仕草で微笑まれる聖女様。だが、すぐにその表情を引き締める。

『すみません、詳しくお話したいのですがこの星では時間が限られています。そこで、お願いがあるのですが……いいでしょうか?』

(はい、任せてください!!出来る限りの事は致します!)

『それは良かった!では、私も貴方と共に居させていたただきたいのです!』

(はい!わかりまし——………?)

『それでは、失礼します!』

(え、ちよ、待って)

聖女様は俺の制止を聞いてくれず、その身体を光へと変換すると小さく等身大まで縮小すると、胸のカラータイマーに向かって飛び込ん

できた。

聖女様がインナースペース内に現れた。

『それでは暫しの間、宜しくお願いします』

『なー!?』

「えー!!」

インナースペース内に俺とゼットさんの声が響き渡った。

こ、この聖女様、意外と行動力がある様ですね。

『……………フフ』

『大丈夫、ですか?』

「はい。問題無しです!」

『……………よかった』

ウルトラマンZの変身を解いて本来の姿に戻った俺は未だ、インナースペース内に居た。目の前には俺と近い身長 of 聖女様が、ウルトラマン時にフィードバックした俺の身体に付いた傷を治癒してくれていた。

『それでは改めて自己紹介させて戴きます。私の名前は「涙を語り継ぐ者」』

「……………えつと?」

『……………何か、おかしな事がございましたでしょうか?』

「あ、いえ! その、ちよつと文化の違いと言いますか…過去に現れたウルトラマンは皆“ウルトラマン”や“ウルトラ”の後に個別の名前が着く、って感じだったので少し困惑してしまいました」

『なる、ほど』

聖女様の顔が一変して不安そうな表情に変わり、慌ててフォローを入れた。聖女様は一応納得してくれたみたいだが、何処か落胆した様子が窺える。

『……………』

それにしてもゼットさんは何故聖女様——涙を語り継ぐ者さん

から距離を取っているのだろう。なんだか、警戒してる様にも見える。

「そう言えば最初ゼットさん、涙を語り継ぐ者さんの助けを求めた時出てきてくれませんでしたけど、何故だったんですか？」

『……………』

『え？あー、いや、それは、その……………』

あ、あれ？なんだか場の空気が重くなった。もしかして、地雷踏んだ？

涙を語り継ぐ者さんが顔を伏せ、ゼットさんが言い淀む。

「あつと、えつとー！」

『彼女は……………』

俺が右往左往しているとゼットさんが話し出してくれた。

『彼女は光の国の『聖職者』という、特別なチカラが在るのに使おうとしない種族のウルトラマンだ』

『……………』

特別な、チカラが在るのに使わない？

ゼットさんは何処かトゲのある言い方をし、それを聞いて顔を伏せる涙を語り継ぐ者さん——やっぱり、申し訳ないんだけど長くて言い難いな。……………そうだ！

「ゼットさん、そんな言い方したらティアさんが可愛いそうですよ」

『……………へ？』

『……………？ティア、とは私の事、ですか？』

「はい、申し訳ありませんが涙を語り継ぐ者って少し言い難かったので渾名を考えてみました。涙を語り継ぐ者って名前と、怪獣を想って涙を流せる優しい人なので、地球の言葉で意味が涙である『ティア』…と」

『……………』

あれ？もしかして気に入らなかつたかな？

ティアさ……………涙を語り継ぐ者さんは言葉が出ないと言った様子で口元を両手で覆っている。表情、がわからないから判断が難しい。

「あーと、すいません。もしかして勝手に渾名を付けたりして失礼、で

したか？でしたら、その今のは無かった事に——」

『そんな事ありません！ティア：と、これからはそうお呼びください』

「あ、わかりましたティア様」

『呼び捨てで構いません。そのこの戦士の方の様に、もっと友好的な関係でありたいのです』

「えつと、じゃあゼットさんと同じ感じでティアさん、と呼びますね』

『はい、『デュアル』様』

「……デュアル？」

ティアさんが俺の事をデュアルと呼ぶ。確かデュアルって二つ……みたいな感じの意味、だったよな？何かの間違い、かな？いや、だとしても何をどう間違えたらデュアルになるのだろうか。何か意味があるのだろうか？

俺が困惑していたら、ティアさんが慌てた様子で説明してくれた。

『す、すみません！デュアルというのは光の国で、二つの国籍のある者』を表す言葉です。先程の様なウルトラマンとしての姿、そして今の貴方本来の姿。ウルトラマンでもあり、地球人でもある貴方にピッタリの呼び名と言えます』

俺がティアさんに地球の言葉で渾名をあげたので、お礼としてティアさんは光の国の言葉で渾名をくれたって事かな？それにしても『デュアル』か。…うん、なんか響きがカッコよくて良いな！

『どうしますゼットさん？これからはウルトラマン^{デュアルゼット} Z Z って名乗りますか！』

『いや、デュアルゼットってウルトラ言い難いだろう』

「…あー、確かに語呂が悪いですね」

『その、すみません。良いのが思い付かなくて…』

「え!?!いや、別にそういう意味じゃなくて』

あー！ティアさんがしょんぼりしてる!?!

「俺自身としては気に入りましたよデュアル！なんてったってカッコイイですから!!」

『……本当、ですか？』

「はい！折角付けてもらった渾名なので大切にします！」

『そう、ですか。ふふ、喜んでいただけで何よりです』

よかった。俺の言葉にティアさんが元気を取り戻してくれたみたいだ。

あ、そういえば気になる事が一つ有った。

「一つ、訊いてもいいですか？」

『…？はい、なんでしよう？』

「何故、地球にやってきたんですか。それも怪獣に追われて」
『……………』

ティアさんは俺の質問に、少しだけ言葉を止めた。だけど、すぐに話してくれた。巻き込んでしまったのだから説明しなければならぬ、そんな決意の様なものがティアさんの雰囲気から感じ取れた。

『実は——』

この日からだ、俺とティアさんを狙う宇宙人との戦いが幕を開けたのは。

そして、影を操り暗躍する奴との因縁もこの時から始まったのだった。

——地球周辺の宇宙空間にて浮かぶ宇宙船が、其処に在った。

船内にはたった一人、宇宙船の主である宇宙人が居た。金赤黒のアーマーに身を包み、何処か蝙蝠の様な頭をした宇宙人——バット星人が地球の光景をモニターリングした映像を眺めていた。

『あーあ、ザキラ死んじゃったよ。なんてホント役に立たないクズだな』

宇宙船内に居る唯一の宇宙人は、少年の様な声でモニターに映った映像を観ながら話している。聞く相手など居ないというのに。

『それに、あのウルトラマン』
バット星人はモニターの映像を巻き戻して、ウルトラマンZを映す。

『気に入らない』

不機嫌な声だ、その表情を酷く歪めてギリィ…ツと音がする程の歯

バラージの矢（前編）

「——シズク・ウルティアです。これからよろしくお願いします」
ペこりと、礼儀正しく礼をする美少女。うなじに掛かる長さのブロンドの髪と鮮やかな碧眼の、日本人と欧米人のイトコだけを足し合わせた様な端正な顔立ち。主張し過ぎないけれどキュツと引き締まった健康的な身体付きは芸術的に美しい。

男子は当然ながら、女子すら魅了させる美少女がウチの高校の制服を着て、転校生としてやってきた。

「……………はは」

急な転校生である彼女の正体は、先日地球に現れた光の国の聖女改め『ウルトラセイントティア』さん。俺と一体化してゼットライザーの中に居ただけだけど、余りにもゼットさんとの雰囲気が悪過ぎて人の姿を真似て外に出てきたって訳。

そして今日、ティアさんは日本人とアメリカ人のハーフの留学生——という設定で、この姿は地球で見掛けた人の中から選んで髪や瞳の色を変えただけらしい。つまり、この美少女の元になった人が実在するって事。胸熱だね！

『……………』

「……………」

担任の先生に紹介され、1限目は転校生との触れ合いって事になり、ティアさん。……………今はシズクさんがクラスの殆どの生徒に包囲されて質問責めにされ、シズクさんは困惑しながらも生真面目だから一つ一つ丁寧に答えている。

「……………気に、なるの？」

“すぐ馴染めそうだな”なんて思いながらシズクさんを眺めていたらアキが話し掛けてきた。……………？なんだか面白くなさそうな顔をしている。

「だったらゼットも質問しに行けばいいじゃない」

「いや、何も言っただけでねえんだけど」

「ふんっ、どうせゼットもあの人に夢中なんですよ。綺麗な人、だし

……行つてきなよ、ボクは……此処で本でも読んでおくから」
言つてる途中に段々と言葉尻が弱くなり、顔も伏せるアキ。
たく、何が『おくから』だよ。そんな顔してるのに放つて置ける訳
ないだろ。

「——アホめ」

「え？わぷっ！」

「そりやそりやそりや！」

俺は俯いたアキの頭を両手で掴むとわしゃわしゃと撫で回す。

アキが「や、やめてよー！」とか言つてるが無視してわしゃわしゃ
し続ける。

「う、うゝツ、何するの」

ボサボサになった髪を整えながら、キツと睨み付けてくる。

「アホな事言つてる幼馴染にお仕置きしてやっただけだが？」

「むっ」

「このアホアホ娘め！……俺がお前を放つて置いて一人にする訳ない
だろ」

自分で言うのもなんだけど、お前の為なら命賭けて戦う事だつて出
来る。勿論、死ぬつもりなんか毛頭無いけどな！

「だから、な。何を気にしてるのかわかんねえけど心配すんな。お前
の頼もしい幼馴染のゼットさんは此処に居るから」

「……うん。ボクの方こそごめん」

「いいつてことよー！」

アキが笑つてくれる。うん、やっぱり人間笑顔が一番だわ。

むうゝ。何故でしょう？

デュアル様——光国ゼット様がお隣の女性の方と話されている
のを視界に入れて途端に胸が、とてもモヤモヤします。

「ウルティアさん？」

「……え？あ、すみません」

折角向こうから接してくださっているのに私ったら上の空になつ
てしまいました。うう、申し訳ありません。

「何見てたの？」

話し掛けてきてくれた女性の地球人の方の一人が私の視線を辿る。ゆっくりと首を動かし、私の視線の先——ゼツト様に至った。

「光国君が気になるの？」

「あ、えつと、その……」

「え！何々、もしかして見惚れちゃったとか！」

「マジ？それって一目惚れってヤツー!?」

キヤー！と女性のクラスメイトの方々が声を楽しそうに上げる。

「……………マジで？」

「信じねえ、信じねえぞ俺ア！」

「きつと鳥さんを観てたんだ！きつとそうだ！」

「漸く俺にも春が来るかもしれねえって言うのに！」

「それは無い！」

「き、キサマらアツ!!」

男性のクラスメイトの方は頭を抱えて仰反る方、四つん這いになって地面を叩く方、窓の外を眺める方、春が来る？と言った方とそれを否定する方々。……春とは環境の変化、季節の事ですよ？実は個別で訪れるモノ、なのででしょうか？

「えつ……と、その、……………」

そうです！別に誤魔化す必要はないじゃないですか！ゼツト様がウルトラマンだって所だけ隠せば良いのです！

「実は、先日怪獣が現れた時にあの方に助けていただいたのです。あの方がいなければ私は此処に居なかつたと思います」

「え、カッコよすぎか？」

「騎士じゃん」

「美少女のピンチに駆け付けて命を救うとか主人公かよ」

「くそっ！そこに居たのが俺なら彼女は俺に釘付けだったのに！」

「お前じゃ無理だろ」

「テメエらあーッ!!」

!!男性の方が他の方に飛び掛かりました！と、止めないと!?

「アホらし、それよりも続き聞かせてよ」

「え？あのままにしているのですか？」

「気にしな—い気にしな—い、そんな事より続き続き！」

えっと、大丈夫なんでしょうか？…あ、無事收拾がついたみたいで
す。

男子の奴らが大乱闘始めたりと一悶着あつたけど、まあ、気にしな
い。シズクさんもすっかりクラスの仲間入りだな、

「—ねえウルティアさんは何処に住んでるの？」

「あ、はい！今は—ゼット様の元でお世話になっています」

「ゴバツフツ!!？」

『『……え？』』』

クラスの素っ頓狂な声と俺が吹き出すのはほぼ同時だった。シズ
クさん以外のクラス全員の視線が俺に集中する。先生はニタニタと
笑いながら俺を覗いている。畜生！クソ教師め!!

「ゼットト？」

おっと、隣のアキが怖いぞオ。ならば選択肢は一つしかないな！う
ん、無い!!

「先生！身の危険を感じたので早退します!!」

逃げるオ!?俺は先生の返事を聞く前に全力ダツシユ。教室から飛
び出した。

『ヤツが逃げたぞ!!』

『追って捕まえ尋問しろ!!』

『裏切り者に死ヲオオオ!!』

後方から妬みと怨念が込められた野郎共の怒声と足音が聞こえる。
だが奴らなんかは問題にならない。

本当の問題、それは—!

「ゼットゼットゼットゼットゼットゼットゼットゼットゼットゼット
ゼットゼットゼットゼットゼットゼットゼットゼットゼットゼット
ゼット」

「びい—?!?!?」

ハイライト

光を失った瞳と無表情、更にぶつぶつと呟きながらで追い掛けて

場所はインナースペース。クラスの男子に追われ、女子に追及され、そして何よりアキにボロボロ（比喻表現）にされて流石に疲れた。まあ、最後はティアさんがなんか上手い感じに記憶を消してくれたお陰で難を逃れられたんだけど。

兎に角、今俺は人間態のシズクさんではなく、本来の姿のティアさんと向かい合っていた。ゼットさんは俺の背後に立ってティアさんと距離を離している。

……うーん。やっぱり雰囲気が悪い。

「あ、そうだティアさん。アレ、もう一度見せてもらってもいいですか？」

『え、あ、はい。わかりました』

ティアさんが胸の、カラータイマーに両手を重ねる。光が漏れ、手を胸から離すと彼女の手には光の塊があり、光が散ると彼女を追う宇宙人の目的の一つであるソレが姿を現した。

やっぱり何度見ても石で出来た矢印みたいな杭……にしか見えない。ティアさんの話だとコレはバラージって名前の惑星で見つかった伝説の超兵器。伝説では嘗て多数の怪獣に襲われたバラージを、胸に深紅の耀きを灯し白銀の身体を持った神秘の巨人が怪獣を殲滅し、最後に遺してくれた『矢』……らしい。

「でも、やっぱり只の石ですよね」

『はい、私達では扱う事は出来ませんでした。ですが敵の大連盟の手に渡す訳にもいかない為、私達が受け取ったのです』

「へえー」

ぺたぺたと石兵器を触る。感触、石。硬さ、石。温度、石。

「割れば中から真の姿で出て来たりしませんかね？」

『だ、ダメです！ダメですよ!!』

「あはは。冗談ですよ、冗談！」

『………本当、ですか?』

じつとティアさんが見詰めてくる。あはは、なんだか人間態シズクさんの姿がティアさんと重なって見えるぞ。それもジト目で。ふむ、

「可愛い」

『…………。ふえ!?!』

「うん、やっぱり可愛い」

見える、見えるぞ。赤面しておろおろするシズクさんの姿が重なって見えるぞ！

『むう〜』

「痛い、痛いですていあさん」

ティアさんにムスツとした表情で頬を抓られた。

バラージの矢（中編）

人間態に変身した私はゼット様と並んで歩きながら、超兵器の事を考えています。

ゼット様も申されましたが、いくら調べても唯の石としかわからない『バラージの矢』。これが怪獣を殲滅した神秘の巨人——別の宇宙のウルトラマン。それも凄い力を持つ——が遺した超兵器。戦争の勝敗を左右すると言われた武器。

「お決まりの展開なら、武器が使い手を選ぶ……的な感じなんだろうか？」

「武器が使い手を選ぶ……」

なるほど、その考えは浮かびませんでした。目から鱗、です！もしかしたらそれが答えなのかもしれません。ある条件を満たした者のみが扱える。或いは、武器を遺したウルトラマンが認める者じゃないといけないのかもしれませんが。

「むむむ。一体何が足りないのでしょうか？」

「なっんも、わかんねえや！」

悩んでも答えはわかりません。

その時でした、全身を貫く様な悪寒が走ったのは。

「!?……これは、まさか！」

「どうしました?」

空を見上げる私の変化を察したのかゼット様が真剣な様子で私に尋ねてきます。

「怪獣が、来ます……!」

「!!」

私と同じ様に空を見上げるゼット様。瞬間、空の雲を裂いて巨大な隕石の様な、炎の様な赤い塊が落ちてきて地面にぶつかる。光が爆ぜて、大地が強く揺れる。

「ああ、もう!またかよ!今度は……クワガタ?」

「あの怪獣、あれはまさかアントラー!?!」

二足歩行、そして三本指の両腕。頭部にはハサミの様な巨大なアゴ

を持った人型の虫の様な怪獣、それがアントラー。

ですがあのアントラーは私の知っているものより一回り大きく、身体中に細かな傷が刻まれている。特に胸に大きな×字の傷が。けれどその姿からはボロボロな様子は無く、寧ろ歴戦の強者の風格が感じ取れる。

「アントラー？」

「はい。あれはバラージで大暴れしていた怪獣で磁力光線とあのアゴが強力な武器の、地球の生き物でいうとアリジゴクの様な怪獣です！」

(アリジゴク、だったのか)

…？ゼット様がなんだか少し恥ずかしそうにしているのは何故でしょう？

「兎に角、俺はあの怪獣と戦いますのでティアさんは何処か安全な所で隠れていてください！」

「!?待ってください、あの怪獣の狙いは私です！私も戦います！」

ゼットライザーを取り出したゼット様が私一人を遠ざけて一人で戦おうし、私は反抗してしまった。

「いや、でも貴女は戦いに向いてはいません。なので」

「確かに私は戦闘タイプではありません。ですが私にだって回復光線やバリア、他にも強化光線だって使えます。支援するぐらいは出来ます！」

「ギューアアア！」

私達が言い争っていた。その時、甲殻が擦れる音と甲高い咆哮が聞こえました。私達が慌てて振り返ると、アントラーがこちらを向いていました。見つかってしまったというのですか!?

アントラーが巨大なアゴを開くと口元から空間が歪んで見える異質な光線を放ってきました。アレは磁力光線！マズい、直撃したら私たちの身体が圧力に潰れてしまう。

「危ない！」

「うわっ!？」

私はゼット様の前に出て両腕を突き出しバリアを展開する。

「くっ、重いイ……ツキヤア!？」

「ティアさん! つぐあっ!？」

今は人の姿をしてはいませんが私もウルトラマンの一人。なんとしても彼を守ろうとしましたが、アントラーの磁力光線は私の想定よりも強力で、私は耐え切れずバリアを破られてしまった。

「ゴホッ……ゴホッ……! だ、大丈夫、ですかティアさん?」

「う、うう……ッ、はあはあ……な、なんとか」

私達は身体の中が無茶苦茶にされた様な痛みに悶えながらもなんとか起き上がる。

「くそっ……あれ?」

「……う? どう、なされましたか?」

「…………! ない! ゼットライザーが無い!!」

「!? ……! あそこを!!」

「!」

私が指した場所をゼット様が目を向ける。

私が指した先はアントラーの右のアゴ。そこにゼットライザーが張り付いていた。

「な、なんであんな所に」

「恐らく、アントラーの磁力光線に引っ張られてたのかと」

「くそ、あんなのどうすれば」

「………私が取ります」

「!？」

私の言葉にゼット様は驚愕した様子で振り向く。

「何を言ってるんですか! 無茶です!」

「でしたら他に方法がありますか?」

「………っ」

「私が、やるしかないんです!」

「ティアさん!!」

私の身体が光に包まれ、そのまま宙に浮かびアントラーの前へ向かう。光の大きさは増して私、ウルトラセイントティア涙を語り継ぐ者本来の姿へと変身する。

ゼット様が戦えない今、私がこの街を、この星の命を護ります!

「ギユアア……!」

『さけません。この街は私が守るんです!!』

巨大化したティアさんに襲い掛かる甲虫怪獣アントラー。ギチギチと甲殻同士が擦れ合う音を鳴らしながら、アゴを開いてティアさんを挟み込もうとする。

『ヤー!』

ティアさんは空へ飛んでアントラーのアゴから逃れる。そしてアントラーの頭上を位置取ると両腕を胸の前で交差して独楽コマの様に高速回転しだした。

『ハアーツ、キャッチリング!』

回転するティアさんから金色のまるで鎖で作った輪つかの様な光線が三つ放たれ、アントラーの胴体を締め付けて拘束する。

「ギユイ、ギユアア」

アントラーもティアさんが放った拘束を解こうと身を振っている。どうやらあの技は締め付けるだけでなく、その場に固定してしまう技の様だ。

『これで!後はゼットライザーを取るだけ…!』

ティアさんはアントラーの前に降り立つと近寄り右のアゴに張り付いたゼットライザーへ手を伸ばす。

だが、その時!

「ギユアアア!!!」

『え?キャツ!』

アントラーの渾身の怪力がティアさんの拘束光線を破り、アゴをティアさんに向ける。完全に不意を打たれる形になったが、幸いティアさんが驚きの余り後ろにバランスを崩して尻餅をついた事で避ける事が出来た。

「はあ、良かった」

ティアさんはアントラーのアゴの距離から離れると仕切り直す。

俺はティアさんが無事な事に安堵しつつも同時に焦りも感じてい

た。あの怪獣は拘束光線を受けた後、敢えて拘束され続け、更に身を振ったりと抗っている様な仕草を見せる事で、拘束が解けなくて暴れる様に見せ掛け、油断を誘った。事実、もう少しでティアさんはあのハサミの様なアゴに捕らえられていただろう。知能の高い、狡猾な怪獣。今迄に無かったタイプの怪獣だった。

「……くそ」

見ている事しか出来ない悔しさに拳に自然と力が入り、強く握り締める。何か、出来る事はないかと考えるが。変身しなきや唯のちっぽけな人間でしかない俺に出来る事なんかある訳がなく、結局、ティアさんがゼットライザーを取り戻してくれる事を祈るぐらいしかなかった。

『くっ、はぁー!』

両腕を広げてバリアを展開し、アントラーのアゴを受け止める。ギヤリギヤリとアントラーの鋭いアゴがバリアを穿とう突き立てられる。

ティアの展開したバリアはとても強固でアントラーは破るのとは不可能と判断すると次の手に移った。

アゴを広げて口から虹の様な彩の磁力光線を放つ。ティアは続けて同じバリアで磁力光線を遮るが、バリアにぶつかり霧散してティアの視界を塞ぐ。

『!!くっ』

アントラーの狙いを悟ったティアはバリアを解いてアントラーが見える位置に移動するが、

『い、居ない!? 一体何処へ?!』

アントラーが姿を隠し、ティアは完全にアントラーを見失った。冷静ないつものティアなら地面に開いた穴から地下に潜ったのだと至る筈だが、いかんせん今のティアは焦っていた。

結果、ティアは穴を見逃した。そして、

「ギユウアアア!!」

『なっ! あぐう!?!』

地面に潜ったアントラーがティアの背後に頭部だけを飛び出させてティアの右脚をアゴで挟んだ。アゴの内側の鋭利な部分がティアの脚に深く食い込む。

アントラーはティアの右脚を挟みながら地中から抜けて現れる。当然アゴの位置が高くなり、ティアは脚を引っ張られて前へ倒れる。

「ギューアア!!」

『あがつ、ぐうう、ああああああ!!』

アントラーはアゴを広げてティアの脚を離すと、次はティアの胴体を挟んで持ち上げた。ぎちぎちぎちとアントラーのアゴがティアの胴体を切断する勢いで挟み込む。

『う、ああ…あ、うづつ、づつ……』

ティアは自分の身体が引き裂かれる様な激痛に喘ぐ。なんとかアゴを離そうとするが唯でさえ力で負けているのに、痛みを感じながらの状態でどうにか出来る訳が無く、まだ1分しか経っていないというのに彼女のカラータイマーが鳴りだした。

なんとか脱出しようと抗っていたティアさんだが、段々と抵抗が弱まり、やがて力を失い腕がぶらんと垂れる。

「ティア、さん…ッ!!」

俺には、何も、出来ない! 見ているしかない。

ティアさんの目から光が失われ、首が項垂れる。マズい、ティアさんは限界だ。このままじゃ、ティアさんが殺される!?

「くそつ、くそお…!」

ウルトラマン^{たち}じゃない俺は無力だ。ティアさんを救える人は。もう、怪獣と戦える人が居な——居た。居るじゃないか! 怪獣と戦える、怪獣の力を持った人達が!!

俺はスマホを取り出すと慌てて電話を掛ける。

「頼むツ、頼む頼む頼む! 出てくれ!!」

暫しのコール音の後。プツツ、と繋がる音がした。

『どうしたのゼツ』

「アキ!! 今すぐGIRLSに、ゼットンさんにあのウルトラマンを助

ける様に言ってくれ!!」

『え?ど、どういう事。説明してゼット』

電話の相手はアキ。

きつと怪獣騒動で所属しているGIRLSから呼び出されている筈だ。そして、彼女と同じくGIRLSに所属している最強の怪獣娘『ゼットン』。ゲネガール、バルタン星人、シルバゴンと戦ったあの人ならあのアントラーとも戦える筈!!

「頼むアキ!早くしないとあのウルトラマンが殺される!」

『落ち着いてよ!そんな事、急に言われたって。一応、連絡先は知っているけど出てくれるかどうかわからないし』

くそっ、やっぱりそう簡単にはいかない。

…………。だったら!

俺とはある情報を開示した。

「あのウルトラマンはシズクさんなんだ!!」

『え?シズクさんって、あの転校生の?』

「そうだ!俺は見たんだ、彼女がウルトラマンに変身した所を!!」

『…………』

どうだ?!ウルトラマンの正体がわかり、尚且つそれが身近な意思疎通の可能な存在だ。これならみすみす死なせる訳にはいかないだろう!!早計かもしれない、でもこれしかティアさんを救う方法が思い付かない。

『ねえ、ゼット。今の話は本当、なんだよね?』

「ああ!間違いない!!」

『わかったよ。本部に掛け合ってみる』

「!!頼む!」

電話が切れる。頼む。上手くいってくれ!!

俺に出来るのはもう、祈る事だけだった。

「それは信用出来る筋からの情報なの?」

場所はGIRLS本部の司令室。アキラからの連絡に応えた司令

塔の怪獣娘ピグモン。そしてピグモンの隣に居るサポート役のエレキングがアギラに尋ねた。

『少なくとも、ボクが誰よりも信じられる人からの情報です』

「……はあ、話にならないわね。そんな不確定な情報を信用出来る訳が」

「今すぐゼットンに連絡してください！」

「ピグモン？」

エレキングの言葉を遮って職員に指示を出すのピグモン。

「大丈夫ですよエレエレ」

「……今の話、信用できるの？」

「いいえ」

エレキングの質問をピグモンを何食わぬ顔で答える。エレキングが「だったら何故？」と言いたげな表情をピグモンに向け、ピグモンはそれに笑顔を浮かべて答える。

「だって、アギアギが『誰よりも信じられる』と言ったんです。いつも一緒に居るあの二人や——ゼットンよりもって」

「……………」

アギラがゼットンに憧憬を向けているのはGIRLS東京本部の中では周知の事実だ。アギラ自身も隠す気が無く、ゼットンに憧れているのか？と尋ねると「うん」と肯定している。

そしてアギラは、こんな状況で冗談を言う様な性格はしていない。そのアギラが憧れのゼットンを差し置いて一番信頼出来る人物からの情報だと言う。

ピグモンが「アギラが信じる人」ではなく、その人を信じる「アギラ」を信じたのだ。

「ふふ」

「……………はあ」

微笑むピグモンにエレキングが嘆息し根を上げる。「どうぞお好きに」とだけ言葉を放つと腕を組んで沈黙する。二人の様子を伺っていた職員達はホッと一息つき、すると次に腕を組んだ事で主張されるエレキングの豊かな双峰に圧倒される。

因みに職員は全員女性です。御安心ください（にっこり）

「……………何しているの？はやくしなさい！」

『っ!？』

エレキングがひと睨みすると職員達が慌ててモニターに向き合う。

ピグモンはその様子を見て苦笑を浮かべ、次に自分の胸に視線を落とし両手で触る。ぺたぺた、ぺたぺた、すとーん。無い、圧倒的に無い!!

「……………はは」

実はエレキングよりも年上で成人した大人であるピグモンの口から、乾いた笑みが溢れ落ちた。

ギチギチ、ブチブチ、とエモノから音がする。最初は非力なエモノが無意味な抵抗をしていたが、今ではされるがまま。少し力を加えればその度に苦しげ声を上げて面白い。

先程居た空間の時もそうだった。我と争っていた怪獣も最後は我のアゴに捕まり、悲鳴を上げながら死していった。火も、光線も、刃も、尻尾も、ツノも、我の甲殻からだは受け付けなかった。逆にどんな硬質な身体の怪物だろうと我がアゴは碎き抉り裂いた。逃げようとする奴もいたが我が息吹で引き寄せ、最後には我がアゴによって死んだ。

惑星我が住処バラージでもそうだった。我に殺せぬ存在などいない。あの銀色の巨人だって我を仕留め切る事は出来なかった。

「ギイイチチチチ」

このエモノを殺せば、次はあの小さな者だ。我を捕らえ、あんな空間に閉じ込め、殺し合わせた忌々しい小さな者。我を解き放った事を後悔させてやる……!

「————ピポポポ」

その時だった。勝利を確信して慢心していたアントラーの背中中で熱いたみが爆発した。完全に油断していたタイミングでの奇襲に驚いた余り、獲物テイアを挟むアゴの力が揺らぐ。

『!：今ッ!』

「だから、邪魔を……しないで!!!」

彼女の周りに浮かび上がる幾多もの火球がアントラーへと一斉に殺到した。

『ー!?……?』

何故か、とても恐ろしい事が起きそうな予感にティアが身震いする。

『今のは、一体?…はっ!いいえ、そんな事よりもゼットライザーを取り戻してゼット様へお返ししなくては!』

アントラーは無数の火球が直撃し、全身を隈無く火炙りにされるが堅い甲殻に阻まれ直接的なダメージへと至ってはいなかった。

アントラーが反撃に磁力光線でゼットンを狙い撃つ。だがゼットンのテレポートで躲され、また無数の火球に襲われる。

『ギィィィィィ!!!』

「!」

地上に居ては拉致が開かないと踏んだのだろう。アントラーが背中の堅い前羽を広げ、その下にある後ろ翅を高速で動かし飛翔する。

その巨体からは想像出来ない程の高速飛行で迫るアントラーにゼットンは判断が一瞬遅れる。アゴなど関係無い、その巨体での体当たりだけで叩き潰してやろう。

ゼットンはテレポート、それにバリアも間に合わないと判断すると両腕を胸の前で交差して防御姿勢に移り、衝撃に身構える。

『させません!』

「……?」

けれどアントラーがゼットンを轢く事はなかった。ティアがゼットンの前に『入り口』を創造、同時にゼットンの背後に『出口』を創造。アントラーはそのまま『入り口』に入り、『出口』から出た。

「……ありがとう」

目の前から光の残滓とティアの手から溢れる光から助けられたのだと理解したゼットンが礼を言う。

そして振り返り見上げる。視線の先には混乱して空中で停止して

いるアントラー。

「ウルトラウーマン」

『……?』

ゼットンにはアントラーから視線を外してティアに向けて呼び掛ける。ティアはゼットンの言葉に首を傾げる。あざとい。

「あの怪獣を空中に留める事は出来る?」

『はい、出来ます』

ティアという言葉はゼットンには通じない、代わりに頷く事で応える。ゼットンはティアの仕草に満足した様にふつ、と微笑むと視線をアントラーに戻して告げる。

「地上だと被害が出るから空中で留めて。本気で往くわ」

ゼットンは対人ではなくもつと規模の大きい力の持ち主だ。よつて、彼女は本気を出しにくい。本気を出す、それだけで小さな村ぐらいたら簡単に蒸発してしまう。だが、狙いが地上から離れた上空なら話は別である。

『わかりました』

ティアはゼットンの頼みに応え、両手を空に向ける。掌に光を灯すとアントラーに向かって光の粒子として放出した。

粒子は渦となってアントラーを呑み込むとその場に封じ込める。アントラーは光の渦から脱出しようともがくが身動きすら満足に出来はしない。

「……ピポ、ピポポポ!!」

ゼットンがアントラーと並ぶ高度に転移すると両腕を上げアントラーに向ける。額の結晶が強烈な光を放ち膨大な熱量エネルギーが集い、凄まじい熱気が撒き散らされる。地上で行えば周辺の建物や地面コンクリートが融解し始める熱量が平然と放たれている。

そして創り出される火球は赤から紅へ、紅から赫へ、赫から蒼へ、蒼から金へと変換かわった。

「私のカイジューソウル、怪獣である本来のゼットンは、『一兆度の火球』を放ったそうよ。さて、私の『本気』は、何度だと思おう?」

『真・トリリオンメテオ』

ゼットンが小さく笑みを浮かべ、自身の頭部程のサイズの黄金の火球をアントラーに向けて構える。アントラーが黄金火球の熱量を感じず。アントラーの脳裏には鮮明に浮かび上がる記憶が、白銀の巨人が焔を燈した左腕が己の胸に消えない大傷を残した一撃。

ゼットンの黄金火球はその巨人の焔の一撃をアントラーに連想させた。

「ギイイ！ギイイッツツツ?!?!?」

『ぐつ、ぐうう！に、逃しはしません！絶対に…!!』

アントラーは全力で光の渦から脱出しようと暴れ、ティアは逃すまいとより光を^{ちから}込めて閉じ込める。

そしてゼットンの黄金火球が今、解き放たれた。

『—————』

音が消え、空が染められ、大気が潰れる。熱が押し寄せ、光が弾け、極光が世界を支配した。

それは、そう、まるで小さな太陽。恒星が如き火の星。爆発では無い、火球に内包された超絶熱エネルギーが解放され、その全貌を魅せた結果だ。

これが彼女の、最強の怪獣娘、ゼットンの本気だ。

「はあ……はあ……」

息を乱したゼットンがふらふらと落下するのをティアが掌で受け止める。するとゼットンの変身が解ける。手に持つソウルライザーには『ERROR』という文字が点滅している。どうやらゼットンの最高出力にソウルライザーのシステムが耐え切れなかった様だ。

『……………』

ゼットンを掌に乗せつつティアはもう片方の手をゼットンに近寄せる。びくりとゼットンが反応し、ティアを見上げる。

ティアの手から柔らかな光の粒子がゼットンに振り掛けられる。粒子はゼットンに触れるとスツと溶ける様にゼットンの身体に染み込む。

「……………痛く、ない？」

痛みだけではない、疲労感や激しい動悸も治まっている。まだ立ち上がる等の事は出来ないが、身体を苛む全ての苦しみは解消された。

「ありがとう」

『……………ふふ』

「……………」

ゼットンの言葉はティアに通じるがその逆は無い。けれどゼットンにはティアが微笑んだのが自然とわかった。

良い人だ、人と言つて良いのかわからないが。とゼットンは思っていたその時。視線の隅、ティアの背後で倒れたアントラーが僅かに動いたのが見えた。

「まさか……………？」

「……………ギイチチチツツ!!」

「ツツ、危ない！」

『……………』

アントラーが急に起き上がりティアの背中に奇襲を仕掛ける。ゼットンが慌てて呼び掛けたがティアは動かない。何故？そんな思考が瞬間浮かび上がり。

『大丈夫ですよ』

「……………え？」

それにティアは応えた。ゼットンの頭に優しい女性の声が聴こえた——いや、正確にはわかったと言うのが正しい。

耳を通さず心で理解した、テレパシーだ。以前バルタン星人がゼットンに行つたそれと同じ。けれどバルタン星人のそれとは違い嫌悪感が湧く様な感觸はしないが。

『心配しなくてもいいのです』

ゼットンの心にティアは直接話し掛けた。それは時間の概念など関係無く、完成した思念がゼットンに与えられる。その為にテレパシーを受け取つた時には既に理解し終えている。

『何故なら……』

あの方が、既に来ているからですから。

——ご唱和ください、我の名を！

「ULTRAMAN Z」

「ALPHA — EDGE」

ティアとアントラーとの間に光が現れる。アントラーは知つた事かと光ごと右のアゴでティアを貫こうとして——止められた。

「ギイイ…!?!」

光が消えると其処にアントラーの右アゴを掴んで受け止める銀色の巨人の姿が。

「……ゼット、様?」

『はい、そうです。私達のウルトラマンです』

アルファエッジの姿となつたウルトラマンZがアントラーのアゴを掴んで止めている。アントラーは頭を動かしアゴを放させようとするがびくともしない。

「ジエッアー!」

「ギイイイイイイイ?!?!」

振り上げられる鋭拳がアントラーのアゴを根本付近からへし折る。不快な金切音を上げて後退する。

「ジイ…ア」

ウルトラマンZがアントラーの折れたアゴを投げ捨てるとアント

ラーに向けて歩み出す。

インナースペース内にて俺は取り戻したゼットライザーに視線を向ける。アントラーがティアさんの光の渦に囚われて暴れてた拍子に剥がれたゼットライザー、ティアさんはそれを見逃さず俺の元に届けてくれた。

「ゼットさん。俺、悔しいっす。俺一人じゃ何も出来ない。ティアさんがピンチの時もゼットンさんに任せて俺は何も出来ていない。ゼットライザーだって、ティアさんのお蔭で取り戻せた。ウルトラマンに成るのだからゼットさんが居るからこそです」

「でも、後悔も反省も後でします！今は、俺が居るから出来る事をやります！」

『!!そうだゼット！何故なら俺達は！』

がちりと心が組み合うのを感じる。強い意志が光となって身体の内底から力が湧いてくる。

『ウルトラマンなんだから!!』

——その時だった。

『……………え？…!?』

ティアさんが自身の胸を見る。そして俺達にも伝わる程の強い鼓動が広がる。

『こ、これは…！ゼット様。これを、バラージの矢を受け取ってください!!』

『(!?)』

ティアさんの胸のカラータイマーから青い光が飛び出し、俺とゼットさんの頭上で本来の姿を象る。

俺は手を伸ばし、光を掴む。バラージの矢が発する光がゼットさんの身体に流れ込んでくる。

其れは長い持ち手と先端には弓の様なエッジの、一見錨の様な姿形をしている槍みみたいな武器だ。エッジ手前には金色の球体、その下にレバーが備え付けられている。成る程、確かに大きな『矢』と言われ

ても納得出来る形をしているな。

『これは!!』

(ゼットさん、バラージの矢に付いて何かわかったんですか?)

『ああ! 光の戦士の力を感じる! 何万年も受け継がれてきたウルトラマンのチカラを!』

(何万年も、前から受け継がれてきた、チカラ)

『そしてコイツの使い方もわかる。わかっちゃいますよ!!』

自信満々なゼットさんの声。なら信じましょう!

「ギ、ギチチチツ」

アントラーがバラージの矢に恐れ、狼狽え、逃げる様に後退る。

(アイツ、怯えてる?)

『どうやらこの武器のチカラの波動を感じ取ったらしい』

(そういえば、あの怪獣はバラージの矢が見つかった星で暴れていた怪獣でしたよね)

『そうか! こいつは惑星バラージで暴れている怪獣を倒した巨人が残した物だ!』

(奴にとつちや特攻武器って訳ですね。……………決めました!)

『…?』

(この武器。俺達が扱うからこいつを『ゼットランスアロー』と名付けましょう!!)

『ゼットランスアロー……ウルトラカッコイイじゃないか!』

やった! 気に入って貰えたみたいだ。

完全に戦意が消失したアントラーとは真逆にゼットさんは興奮した様子で容赦無くゼットランスアローを扱う。

ゼットランスアローに備え付けられたレバーを一度下に引くとその上の球体が光を放ちながら回転する。するとゼットランスアローのエッジが高熱を放ち炎を纏う。

ゼットランスアローを左、右斜め下、再び左へ振るえば炎の軌跡がZを描く。そして最後にぐるりと手首のスナップでゼットランスアローを反転させて握り、大きく振り被ると技名を吼えながら投げ擲った。

『ゼットトランスファイヤー!!』

炎のZを穂先にゼットランスアローがアントラーに飛来する。逃しはしない、必中を誓い劫火を連れ、元から逃げる気の無いアントラーの胸の傷に突き刺さる。胴体にZ型の炎の跡が刻まれ、炎は怪獣の体内から発火、倒れるアントラーの全身を炎で覆い。最後に爆炎の柱を立てた。

爆炎から飛び出し軌道を描き戻ってくるゼットランスアローを右手で掴み、アントラーに背を向ける。

「キマッタア…」

よっしゃ勝ったああ!!ゼットランスアロー、めちやくちや強え!

っと。喜ぶのは後にしてティアさんと正体ばらしちやった事を説明して口裏合わせないと。

『——ゼット!何か来るぞ!』

(え?)

『ピロロロロ……』

(危っ!?)

それは青い流星。ティアさんが現れた時と似た、その色違いの青い球体が俺の頭上から降ってきたのを咄嗟に避けた。

青い球からは何処か聞き覚えのある音が鳴っている。

(…ゼットさん。これ、何かわかります?)

『……わからない。唯、恐ろしい程の力の波動を感じる』

青い球をじつと眺めていると球体の中心に赤い光が生まれ、青い球を突き破り、連続で三発の火の矢かきゅうが放たれた。

(!?ちよっ!)

『くっ!』

その時、身体が自然とゼットランスアローをレバーのすぐ手前を右手で持ち、穂先を球体に向けるとレバーを引いた。弓の弦を引く様にレバーを引けばゼットランスアローのエッジ部分が光を帯びる。レバーを放せばレバーの上の球体が回転してエッジから矢を番えた弓

の様な形の光弾が放たれる。それを火球と同じ数だけ射って相殺する。

ふう、危つねえ。今のは俺じゃなくてゼットさんが身体を動かしてくれたから対応できた。ゼットランスアローの扱いはゼットさんに任せられた方が良さそうだな。

(てゆうか、攻撃してきたって事はコイツは敵つすよね！)

『ウルトラムカつく玉ところだな！』

ゼットランスアローを構え、青い球体に向かって駆けだす。青い球体は特に何か仕出すなんて事なく、接近した俺はゼットランスアローの錨の様な形のエッジ部分の鋭利な先端をぶつけようと振り上げた。だが、

「ゼッ……トーン!!」

「ジャツ!」

青い球体が目の前で突然破裂。いや、正確には青い球体を突き破ってナニカが突撃してきた。俺は衝撃にゼットランスアローを手放し、吹っ飛ばされてしまった。

(いってえ…、なんだよ急に——)

『危ないゼット様!』

「ットオーン!!」

吹っ飛ばされた俺に追い付き、俺の肩を両手で掴み地面に押し付けるナニカ。

「ピポポポツ」

ナニカは俺の肩を放すと腹を踏み付け、見下ろしながら独特な音を鳴らす。

(なんだこれ、熱い?——!!)

謎の熱気を感じ、熱気の発生源に目を向けソレを視認する。

赤い火球がナニカの顔の前に形成されている。突然のことばかりで何がなんだか理解出来ないが今がマズい状況だというのはわかる。

「ゼエ…」

(させるかつ!)

『ゼステイウムメーザー!』

「トツ!?!」

火球が放たれる寸前、額のビームランプから碧色の光線ゼステイウムメーザーを撃つて怯ませ、その隙に両足アルファバーンキックから出た炎を推進力として脱出する。

「ジイ…ヤ」

ナニカから距離を取るとアルファバーンキックをそのまま利用して軽くジャンプして着地、態勢立て直す。

そして漸く、俺はナニカの全貌を見る事が出来た。

「ピポポポポ…ゼットオーン」

其れは黒い身体、顔と胸部に黄色の結晶がある何処か虫の様な人型の怪獣だった。その姿、独特な声。よく観ると昆虫の様な前羽があったり、より人に近い姿勢をしていたりするがとても覚えのある怪獣に似ていた。

そう、其れはまるで、

(ゼツ……ト、ン?)

最強の怪獣娘にして今現在、ティアの掌の上に居る少女に宿るカイジューソウルのオリジナル。

宇宙恐竜ゼットンに似ていた。

「ピポポポポツ」

「!!ジユワツチ!」

青い玉から現れた怪獣が空へ飛び立ち、ゼット様が追って同じく空へ飛んでいった。

『あれは…ゼットン!?!』

私を掌に乗せる巨人の声が頭に響く。あの怪獣が、私のカイジューソウルと同じゼットン。でも、過去の情報データベースで見た姿とは違う。

「アレは何?」

『……恐らく、改造された個体かと。ヴェンタリスタ星人、まさかゼットンまで。でも、ゼットンを改造出来るなんて事が出来るのはバット星人ぐらいの筈』

ウルトラウーマンが一人で呟いている。声を掛けてみるが届いていないのか返事は無く独り言が続いている。

その時だった。ウルトラウーマンの身体の端々が光の粒子となつて散り始めた。

『なっ！もう時間が!』

「…?どうしたの?」

『すみません時間が無いのです!』

「え?どういう——」

私の言葉を遮る様に女巨人の身体が金色の光へ変わる。当然掌に乗っている私は女巨人が変化した光に吞まれ目を瞑ってしまう。数秒後、目蓋越しでもわかる眩い光が消え、ゆつくりと目を開ければ、私は街の地面に立っていた。

「あの巨人は何処へ?」

周りを見渡すけど住民が避難した街に人影は無く、女巨人の姿は完全に消えてしまった。

「……………」

私はソウルライザーを取り出す。画面を見ればERRORの文字が消え操作出来る様になっている。

「ソウルライド、『ゼットン』」

ソウルライザーから光が発し、私の身体を覆い獣殻シエルを生成する。額に結晶、頭に対のツノが現れ変身完了。すぐさま浮遊して上昇、空から人影を探す。

「居ない」

街を見下ろすゼットンより遙か上空、雲と言う層を突き抜けた大空という舞台上、蒼穹を疾走する二つの影が交差した。

スピードに優れたアルファエッジのウルトラマンZと前羽の内側、背中から炎をジェット噴射して高速飛行する改造されたゼットン――

――『EXゼットン』だ。

「――ジイアッ!」

「――トオーン!」

二つの天を駆ける巨影は雲を破り、大気を裂いて、軌跡を描く。ぶつかり、交差し、隣接して絡み合う様に上昇して弾かれる様に距離を

離す。そして背を向けて飛行するEXゼットン。ウルトラマンZを追う。

ウルトラマンZは戦闘領域バトルフィールドを空へ変え、空中での激闘ドッグファイトを繰り広げていた。

「ピポポポッ…ゼツ、トーン！」
(くっ…！)

『ゼ ス テ イ ウ ム 光 線 !!』

EXゼットンは振り返り、怪獣娘であるゼットンのモノより遥かに高熱の火球を乱射する。それらをウルトラマンZは停止して必殺の光線技を溜め無しで発射し、横に薙ぐ様にして火球群を撃墜していく。

今度はウルトラマンZが反撃に頭部から光の双刃ブレイマン、ゼットスラッガーを放ちEXゼットンを狙う。ウルトラマンZの意思通り機動する双刃は飛行するEXゼットンへ切り掛かる。

一度二度三度、左右交互に、時に同時にEXゼットンの身体に攻撃する双刃だが、EXゼットンの堅い装甲を貫く事が出来ず、やがてEXゼットンの腕に破壊される。

(クツソツ！強くて硬くて速いとか反則だ！)

ゼットスラッガーを破壊した直後に背中から炎をジェット噴射による突進を寸前で躲したウルトラマンZが毒づく。

現在戦っている相手、EX改造ゼットンはウルトラマンZが今まで戦ってきた怪獣のシルバゴンよりも力が強く、ザキラよりも身体が硬く、スピードは背中中の器官でブーストしたゲネガールよりも速いと、単純でわかりやすく強さを持っている。バルタン星人の様な様々な術がある訳じゃない、否、必要無い。

「ゼットオーン!!」
「ジイア…！」

EXゼットンの背中に急激に溜まる熱反応が一気に解き放たれジェット噴射、とてつもない推進力を以てウルトラマンZに突撃する。ゲネガールのそれとは明らかに違う速度。だがウルトラマンZには通じなかった。

元よりEXゼットンがジェット噴射出来る事を知っているウルトラマンZはEXゼットンが溜めに入った瞬間に身構え身体の正面に捉えた。そしてEXゼットンの背中から炎が噴射され超加速した瞬間からウルトラマンZは、前転する様に前屈みになり両腕を伸ばす。

前へ出した両手が迫るEXゼットンの頭部に触れる直前、ウルトラマンZの両足が火を吹いた。アルファバーンキックを推進力ブーストにぐるりと前転、両手はEXゼットンの背中に触れてEXゼットンの突進を受け流す。このままEXゼットンの背後を獲り、其処にゼスティウム光線を撃ち込んでやろうと意気込んだ瞬間。

「ピポポポポ!!」

「ジアッ!?」

EXゼットンの背中のジェット噴射の炎が増大し、背後のウルトラマンZに浴びせた。

ゼットンのバックファイアに吹っ飛び、炎の熱による痛みに悶え、飛行する事が出来ずバランスを崩し乱回転しながら落下。地面に背中から墜落した。

「ジ……ィア……ッ」

時間経過によるエネルギーの消耗とバックファイアによるダメージによりカラータイマーが鳴り出す。

「ゼットオーン。ピポポ…」

ウルトラマンZを追う様にEXゼットンも降りてきた。

「ジャー！」

『ゼ ス テ イ ウ ム 光 線 !!』

「ジィアアアア!!!」

腰を上げてから、勢い良く跳ね起きると即席のゼスティウム光線を不意打ちの様に放ち、着地した直後のEXゼットンへと直撃した。

「トオ…トットツ…ゼットオーン！」

「……ジィ……ア」

けれど不意打ちのゼスティウム光線をEXゼットンは両腕を交差して受け止め、あろう事か少し後退させただけで耐え切られてしまった。

(以前のシルバゴンといい、コイツといい即席のゼステイウム光線全然効かねえ！)

倒せるとまでは思ってたが少なからずダメージは入れられると思っていた光線を防がれ、しかもピンピンしてる様子を吐き捨てる様に文句を言う。

『これが、ゼットン。……強過ぎる』

ゼットさんも目の前の怪獣の強さに弱音が漏れる。……てかやっぱりゼットンなのかコイツ。

ベータスマツシユでも力負けしそうなパワー、アルファエツジじゃないと対応出来ない飛行速度、必殺技の光線すら防がれる耐久力。へへ、相手の悪さに涙が出そうだ。

……だからって俺もゼットさんも簡単に諦められるか、怪獣娘の方のゼットンさん、それにティアアさん。あの二人がアントラーを相手に戦ってくれたお蔭で変身出来てるんだ。その俺達が負ける訳にはいかねえんだよ。

(覚悟はいいつすか？行きますよ、ゼットさん！)

『ああ、そうだな！絶対に勝つぞゼット!!』

(応ッ!!)

その時だ。強い光の波動を感じ取り、咄嗟に振り返ると地面へと突き立ったゼットランスアローが鎮座している。何故だろう、意思なんて無い筈なのに呼ばれている気がする……『これを使え』って。

『アレは……?』

(ゼットランス、アロー……バラージを救った神秘の巨人が遺した『矢』)

ゼットランスアローを通じて『俺達に手に取れ』…そう言うのか？

(ゼットさん！)

『ああ！ウルトラわかってるでありますよ！』

「ジイアッ！」

「ピポポポ…ゼットオーン！」

俺はゼットランスアローに向かって駆け出そうとした瞬間、ゼット

ンが火球を放ってくる。

(ぐっ、邪魔すんじゃないやねえ！)

飛来する火球を飛び込む様に前転して回避。直後にゼットスラッガーを放ち、これ以上妨害されない様に頭部の辺り狙って飛び回らせる。狙い通りゼットンは顔の周りを飛び交うゼットスラッガーをうざがって腕を振り回している。

今のうちにゼットランスアローの前に移動して柄を掴む。

——光は絆だ。誰かに受け継がれ、再び輝く。

『(!?)』

今の声は？ゼットさんも聴こえたみたいだし。ゼットランスアローを握った時に聴こえた。もしかして、ゼットランスアローを遺したという神秘の巨人の言葉…だろうか？

(光は絆…誰かに受け継がれ、再び輝く、か。だったらこの光、俺達で一番強く輝かせてやりましょう！)

ゼットランスアローを地面から引き抜き、両の手で長い柄をぐっと握る。

「ゼツ…トオーン!!」

「ジャ!?!」

少しゼットンから気を晒した隙にゼットスラッガーを砕き、頭部に熱エネルギーを溜めていた。ちよっ！まだ準備出来てな…!?

ゼットンが熱エネルギーを火球に換えて解き放たれそうになり俺は咄嗟にゼットランスアローを盾代わりに前に突き出す。

「ゼエ……ッ」

「——させ、ないわ…!」

「ドオツ!?!」

解き放たれる寸前の熱エネルギーに予想外の方向から火球が叩き込まれる。怪獣ゼットンのソレと比べれば小石の様に小さな火だが、間違いないくその火球は怪獣娘ゼットンの放ったモノ。別のエネルギーを受けた怪獣ゼットンの火球は形を保てず暴発し、ゼットン自身がダメージを負った。

「この星にゼットンは一つで十分。ゼット様、今です…!」

「ジィア」

めちやくちや有難い！ありがとうございますぞゼットンさん！

(ゼットさん！)

『応ッ！ウルトラ任せろ!!』

身体から俺の感覚が離れ、代わりにゼットさんが動かす。等身大、且つウルトラフュージョンしてないゼットさん本来オリジナルの姿の時と近い感覚。

ゼットさんはゼットランスアローのレバーを一度、二度と引いた。エッジ部分が赤ではなく青い光を帯び、二度振り回してから相手に差し向ける。するとエッジ部分に沿って、より大きな光の弓が展開される。弓があれば当然弦もあり、其処に氷の矢が番えられ、左手を柄に沿って動かせば釣られて氷の矢も引き絞られる。

(凍え)

『凍て付き』

「トットツ……ピポポポ！」

氷の矢の冷気を察知したのだろう、ゼットンは慌てた様に熱エネルギーを溜め始める。ハッ！今更気付いた所で遅いんだよ!!

『(砕け散れッ!!)』

『ゼッ ト ア イ ス ア ロ ー !!』

光の大弩おおゆみから夥しい凍気を内包した冷獄の氷矢が飛翔する。其れは未だチャージ段階のゼットンをその火球ごと氷塊に呑み込み凍て付かせ、氷に囚われた全てが粉々に砕け散った。

ぐるんとゼットランスアローを一度回して一言呟いた。

「決ジイヤッタま」

「あ、ティアアさん！」

「！……ゼット様、ご無事で」

誰にも見られない様に変身を解いた俺はティアアさんと合流した。

「それで、話というのは何でしょう？急ぎと言っていましたか」

「それは、その。……実は——」

俺はティアアさんが地球人に変身している事をバラしてしまった事

を説明した。

「……………なる、ほど」

「すみません」

「いえ、私を助ける為にしてくれたのでしよう？感謝こそしても怒るなんてのは筋違いです」

「……………ありがとうございます」

「こちらこそ」

優しい笑みを浮かべるティアさん——シズクさん。やっぱり、良い人だよな。聖女と呼ばれるのも納得だ。……………なんでゼットンさんはティアさんを邪険にするんだろうか？

まあ、それよりも今は今後の事を考えよう。

「これからどうしましょうティアさん」

「……………その、がーるず？が何のリアクションもしてこないとは思えません。向こうからコンタクトを取ってくる筈ですのでそれを待ちましよう」

「了解です。それじゃあ一先ず、此処から離れた方が良いですかね？」

「そうですね。一緒に居るのを見られるのは余り良いとは思えませんから」

「はい」

「——みつけた」

その声は頭上、空から聞こえ、*「がちん」*と固まる俺とティアさん。二人揃ってゆっくり見上げる。

「……………」

其処にはスマホの様な機械。アキが言っていたソウルライザーを片手に俺達、正確にはティアさんと画面を見比べているゼットンさんが。

「貴女がシズク・ウルティア。——ウルトラウーマンね？」

「……………はい」

ティアさんが観念した様にゼットンさんの問いを肯定する。ティアさんの反応に満足したのかソウルライザーを仕舞うと次に俺に視線を向けた。

ぎくりと震える。

「その君は？」

拙い！此処の答えようで俺がウルトラマンってのがバレる!?

「俺は、えっと、そのお……」

「——彼は私を心配してくださったのです！」

俺が返答に滞っているとティアさんが割り込んでくる。

「心配？」

「はい。彼は私が変身して怪獣を相手にしているのを見て、優しい方なのです」

……なんか、恥ずい。

「変身したのを見た……？という事は君がアギラに連絡してくれた人？」

「え？あ、はい。そうです」

「そう。…手間が省けた」

「え？」

ゼットンさんが俺の右腕の手首を優しくだがしつかりと掴む。

???どゆこと？

「貴方にも一緒に来てもらおうわ」

「……………」

ゼットンさんの言葉に俺、そしてティアさんの口から声が溢れた。

怪獣の魂（前編）

「……………」

ティアさんと共にゼットンさんに連れられてGIRLS本部前に入るのはこれで二回目だな。前は……確かバルタン星人事件の時だったな。バルタン星人と戦ってるゼットンさんの横をすり抜けて……。

（不法侵入じゃん!? 火事場泥棒ならぬ火事場侵入じゃん!!）

ヤバイヤバイヤーバメ☆ 本気と書いてマジと呼ぶくらい本気ヤバイ。

（……黙ってたらバレんやろ）

（なんでしよう？ 今、旗が立った気がしたのですが。……何故、旗なのでしよう？）

隣で小さく首を傾げるシズクさん。どうしたのだろうか？

それにしても……うん、可愛い。

GIRLS本部に入るとまず最初に清潔感のあるエントランスが広がる。バルタン星人の時は無我夢中で目に入らなかつたけど、壁とかにゼットンさん、レットキング、キングジョーさん、それと初めての怪獣娘として認識されたベムラーさんと有名な怪獣娘の写真が大きく展示されてる。

「——ようこそおいでくださいましたウルトラウーマン様。私はこのGIRLS本部に所属しているピグモンの怪獣娘の『岡田 トモミ』と申します」

あつちをキョロキョロ、こつちをキョロキョロと周りを忙しなく見入っていると声が掛けられる。

声の主に視線を向けると、GIRLS制服を着たポリューミーな赤いツインテールでどこか幼き印象の懐かせる容姿の女性、岡田さんが真剣な、けれど何処か緊張感を滲ませた表情を此方——正確にはシズクさん、いや、光の国のウルトラウーマンのティアさん——に向けていた。

岡田さんが現れた事によりゼットンさんが一步下がって俺達の後方に立った。もしかして逃げ道を塞ぐ為……的な意味の行動だろうか？

(警戒、されてるって事ですよね)

俺は口を固く閉じ、シズクさんに視線を向ける。

声を掛けられたシズクさんが岡田さんと目を合わせて数瞬経ってから口を開いた。

「ご丁寧にありがとうございます。私はこの宇宙とは別の宇宙にあるM78星雲、『光の国』出身の【涙を語り継ぐ者】。呼び難い様でしたら『ウルトラセイントティア』——既におわかりかもしれませんがこの姿の時は『シズク・ウルティア』と名乗らせていただいております」

「ではシズク様とお呼びしても？」

「様…は必要ありませんよ。『シズク』で構いません」

「では……『シズクさん』とお呼びしますね」

そう、ティアさんの名前が柔らかな笑みと共に告げられる。

ティアさんが友好的な性格と分かったからか岡田さんは露骨に安堵した様な表情をしている。

「それと、貴方もよく連絡してくださいました。貴方のお蔭で我々はシズクさんという地球を守ってくくださった方を失わずに済みました」「え？…あ。ど、どうもありがとうございます、ます？..」

しまった、シズクさんと岡田さんの会話に集中していたから急に話を振られた時に反応が遅れて間抜けな返事をしてしまった。

「ふふ、いえ。それではいつまでも立ち話なのも何なので奥の部屋にご案内しま」

「ゼットン」

岡田さんの言葉を別の声が遮った。

聞き覚えのあるその声の方は振り返る。

「あ。アキじゃん」

怪獣娘姿ではなくGIRLS職員の制服に身を包んだアキが息を荒げながら俺に詰め寄る。

『アキじゃん』…じゃないでしょ!? 聞いたよ、また怪獣が現れた現場に居たって! 危ない事しないでって何度言ったらわかるんだよ!!」

「……………」
「心配させないですよ…っ。ゼットは普通の人、なんだから」

「……………」
「悪い」

「謝るなら、最初から、しないで…!」

アキの懇願ことばに俺は何も言えない。俺がウルトラマンである以上、戦わない”なんて選択肢は無い。けれど、今のアキの様子を見れば、嘘なんかつけなかった。

望んだ返事を返せない俺にアキは「バカッ、ばかっ」と胸を力無く叩く。

「無茶ばっかして。いつもいつも!」

「……………」

「バルタン星人の時だってそう! 一人で此処までやってきて」

「え?」

「あ」

「……………」
「もしかしてあの時の?」

「……………」

アキの言葉に岡田さんが反応し、ゼットンさんは過去の出来事から俺を結び付け、シズクさんだけが何が何だかわかってないから首を傾げている。

——うん、可愛い (現実逃避)

「……という事が以前」

「……………」
「ふふふ、なるほどお。そんな事が、あつたんですね」

ゼットンさんから説明を受けた岡田さんから凄みが放たれる。怒ってる、間違いなく怒ってらっしゃる。ヤベー、ウルトラ震えてきやがったぜ。

絶対の大ピンチにとある単語が頭に浮かんだ。

「嗚呼、フラグ回収。早かったな」

俺は、きつとティアさんと話す為に用意されたであろう部屋に引き

摺り込まれ、ティアさんとの会話よりも先に説教される事となった。中で待ってた人からの視線が痛かったです。ハイ。

「——ほら、依頼通りブツ、持ってきてやったぞ。ええつと、何だっけソレ？」

場所は変わり、無人地帯の今じゃ廃墟となり誰にも使われていない工場の中にて三人の人影が向き合っていた。白い髪をした不敵な笑みを浮かべる少女と少女の一步後ろにまるで従者の様に立つ美女、対面するのは黒髪の青年。計三人、その内の女性二人は怪獣娘だった。

美女の怪獣娘は少女の怪獣娘の言葉に、手に持つケースの蓋を開け、男性に見せながら告げる。

「シルバゴンそれとゴルドルスの細胞、です」

「そう、それ。銀ギラ怪獣と金ピカ怪獣。銀ギラの方は、既に死体が散らばってたから簡単だったけど金ピカの方は大変だったんだぞ。ま、それでも撰ってくる辺り、流石アタシらつて言った所だな、ブラツクキング？」

「ええ、その通りですナツクル御嬢様」

自己自賛する白い髪に赤いレンズのゴーグルを額に上げる、胴体を晒した赤い結晶が散りばめられたコートの様なモフモフの獣殻シエルを見纏う少女、暗殺宇宙人『ナツクル星人』の怪獣娘。

それと、ナツクル星人よりも暗い灰よりの白髪に額にツノ、黒光りする怪獣と騎士をフュージョンアップさせた様な意味ヒキニの感じられない鎧アールの獣殻シエルを装う美女、用心棒怪獣『ブラツクキング』の怪獣娘。

「それで、報酬の方だけど……」
「……」

白髪の男は無言で懐からアイテムを取り出すと取手に付いてるトリガーを押した。

『——』

明かりの少ない暗い空間で、もぞもぞ、ぞぞぞ、と影が蠢き、膨れ、

広がり、

『……!』

飛び掛かった。

「……は?」

「なっ!?」

二人の怪獣娘に影——『シャドウ』が覆い被さる。二人はシャドウに足掻くが完全に呑み込まれると、やがて動かなくなる。

ナツクル星人とブラックキングを呑み込んだそれぞれのシャドウは暫し、その場で佇んでいたが、男がもう一度アイテム——『シャドウゼットライザー』のトリガーを押すと、シャドウは溶ける様に地面に沈む。

「……………」

「……………」

覆うシャドウが消え、二人の怪獣娘は朧げな瞳で立ち尽くしている。

男が二人に歩み寄りながら右手の指先をこめかみに当てる。次の一瞬、男の顔半分がブレる様が変わった。金の髪と赤い瞳の怪人へ、だがすぐに何事もなかったかの様に戻ると、怪獣娘二人にとある写真を見せた。

「こいつをつかまえろ」

「……………」

「……………」

エコーが掛かっているかのような不気味な男の声に二人は無表情のまま頷くと男に背を向けて歩き出す。その後ろ姿を眺めながら男の口端が僅かに、けれど歪に吊り上がる。

「次の、実験だ……」

「……これが、私がこの地球に来た理由です」

シズクテイアの口から事の端末がGIRLSのピグモン、ゼットン、エレキング、レッドキング、ゴモラのベテラン組。そして、アギラ、ウイ

ンダム、ミクラスの三人、最後にメンバーの中で一番最近GIRLSに所属したサンドリアス。計10人の怪獣娘が人に擬態したウルトラマンの宇宙規模スケールの話聞き終えた。無限に広がる可能性世界マルチユニバースによる別次元の存在と光の国のウルトラマンにより構成された宇宙警備隊。侵略者連合と宇宙警備隊の諍いの果てに起こった次元を隔てた戦争。そしてティアの居る事による地球の現状の説明。

「つまり、今日現れた二体の怪獣、それと先日現れた怪獣は貴女がその厄介なストーカーみたいな宇宙人。ヴェンタリスタ星人によって送られた怪獣だという事ね」

「はい」

「……なんて無茶苦茶で傍迷惑な話。怪獣を送り出すヴェンタリスタ星人もそうだけど、貴女さえこの星に来なければ少なくとも三体の怪獣に街が脅かされる事はなかったわ」

「え、エレエレ。そんな言い方は……」

「いえ、構いませんトモミさん。彼女の言葉は正しいです、私が地球を巻き込んでしまった所為でこの星の人々を危険に晒してしまつたのです。こんな事を言つても如何にもならない事はわかつています。ですが、どうか謝らせてください」

深く頭を下げるシズクの様子に先程彼女に文句を叩き付けたエレキングを含めた全員が何も言えなくなつた。

彼女の瞳、行動、声音から彼女が心から謝っている事が伝わつた。彼女が本気で地球の命を想つてくれているのがわかつた。

「はあ……いいわ。これ以上文句を言つた所で如何にもなりはしないのだし」

「ですが」

「これ以上貴女の謝罪に時間を割いている暇は無いの。それよりも今は“これからどうするか”について話すべきよ」

エレキングは合理的だ。シズクの謝罪を時間の無駄だとキツパリ遮り今、必要な情報を求めた。

「現在この地球で活躍している、あのウルトラマンについてわかつている事全てを教えて」

怪獣の魂（中編）

「……あの、というのは」

「この状況で惚けるの？」

スツ、とエレキングの目が僅かに細くなり威圧感も増した。

ティアはエレキングの視線を受けて一度目を伏せると強い意志を宿して目でエレキングの瞳を見返し、そして答えた。

「あの方は私と故郷を同じし、宇宙怪獣ゲネガーグを追って現れた宇宙警備隊の隊員。名前を『ウルトラマンゼット』と言います」

「……そう。ならこれからは仮の名称であつたけど正式な名前として呼称出来るわね」

「ゼット。それがあの方……コホン、ウルトラマンの名前」

ティアの発せられる情報に皆が真剣に聞き入っている。特にゼットンには髪を掻き上げて露出させた耳を澄ましている。

「ゲネガーグっていうのはウルトラマンゼットの前に現れたあの怪獣ね。でも、なら何故ウルトラマンゼットはゲネガーグを倒したというのに地球に残っているの？」

「……あの方はゲネガーグを追って地球に現れましたが一人ではゲネガーグを止める事が出来ませんでした」

「二人では？」

「……はい」

エレキングの疑問にティアはその端正な顔を僅かに曇らせた。

「言いづらい」或いは「言いたくない」という想いを露骨に表す表情の変化から視線が集中し、やがてティアは観念した様に言葉を発した。

「あの方は……この地球に生きる、とある少年——コホン、男性と一体化して力を合わせる事でゲネガーグを倒す事が出来ました。あの方は力を貸していただいたお礼としてこの地球を守る為に一体化した男性と共に戦っているのです」

「……」

ティアの言葉、それはGIRLSのメンバー達にとって完全に予想

外の事だった。ウルトラマンと共に戦う人間がいる、その事実はとても重大だ。

もしもその人間とコンタクトを取り、そして協力関係を結ぶ事が出来ればGIRLS、延いては地球にとって大きな戦力となる！

「そ、そのウルトラマンゼットと一体化した人というのは、どなたなのですか！是非教えて頂きたいのですが！」

ゲネガールグから始まりヴェンタリス星人による送り込まれる怪獣しかくの襲来。それは半世紀以上の月日を経て今新たな——否、嘗ての大怪獣時代の再来を示している。

地球を舞台とした怪獣大戦争に過去に現れた正体不明の巨人の様な漠然とした地球外の助力ではなく、明確な味方であるウルトラマンの力が在れば多くの怪獣娘や地球上にある命を護る事が出来る。怪獣の魂と常人離れた異能を持っているとしても彼女達はヒトだ。本来の怪獣に比べれば遥かに矮小で非力な存在でしかない少女達に前線に立たせる事を肯としない、寧ろ忌避するピグモンは彼女中では既に協力を前提とした問いをティアに向けて訊ねた。

「……………」

ピグモンの内心を見透したティアは小さく俯き、一度、ゆつくりと瞬きを挟み——光涙を語り継ぐ者の国の聖女として少し、ほんの僅かに哀しげを表情を浮かべてから、ピグモンに向けて言った。

「申し訳ありませんが私には答える事が出来ません」

「……………え？」

岡田さんの説教が終わった後、俺は現在会議が行われている大部屋から出てすぐ近くのGIRLS所属の怪獣娘の方々や職員さん達が活用している休憩スペースには紙コップに入った熱いお茶を飲みながらぼけーと呆けている。ティアさん、上手く誤魔化してくれてるかなー。

やっぱり、正体がバレるのはマズかったりするんだろうか？……するんだろうなあ。だって今まで地球にやって来たウルトラマンの

方々って皆正体不明だったらしいし。テレビとかだつて「普段は透明で見えないだけ」とか「自分達とは僅かに次元のズレた場所に居り、干渉する時だけ次元の壁を超えて現れる」とか「人間に擬態して紛れている」とか色々な説が浮上してたし。

ただまあ、現状俺に出来る事なんか何も無い訳で、簡単に言えば。「すつ……げえ暇」

ぽけーを通り越してポケーと内心「ばなな」とでも言つてそんな頭の悪い人になっているとふと時計の二本の針が午後5時を指し示しているのが見て取れた。

「あ、大怪獣ファイトの時間だ」

俺以外に此処の休憩スペースを使っていない為、何も気にする事なく壁に備え付けられたテレビサイズだと中々大きいモニターの電源を付ける。

本来なら日本最大の動画共有サービス『シユワシユワ動画』で配信されている大怪獣ファイト。シユワシユワ動画を観ること自体は無料で可能だが高画質版や過去の配信を観るには会員登録しないといけない。

「まあ、GIRLSの施設の此処だと関係無い話だけだな」

画面にはこれでもかと超綺麗な画質で今回のファイター両者が映し出されている。バトルフィールドとなっているのは元々はアメリカ領土だった火山島の北側に広がっている火山の噴火や溶岩の影響により不毛な大地となった荒野。その一部を怪獣の捕縛に使われていたと電磁シールドを活用して用意されている。

そんなバトルフィールドに立つのは二人の怪獣娘。両者其々をアップし、テロップと実況アナウンサーにより紹介される。

身に纏う獣殻シユエルはどこか骨の様な質感を感じさせるフード付きのパーカーだけ、それもチャックをほぼ全開にした様な見た目に、両足のブーツに右手が無骨で鋭い爪を武器とする『キリエルクロー』へと変化した浅黒い肌の少女。深く被ったフードで顔を隠し、唯一露出した口元には不敵な笑みを浮かべる、怪獣娘。

炎魔戦士『キリエロイド』

もう一人は白い内側の髪を覆う様な黒髪に赤色を基本色とし真ん中に黒い丸が描かれた何処か鳥類の目を思わせる髪飾りを左右対に付け、メガネを掛けた少女。背中にはマントの様な漆黒の翼、胸部には厚みのあるプロテクターを装備し、腿部分が膨らんだ袴の様な獣殻シエルは何となく近代的な天狗といった容姿をしている。おへそ丸出しのお腹を大きく露出した獣殻シエルに身を包み、メガネを人差し指でクイツと上げて知的な笑みを浮かべて対戦相手に目を向ける怪獣娘。

破滅魔人『ブリッツブロッツ』

互いに白と黒のカラーリングの怪獣娘が試合開始を告げるゴングを今か今かと待ち侘びているのが映像越しに伝わる。当事者ではなく傍観者である筈の俺がゴクリと緊張に息を呑む。

そしてカーンツ！とゴングが鳴った。

『ハッ！』

『ツ!?!』

初動は全く同時、だが持ち前のスピードの差からブリッツブロッツが先手を制した。正に疾風、矢の如し。亜音速の一撃を浴びせ、そのまま自身の領域——即ち空へと飛び上がる。

キリエロイドもブリッツブロッツのスピードに驚愕しながらも何とかガードを挟む事には成功し、攻撃自体が軽かった事も合わさってダメージはほぼ無しと行って様子だ。実際は攻撃をくらった直後も半身が僅か踉跄めいただけで今も平然と空に浮かぶブリッツブロッツを見上げている。

暫しの睨み合いを経て、ブリッツブロッツが再度仕掛けた。空中で姿勢を変えキリエロイドとは反対方向へ空を蹴り、広がった翼が大気を斬り裂く。再びキリエロイドに一撃与える。

『ぐ……っ』

『ふふ、まだまだ。わたしの速度はこんなモノではないぞ』

『チィ……！』

正面に捉え、尚且つ来るとわかっていた。のに関わらず捉えられない速度にキリエロイドが舌打ちする。そんな様子からブリッツブロッツは果敢に攻め続ける。自前の機動力を活かしたヒット&ア

ウェイ。

『だったらー!』

『むっ』

キリエロイドが何かしらの予備動作に入る。警戒して攻撃の手を止め上空へと避難するブリッツブロッツを視界に収めつつキリエロイドは全身に気合いを込めた。

ぼう、ぼうぼう、とキリエロイドの周りに火の粉が舞う。そして豪ごうっ!と彼女の右キリエルクロー手に業火が灯る。

『ハアアア……ッ!ハアア!!』

右手に宿る業火を天に向けて解き放った。ひゅー、と花火の様に打ち上がる炎。そして、

『弾けるオオオ!!』

『なっ!?!』

ばああんっ?!?! という音と共に爆発し、怒涛の様に炎で空を覆い、埋め尽くした。

堪らないといった様子で押し寄せる炎から逃れる為に慌てて地上へと降りる。

『フツ、どう。お得意の空を失った気分は?』

『ふふ、まんまとしてやられたよ。だが、たかだかわたしから空を奪ったぐらいで勝った気になつていいのかい?』

ブリッツブロッツはまたもメガネをクイツと上げると翼を広げ、足先が僅かに大地より浮く。そして姿勢はそのまま高速でスライドするかの様にホバー移動しキリエロイドの背後を取る。地に墮ちようとも天狗の疾風、変わる事なく。

『でも、空に浮かばれ続けるよりはマシ。こっからはアタシの領域』

『ふはっ、いいだろう。わたしの武器はこの翼だけではないと教えてやろう』

身体の重心を下げてぐつ、と地面を踏み締めるキリエロイド。

対してブリッツブロッツは両腕を左右に広げてから前方伸ばし右手を上、左手を下に置く。

『ツッ!イイヤアア!!』

『ハアアアッ!!』

二人同時に前へ駆け、キリエロイドが先手として蹴りを放つがブリッツブロッツは軽やかに身を翻してこれを躲し、背後を取ったブリッツブロッツが回し蹴りを放つがキリエロイドも後ろ回し蹴りで迎え打つ。両者の蹴りがぶつかり、凄まじい音と衝撃が趨る。

繰り返される格闘戦はほぼ互角といった感じだった。ブリッツブロッツは自慢の機動力と浮いているが故の予測の難しい変則的な技で攻め。キリエロイドも得意の蹴り技を主体としつつ鋭利なキリエルクローによる鉤爪や突き、そして格闘技に炎を纏わせた攻撃などで負けじと応戦する。

『……………っ』

『はあ…はあ…』

互角の格闘戦は互いの体力をこりこりと抉る様に削り、両者荒い息遣いで向かい合う。

特に疲労とダメージから自慢のスピードが落ち、尚且つキリエロイドが慣れてきた事もあり序盤とは逆転してブリッツブロッツの方が押されている。

『チエアッ!』

『ぐあっ』

『!?! ここだアア!!』

ブリッツブロッツがキリエロイドの蹴りを横腹で受けて一瞬体幹が崩れる。その一瞬の好機をキリエロイドは見逃さなかった。

『ハアッ!』

『がっ!?!』

体幹の崩れたブリッツブロッツの腹をキリエロイドが鋭い一撃で蹴り飛ばす。身体を「ぐ」の実に曲げて後方へと吹っ飛ぶブリッツブロッツを背を向けた直後に連続バク転で追う。

『ハアア…!』

『な!拙——』

『——セヤアアアッ!!』

吹っ飛ぶ身体が地に落ちるよりも素早く接近し、跳ね飛ぶキリエロ

イドを視認したブリッツブロッツが何とか翼を広げて逃れ様とするが時すでに遅い。空中で身体を捻ってスクリュー回転し、そのまま両足揃えた蹴りがブリッツブロッツの腹を捉える。キュルギユルギユルツ！とエゲツない音を立てながら硬い巖の地面に押し付け、尚も回転は止まらない。

ブリッツブロッツの半身が地面に半分埋まり、漸くキリエロイドがブリッツブロッツを踏み台に跳び上がり離脱する。くるりと空中で身を翻し、そして可憐に着地。そしてアナウンサーの実況。

『決イイま……ツツたああああ?!?!? キリエロイド選手必殺のドリルキックコンボがブリッツブロッツ選手に炸裂ウウウ!! ブリッツブロッツ選手、動かない！ ノックダウン!! 勝者は炎魔戦士キリエロイドだアアア!!』

モニターには息を切らしながらも左腕を掲げ、やり切ったと言わんばかりに天を見上げるキリエロイドの姿が。

すると、ぽろりとキリエロイドのフードが取れて素顔が露わになる。まるで炎の様なぼさつとしたボーイッシュな金髪と今まで戦いぶりとは裏腹にとろんと垂れ目に碧眼がよく映えた幼さの抜け切らない童顔。鋭い蹴り技を得意とし、悪魔を連想させるフードに被った姿は「カッコイイ」と人気だが、その素顔はとても可愛らしい。

『……? ……?!?!?!』

最初、フードが取れた事に気付かず。違和感から自身の顔をペタペタと触り、阻む物が無い事から素顔が晒されている事を察すると顔を真っ赤に染めてから両手で覆い隠し、声にならない悲鳴をあげて猛スピードで走り去っていった。瞬く間にカメラに映らなくなるほど遠くに行ったその速度はブリッツブロッツの最高速度にも負けてはいないのでないかとネットで話題になり、暫くの間キリエロイドが大怪獣ファイトに登場する事が無かったのは別の話。

「いやあ、凄かったなあ」

高画質で観る大怪獣ファイトはやっぱり凄いな。俺も会員登録しようかな? 月額550円(税込)かく、うーむ。でも画質ぐらいしか恩恵ないんだよなあ。

「——あ、見つけた」

「…え？」

くだらない事で腕を組んでウンウンと唸る俺を背後から呼び掛ける声に振り返ると、そこには怪獣娘の、方…が…？

知らない。テレビとかでも見た事の無い怪獣娘さんだ。

「えっと。どうされました？」

「……………」

「??？」

取り敢えず用件を訊ねてみたけど返答は無く、晴れた日の空の様な水色の髪的那个人は無言でじつと俺を眺められておられる。

流石に対応に困り、周りに助けを求めて視線だけを彷徨わせるが、まるで誰にも干渉されない様に仕組まれたみたいに人が居ない。

「ふふ、すみません。普通の男の子だな、と思いましたが」

「……………それってどういう？」

「コホン、失礼しました。初めまして、私は会議が行われている間、貴方の対応をする任を申し付けられた者です」

その人は側頭部に対になる角を生やし、銀の様な金の様な髪色と金色の瞳にこれまた凄い獣殻かっこう。言い方悪いけど大事な所だけ隠し、スツツケスケの腰布と複数ある尻尾がそれぞれが全く別の感情を持っている様に動いている怪獣娘さんだった。

怪獣の魂（後編）

うーん。なんだか不思議な人——怪獣娘さんだ。

彼女は背凭れの無い椅子を用意すると俺の対面に座る。

「それでは、少しの間ですがお話でもしましょうか」

「〴〵お話ですか？」

「ええ。貴方の活躍は識った時に、話してみたいと」

「えー、まあ、……俺は構いませんよ」

……むう、なんだろう。俺を見つめる怪獣娘さんの目が、何か、見透かされてる様な？……怪獣娘の容姿が優れているからそう感じるだけなんだろうか？

ま、取り敢えず気にしていてもしょうがないので俺は怪獣娘さんとの談笑に花を咲かせる事にした。

「——だよねえ。やっぱ二度寝の気持ちよさは格別だよね」

「わかります。休みの日とかついついしちゃうんですよね」

なんか、打ち解けたわ。

怪獣娘さんも初めの頃の敬語が綺麗さっぱりなくなり砕けた口調で話してくれる様になり、俺もついつい他愛もない話に笑ってしま

う。
「そうそれ！二度寝どころか四度寝、五度寝とかしちやって。寝てばっかの所為で昼なのか夜なのかわからない時があって、私って普段は引き籠もりがちなのよねえ」

「あ、あはは。それは……凄い、デスネ」

怪獣娘さんとしての話の内容は「好きなものは何か」とか「普段は何してるのか」とか。

その結果わかったのは怪獣娘さんは取り敢えず寝る事が好きだという事。多分だけどほっておくと一日中寝てるんじゃないかと思うぐらい寝る事が好きだという事がわかる。

「ふふふ、ああ、こんなに誰かと話したのは本当に久しぶり」

「え？他の怪獣娘の方や職員さん達とかとは話したりされな

か？」

「ん？…んん。実は私、世界中の怪獣娘の中でも最古参なの。だから近くの人達は私を怖がってしまうから、離れた所に住んでるのよね」
「……………」

「こうして人が居る所にやってくるのも本当に稀な事だし、話し相手がないの」

寂しそうな顔だ。最古参の怪獣娘、きつと色々大変だったのだろう。本人からしたらいきなり自分の姿が変わって普通だとありえない様な力を持ってしまつて戸惑つた事だろうし、周りも完全に未知な存在の彼女を恐れてしまった。誰が悪い訳でもない、唯、間が悪かつただけ。

「じゃあ、俺が話し相手になりますよ」

「え？」

「少し待ってください」

鞆からノートを取り出しビリツと破く。紙片に数字を書いていき、書き終えると怪獣娘さんに手渡す。

「これ、俺の連絡先です。話したい時にでも電話してくれたら話し相手になりますし、暇な時にでも連絡してくれたら応えます。俺の幼馴染もここに所属してる怪獣娘なんで、そいつや他の怪獣娘の子と一緒にでも遊べば貴女の友達も増えますよ。そうすれば、もっと楽しいですよきつと」

「……………ふふ、はは、あははははー」

ポカン、と口を開けて呆けた顔をする怪獣娘さん。けれど、すぐに笑い出し目尻に涙を溜める。

「ふふ、ふふふ。何だか、ナンパみたい」

「!? いやーちがつ！別にそんなつもりじゃ」

「冗談だよ、冗談。貴方が私の事を想つて言ってくれた事はよくわかってる」

くすくすと笑う彼女になんだかなあ、と思い後頭部をがりがり搔く。

「ふ、ふふふ、ふふふふふふ」

「笑い過ぎですよ」

「ご、ごめん。ふふ、でもありがとね。……連絡先、貰うね。…多分、すぐには連絡出来ないけど」

「大丈夫ですよ。余裕ができた時や暇な時にでも連絡してくれば」
「……うん。ありがとう、大切にするよ。代わりに私も、今すぐは無理だけど、いつか大切なモノを君に渡すよ」

怪獣娘さんは、俺が渡した連絡先を胸の谷間にしまう。…え？ マジ？ 現実リアルでそんな事する人いるんだ。

ハッ！ いかんいかん！ あんまり女性の胸元をガン見するのは失礼だ。俺はあえて視線を逸らしてから返答する。

「……た、大切な物って、そんな大袈裟な」

「いや、きつとそう遠くない内に必要になるよ」

「……………？ それってどういう？」

「おや、どうやら終わったみたいだね。それじゃあね」

「え？ ……あ!？」

彼女の言葉通り会議中だった部屋の扉が開き、一瞬そちらに意識が逸れ、視線を戻した時には彼女の姿は無かった。

「い、居ない」

な、なんなんだあの人？ ……岡田さんに聞いてみようか。あの人は此処に所属している怪獣娘の事ならなんでもわかりそうだし。えっと、名前は――

「あれ？ ……そういえば名前、聞いてないや」

「ふふふ、イイね彼」

トコトコトコ、歩く足音が響く。

……………？

「ん？ うん、気に入っちゃった」

……………！

「え？ 『じゃあどうして渡さなかったのか』って？ もう、それとこれとは話が別だよ。…これは私個人の感情でどうにかしていいもので

はないんだ」

「一体誰と話しているのだろうか？ 其処に彼女以外の生命体は居ないというのに。」

「でも、大丈夫。彼は誰かの為に動く事が出来る、きつと手にする資格を持つているよ。あとはその時を待つだけ」

左手に少年から受け取った紙片れんらくせきを持ったまま、右手を胸の前に運び掌を開く。

手の上には三枚のウルトラメダルが在った。

「邪悪な神を討ち祓った大いなる古代の光、鋼の魔神を撃ち砕いたウルトラマンダイナ遥かなる宇宙の光。そして我と共に星を守護した偉大なる大地の光。この、神秘の光が輝けるその時を」

ぎゅつ、と掌のメダルを再び握り締め、少年へと想いを馳せる。

「彼は『光に選ばれた人間』、その一人なんだから」

彼女が見上げる、視線の先には水面。其処はとある湖の底にある洞窟。地球が創った、大地の守護者の褥である。

「ただ一つ、不安な事があるとすれば——」

嘗てと違い、今の自分に出来る事などたかが知れてる。それでも彼女の顔には憂いが浮かぶ。心配を表す表情で見詰めるが見えるのは水面越しの夕空だけ。嗚呼、嘆き、自分に——身体を共有する八つの頭に吐露する。

——彼は若過ぎる、事かな。

五十年以上の月日を経てた。これまでも、これからも、自分の為す事は何も変わりはない。ヒトの型にまで堕ちた大地の守護者は何を視る。

——時と場所は変わる。

ピグモンの問いを光の国の聖女が拒否した、その直後へ。

「…な、ぜ、です、か……？」

震える声をなんとか抑えようとしながら、ピグモンはティアに問い掛ける。だが、涙を語り継ぐ者は申し訳なさそうにしながらも言葉を

返す。

「——彼は、私の言葉に答えてくれないからです」

「……は？ どういうことだよ？」

ティアの言葉にいち早く問いを返したのはレッドキングだった。そしてその疑問はこの場の全員の総意でもあった。

「私は、光の国では『聖職者』と呼ばれる立場に居ます」

「……………」

『聖職者』、というのはただの役職ではありません。『聖職者』というのは私達が聖者であると同時に種族を表す呼び名でもあるのです。そして私達は別種族宇宙警備隊のウルトラ戦士のウルトラマンにとっては疎まれる存在なのです」

『……………』

それは予想出来なかった答えだった。

ティアは続ける。

「私達聖者は宇宙警備隊のウルトラ戦士と異なり戦闘能力の低い種族です。ですが、それは能力がないのではなく戦闘行為を禁じているからです」

元々、光の国の聖者には他のウルトラマンには無い超能力チカラがあった。訓練次第では似た能力を習得出来るかもしれないが聖者のチカラとは精度も強さも異なるチカラが。

「私達——ウルトラ聖者には、他の生物から生命を奪うチカラを有しています」

『……………』

ティアが言い放ったそれは、ピグモン達の想像を絶する恐ろしいチカラであった。

「ウルトラ聖者には戦う事を禁じられています。例えこのチカラを使っていないとしても戦いとは相手の命を奪う為の行為に他なりません。……ですが、ウルトラ戦士にとってウルトラ聖者は『大いなる力』を持っているにも関わらず、宇宙の平和の為に使わない集団として見られているのです」

一応謂っておくと完全に禁じられている訳ではなく、たった一つの

条件を満たせば使用する事が許される。だが、その条件というのが『悪に堕ちたウルトラマンを殺す時』なのだ。

宇宙警備隊員からすれば同族を殺す事にしか能力を使わず、そしてウルトラ聖者の能力が必要な時に彼らは役に立たなかった。それは嘗て光の国の歴史で唯一の叛逆者、悪に染まり復讐心に狂った闇の巨人『ウルトラマンベリアル』の襲撃時にウルトラ聖者達は能力を使う事すら出来ていなかったのだ。

一度目のベリアルの襲撃時、ギガバトルナイザーより召喚された100体もの怪獣が行手を阻みベリアルの元まで辿り着く事が叶わず、結局ウルトラマンにとっても伝説の超人である『ウルトラマンキング』によってベリアルが封印された。

二度目のベリアルの襲撃時、ウルトラ聖者達はベリアルにより力の源でもありM78星雲を照らす人工太陽であるプラズマスパークを奪われ、それにより発生した寒波により星ごと凍らされた。

一度にならず二度までも。光の国の聖職者は己が定めた使命を果たせていない。

「……………」

沈黙が流れる。ティアの沈んだ雰囲気、ピグモンや他の怪獣娘達も何も言う事が出来ない。

この時、ティアは嘘を付いた。『真実』を無関係な情報で覆いて隠した。ウルトラマンが地球の兵器に成り果てる末路を避ける為に。

ウルトラマンは確かに人類の味方だ。だが、それは人類を守る為であり、人類を侵略者に仕立て上げる為でもない。人類の戦力として他惑星を攻撃する為でもない。

「で、ですが！ あの方がこの星を守る為に戦っている事に変わりはありませんし、私も力の限り助力させていたたくつもりです。戦う事は出来ませんが、治療や防御、それに拘束などの光線は修得しています。それに怪獣に対する知識もあります！」

「…………… はい、是非」

そして別に彼女達に手助けを施す事で先の話の続きを断つ。こう

する事でティアは彼女達から『ウルトラマンZとコンタクトは取れなかったがウルトラセイントティアを味方に迎え入れる事ができた』というひとまず安堵出来る状況を築き上げた。

「それで、一つお尋ねしたい事があるのですが？」

「……？ はい、一体なんでしょう？」

「スペースジョーズ・ザキラ。……私を追って地球に現れた怪獣の残骸に取り憑いた『怨念』をアナタ方はどう認識していますか？」

「——……もしかして、『シャドウ』の事？」

今、この時、この瞬間、怪獣娘は『人類の天敵』、怪獣娘にしか倒せない怪物の正体を知る事になる。

「アレは、怪獣の怨念。ウルトラマンに倒され、肉体を失い、行き先もなく佇む『怪獣の魂』の負の面です」

ティアやゼットが元々居た宇宙。

ティガ、そしてダイナが戦った宇宙。

ガイアの生まれた宇宙。

コスモスが守る宇宙に、ネクサスがスペースビーストと戦った宇宙、ニュージェネレーションズと呼ばれる新世代のウルトラマンが各々で活躍した宇宙。

宇宙とは人智を、遙かに超えた広さと可能性を内包している。そして、それらの宇宙の数少ない共通点の内の一つに怪獣墓場に繋がる門という物が在る。コレは死した怪獣の魂が行き着く終着点。あらゆる宇宙とはズレた狭間にあり全ての宇宙と門を通じて繋がり怪獣の魂が亡霊となって悠久の眠りに付く亜空間。

「ですが、この宇宙にはその門が無いんです。ですので怪獣の亡霊は行き場を失いその場に留まる。そして何十年と長い時を重ね、その星に根付き、生命の流れの一部と成ったのでしよう。……ですが、地球は怪獣の亡霊から純粋な魂と星に不純物と判断されて弾かれた怨念に別れた。アナタ方の言う『シャドウ』とは怪獣の魂から分離させられた——怪獣という媒介を失った暗黒面」

シャドウは怪獣の無い亡霊。怨念が人間を襲うのは復讐だ。怒りと憎悪で形成された意思なき本能に近い在り方そのものだ。

そして怪獣娘がシャドウを倒す事が出来るのは根源的には同じ存在であったからだ。怪獣を斃せるのは怪獣の、或いは巨人の力だけだ。もしかしたら車など大岩といった質量をぶつけければ倒す事はできるかもしれないが、それもただの人間にできる事ではない。

怪獣娘の内に宿るカイジューソウルが人類の敵たるシャドウと元は同じ存在。その事実を識った者の内には気付いた者もいるだろう。元々が同じだったのなら怪獣娘とシャドウが合わさった時、一体どうなってしまうのだろうか、と。

そしてその事実を知り、暗躍する者は居る。ウルトラマンと同じく別宇宙から現れ、自身の愉悦の為だけに蠢く邪悪な魔物が。

ウルトラマンゼットがブルトンに転移させられた地球がある宇宙。他の宇宙には無い『怪獣娘』が居る宇宙——以後『GIRLS SPACE』と仮称する——にて暗黒の宇宙空間を眩く照らす程の極光が爆ぜた。

「ギイイイイツツ!!!」

『ぐううっ……ガッ!?』

極光の正体は電撃であった。

電撃の中心に苦痛に喘ぐ人型の巨人——ウルトラマンが。そのウルトラマンに巻き付く鈍い鉛に近い銀色の尾。どうやらウルトラマンを襲う電撃はこの尾を伝い放たれている様だ。

『ぐう……ハアア!!』

「ギイイイイ……!」

ウルトラマンが無しかしらの方法で自身に巻き付く尾に傷を付け、締め付けが弛んだ瞬間にエネルギーを解放、電撃をレジストして弾き飛ばす。

『ツッ!アアアアアッ!!!』

そしてウルトラマンは電撃を発した尻尾を敢えて掴み掛かり、全身の捻りを使い大きく振り回し、近くの衛星へと叩き付けた。

ウルトラマンから離れた事でその全貌を目視出来る。それはとて

も巨大——巨人と呼ばれるウルトラマンが見上げる程の巨体の大怪獣であつた。

尻尾と同様鈍い銀色の身体に金色の横長の目とその左右に小さな目があり、計三つの金眼がウルトラマンを睨む。背中には対となる大きな翼を生やし手足には青く光る爪。ファンタジーによくある西洋のドラゴンの様な姿形をした怪獣。

「キィイ、ギィイィイ!!」

『くっ……!』

衛星へと叩き付けられた大怪獣にウルトラマンは背を向けて宇宙空間を飛翔する。大怪獣も金切り声の如き咆哮を上げてウルトラマンを追い掛ける。

『くそっ、コイツに構っている場合じゃないのに……!』

このウルトラマンは、とある人物ウルトラマンを探していた。

宇宙警備隊大隊長——『ウルトラの父』から護衛の任務を受け、だが、途中で侵略者連合の襲撃に遭い、逸れてしまった。なんとか連合を退け痕跡を探しながらここまで来たが、大怪獣の追撃により搜索は困難を極めている。

「キィイィイィイ!!」

『ツッ! こうなつたら!!』

背後から迫る大怪獣にウルトラマンは振り返り、覚悟を決めた。

大怪獣に立ち向かい倒す、戦う覚悟だ。

『ジーツとしてても、ドーにもならねえ!』

ウルトラマンと大怪獣の姿が重なり閃光が爆ぜた。